

369.06
A25
2ウ



0038769000

0038769-000

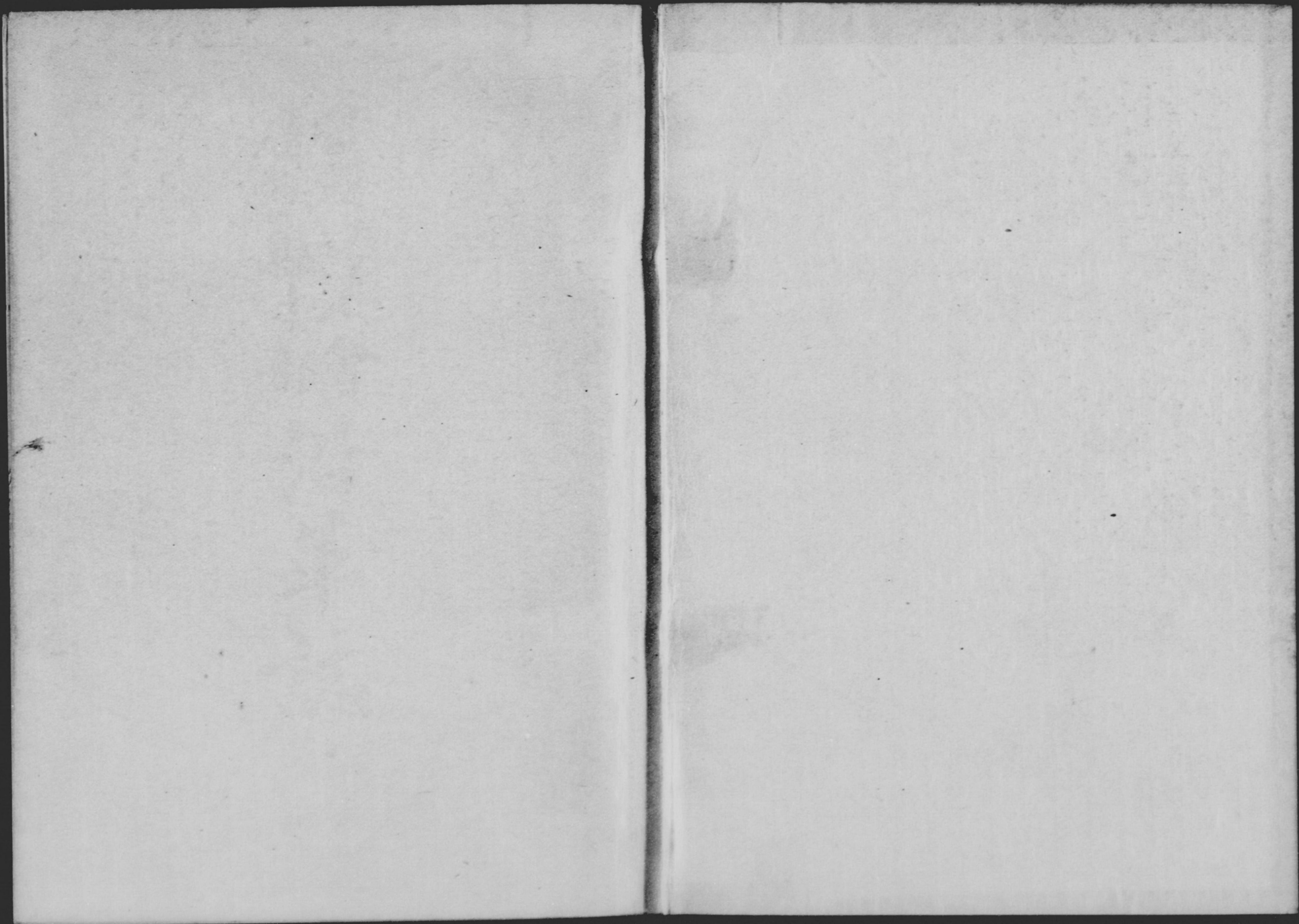
369.06-A25-2ウ

愛国婦人会広島県支部沿革誌

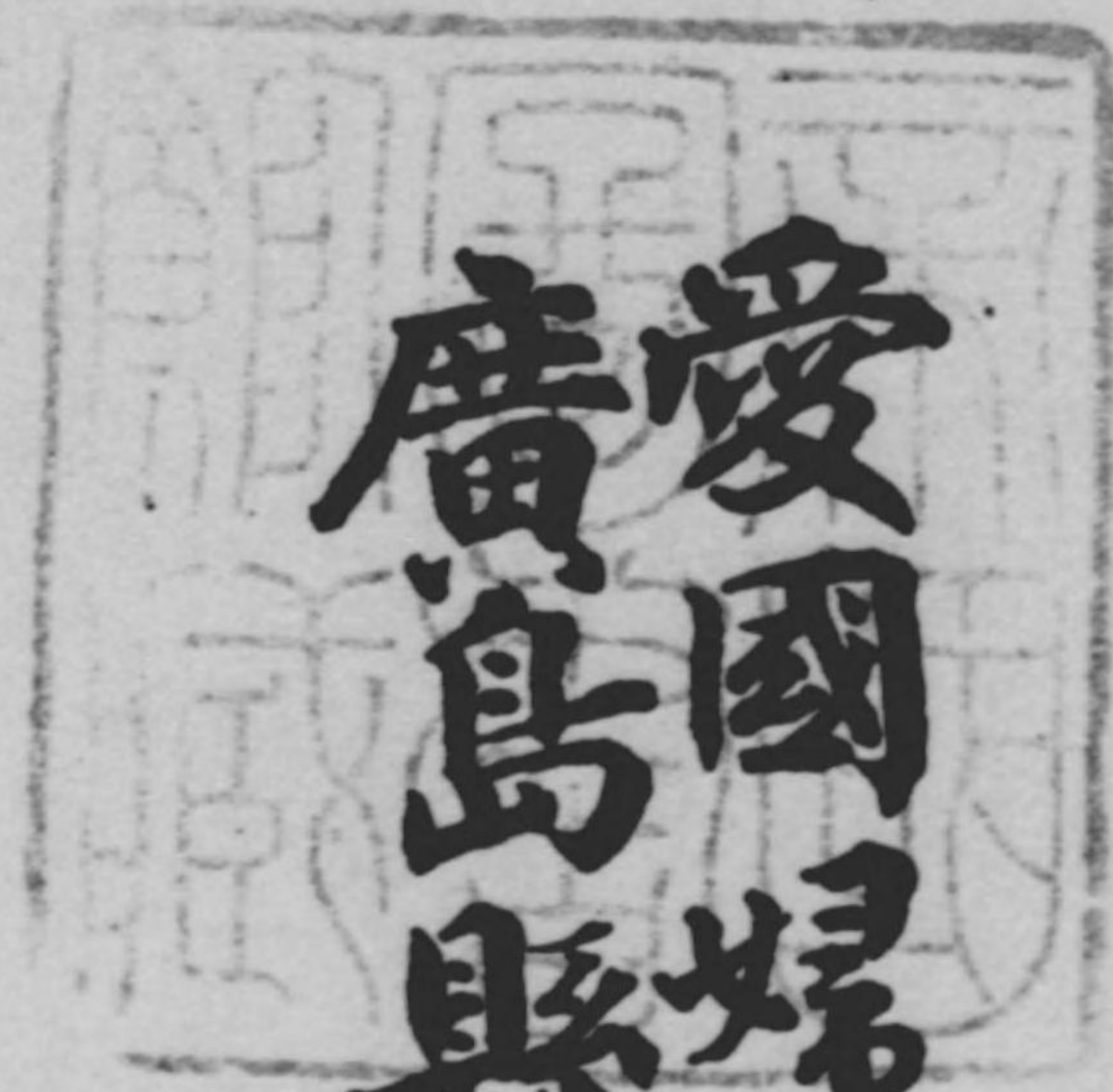
愛国婦人会広島県支部

昭和18

AGH



369.06
A25
2



愛國婦人會
廣島縣支部
沿革誌



975
109

卷頭目次

真

- (1) 光榮に輝く
- (2) ゆかりの人々
- (3) 思ひ出の数々

一、御沙汰書

明治三十七年二月二十九日 天皇陛下より御下賜金……………一

明治三十七年二月二十九日 皇后陛下より御下賜金……………一

昭和十三年十二月二十三日 天皇陛下より御下賜金……………二

昭和十三年十一月十三日 皇后陛下より御下賜金……………二

二、御令旨

明治三十八年四月二日第四回本會總會に賜はりし御令旨……………三

日露戰爭中本會の功績に對し下し賜ひし御令旨……………三

昭和十四年五月本會第三十八回總會に賜はりし御令旨……………四

三、御諭旨

明治三十六年三月二十二日日本會第二回總會に賜はりし御諭旨……………五

明治三十七年一月二十二日各職員に賜はりし御諭旨……………五

明治三十七年十月全國府縣知事上京の際賜はりし御諭旨……………六

明治三十八年十月四日戦後遺族の救護に關し賜はりし御諭旨……………七

明治四十年四月十八日顧問たる全國地方長官招待席上にて賜はりし御諭旨……………七

昭和八年十一月七日日本會機構更新に關し賜はりし御諭旨……………八

昭和八年十一月七日愛國子女團に賜はりし御諭旨……………九

昭和十二年九月十一日支那事變に際し賜はりし御諭旨……………九

昭和十六年三月二日日本會創立四十周年記念式に賜はりし御諭旨……………一〇

四、御歌

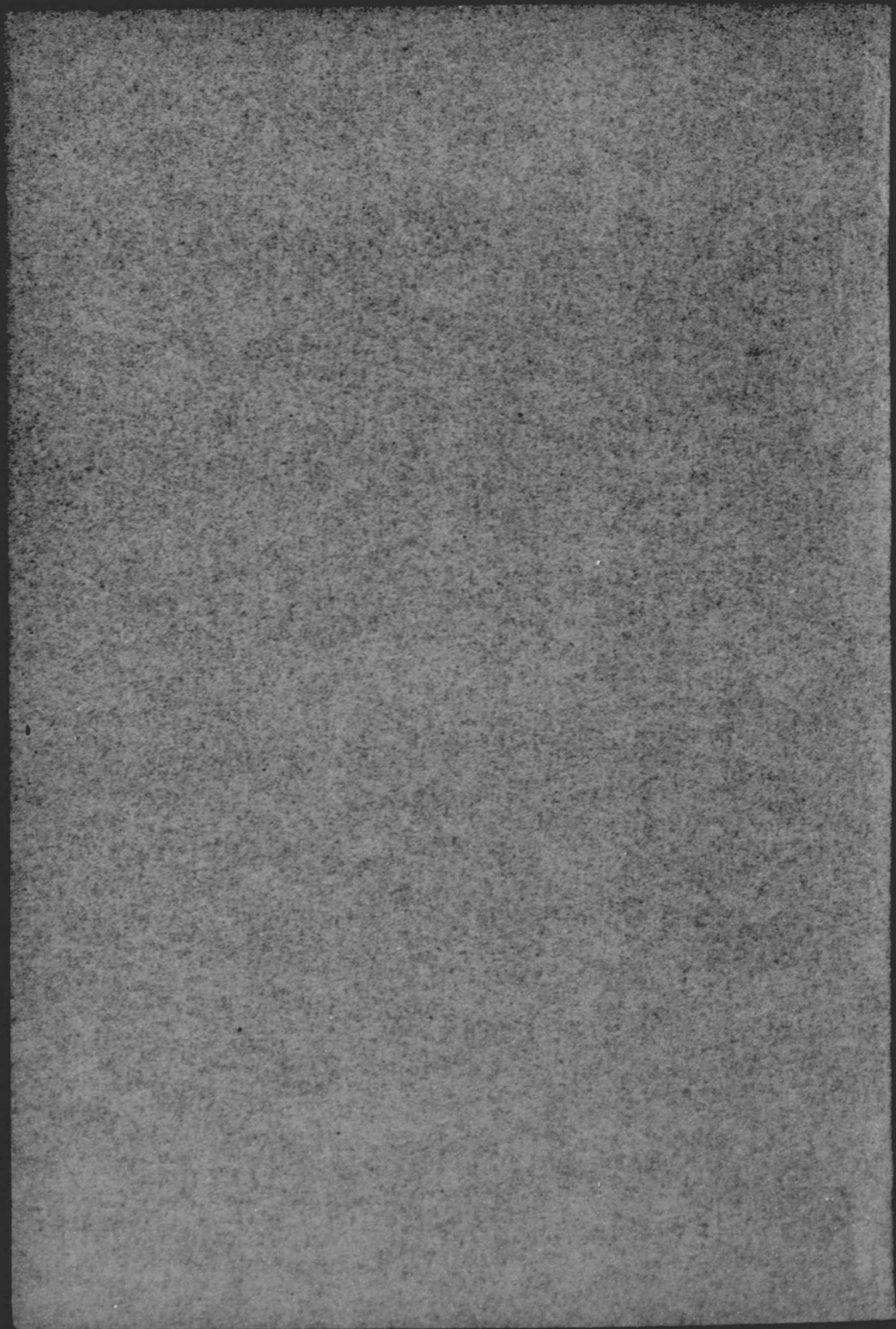
皇后陛下より賜はりし御歌……………二

總裁閑院宮妃殿下より賜はりし御歌……………三

總裁東伏見宮妃殿下より賜はりし御歌……………三

103
250

光
榮
に
輝
く





下陸后皇の啓行會總會本回七十二第

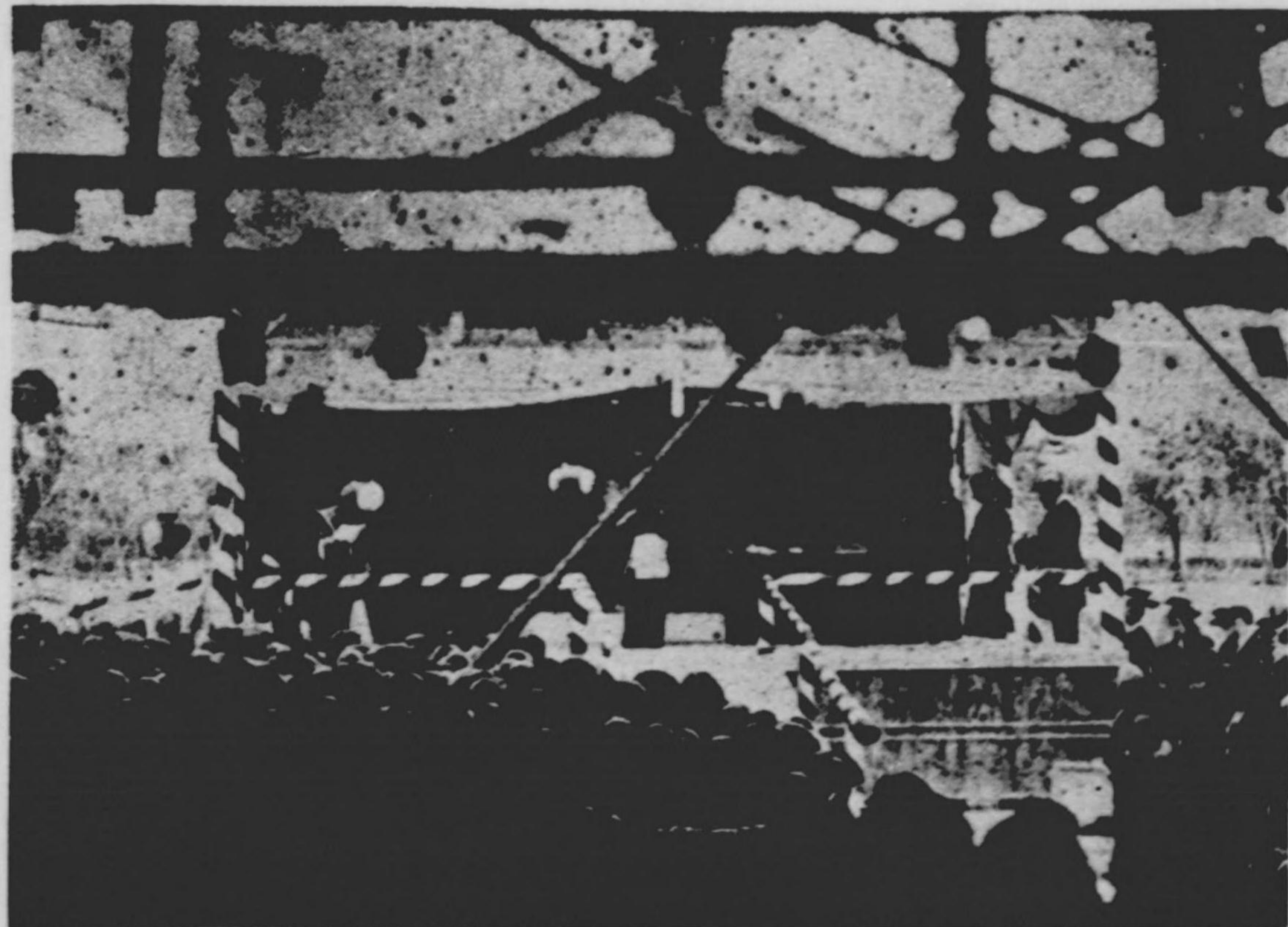


初代總裁院官載仁親王妃智惠子殿下



下殿子周妃王親仁依宮見伏東裁總代二第

總裁院妃殿下臨
明治十四年第一回支總部會



(昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢査場)

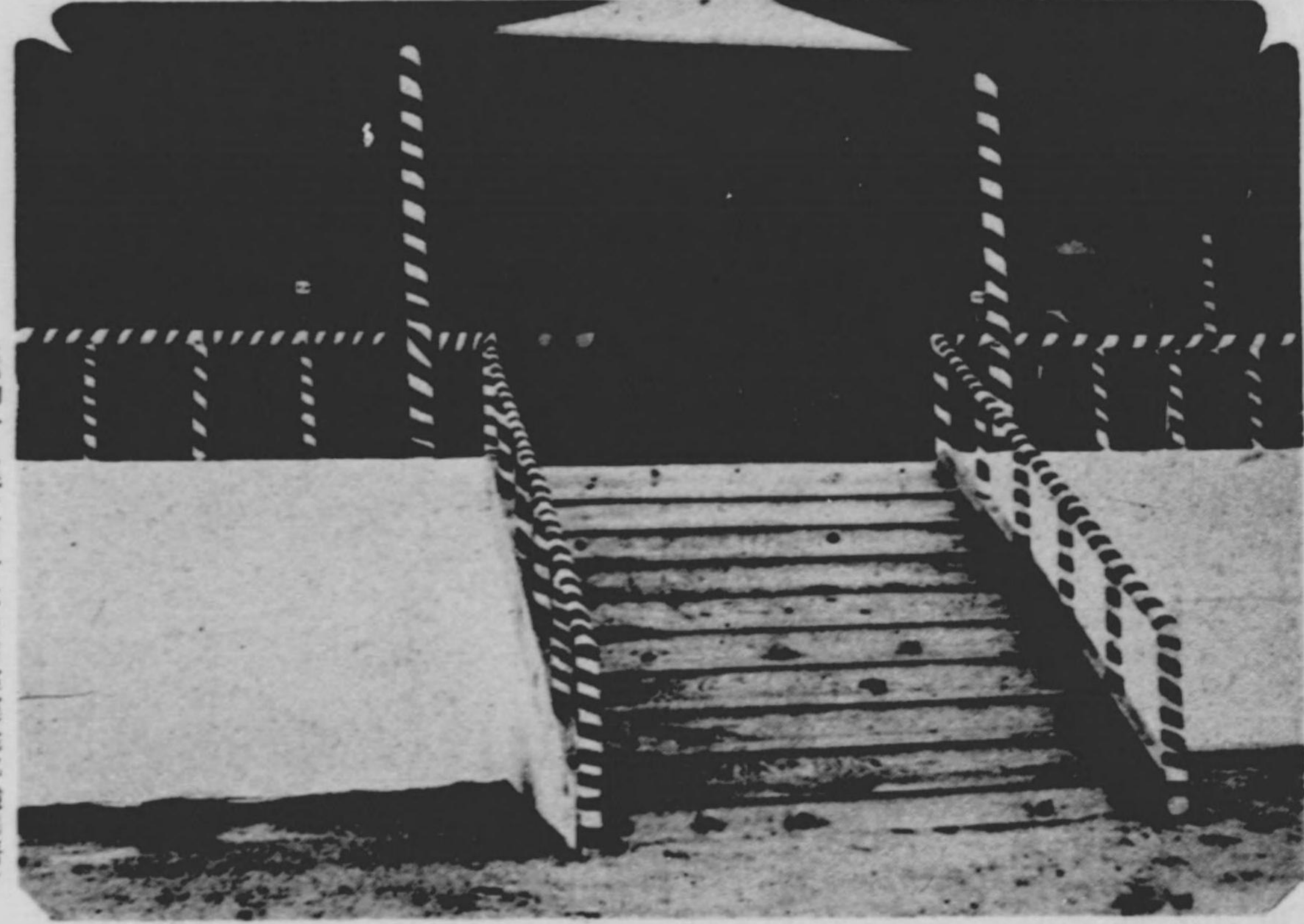
式場之光景
(御臨旨に對し部長答辭)



(昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢査場)

總裁殿下心中之光榮記念寫眞
(右功章拜受者)

總裁東伏見宮妃殿下臨
昭和二十三年三月三日
會總部支回三第年二十和昭



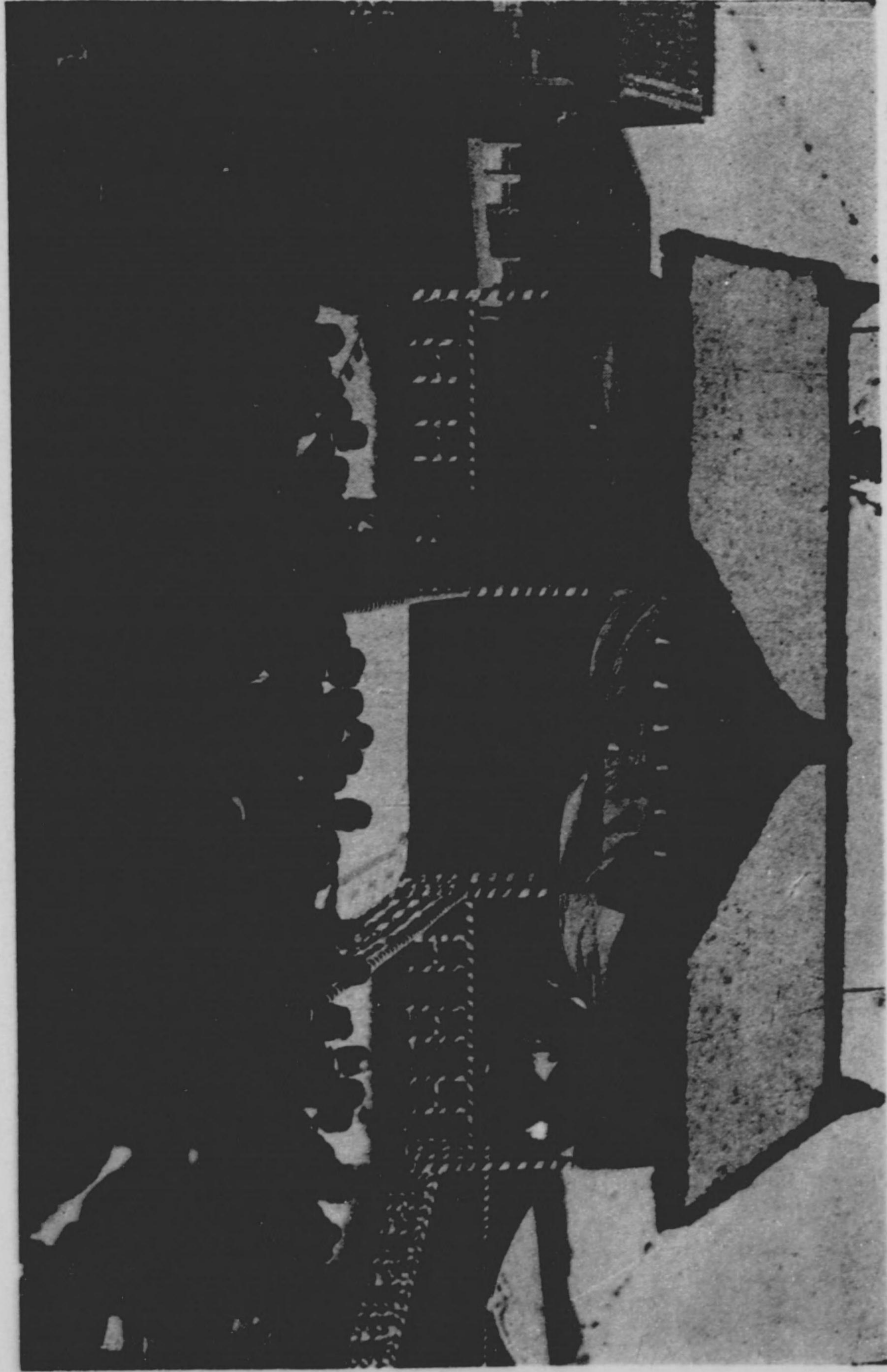
式場御座所（廣島二中運動場内）

（昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢閲済）



會場雨中の壯觀

（昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢閲済）



總裁閑宮妃殿下臨
大會正三年二回支總部會

（昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢閲済）

總裁殿下支部會館に御成

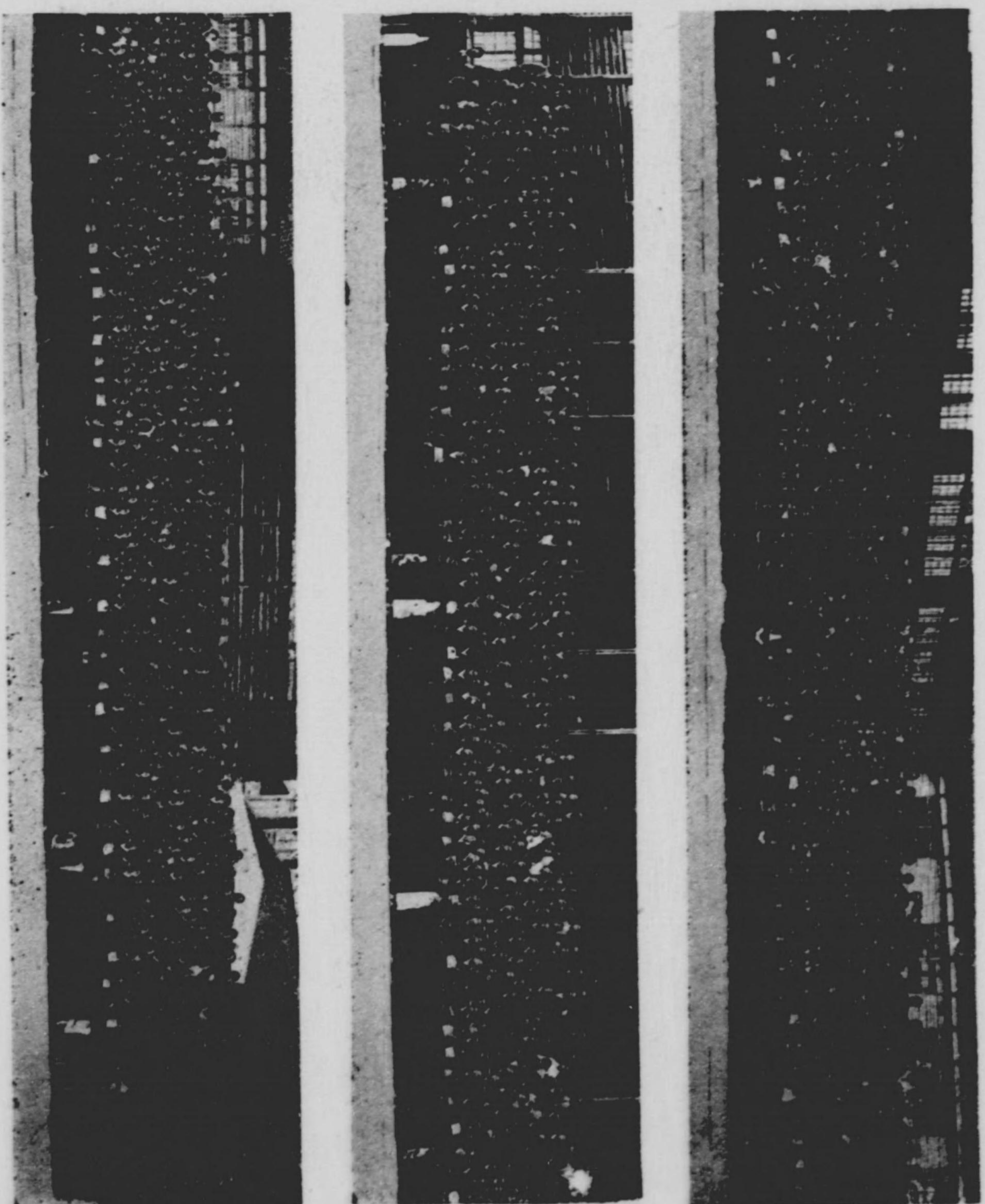


(昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢閲済)



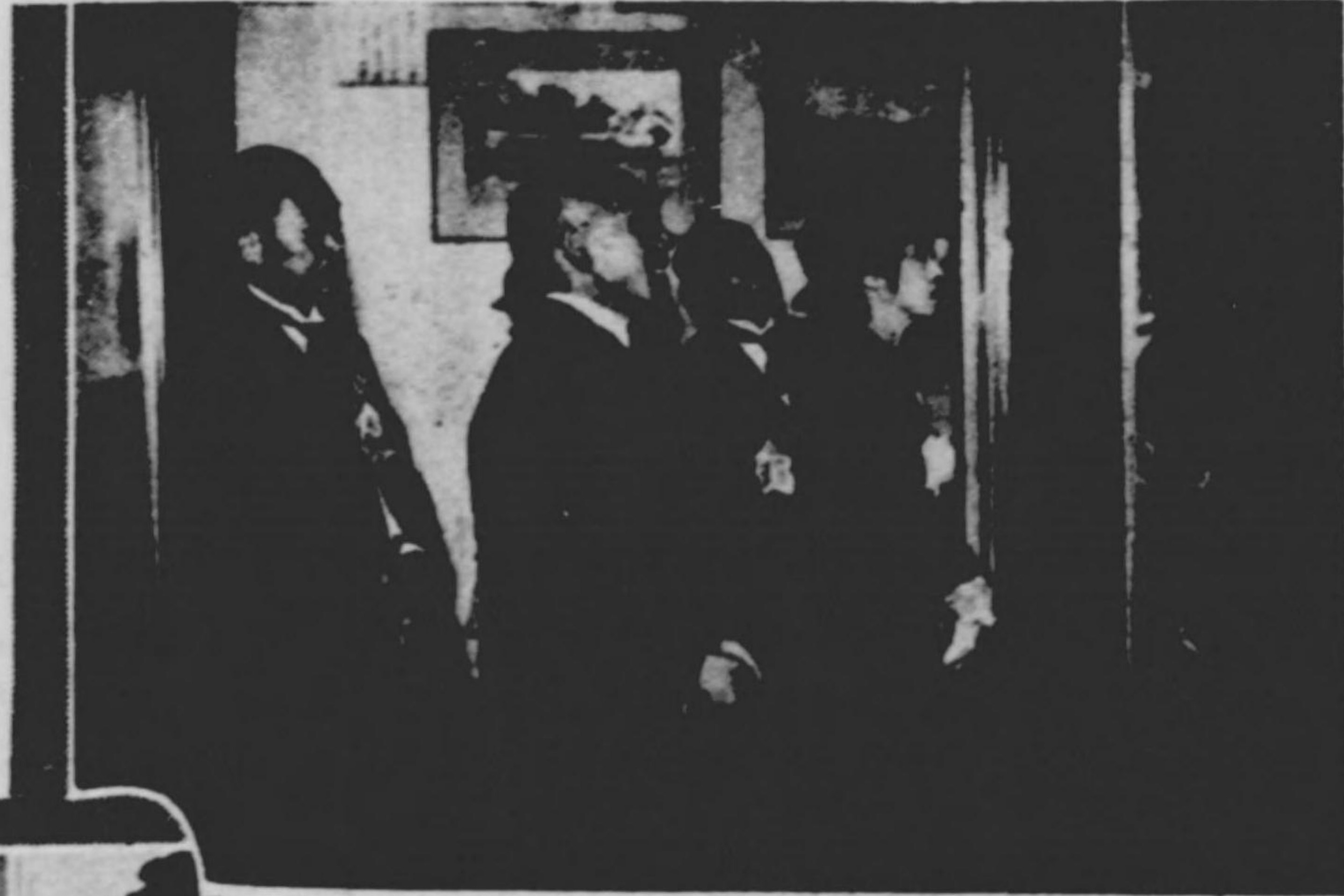
總裁殿下有功章御親授

總裁殿下を中心に有功章新受者記念撮影(廣島縣女校庭)

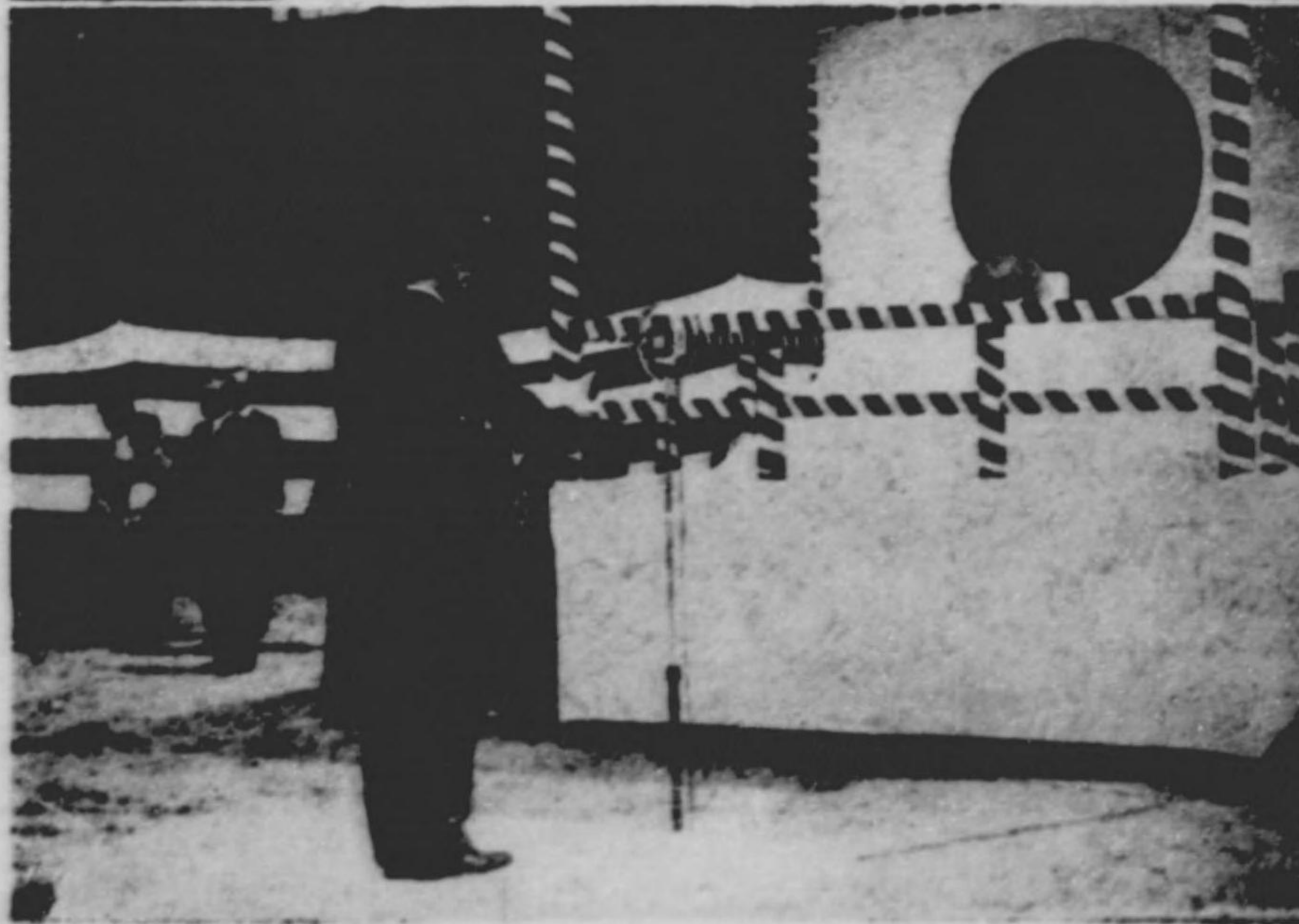


(昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢閲済)

總裁殿下山陽記念館御成



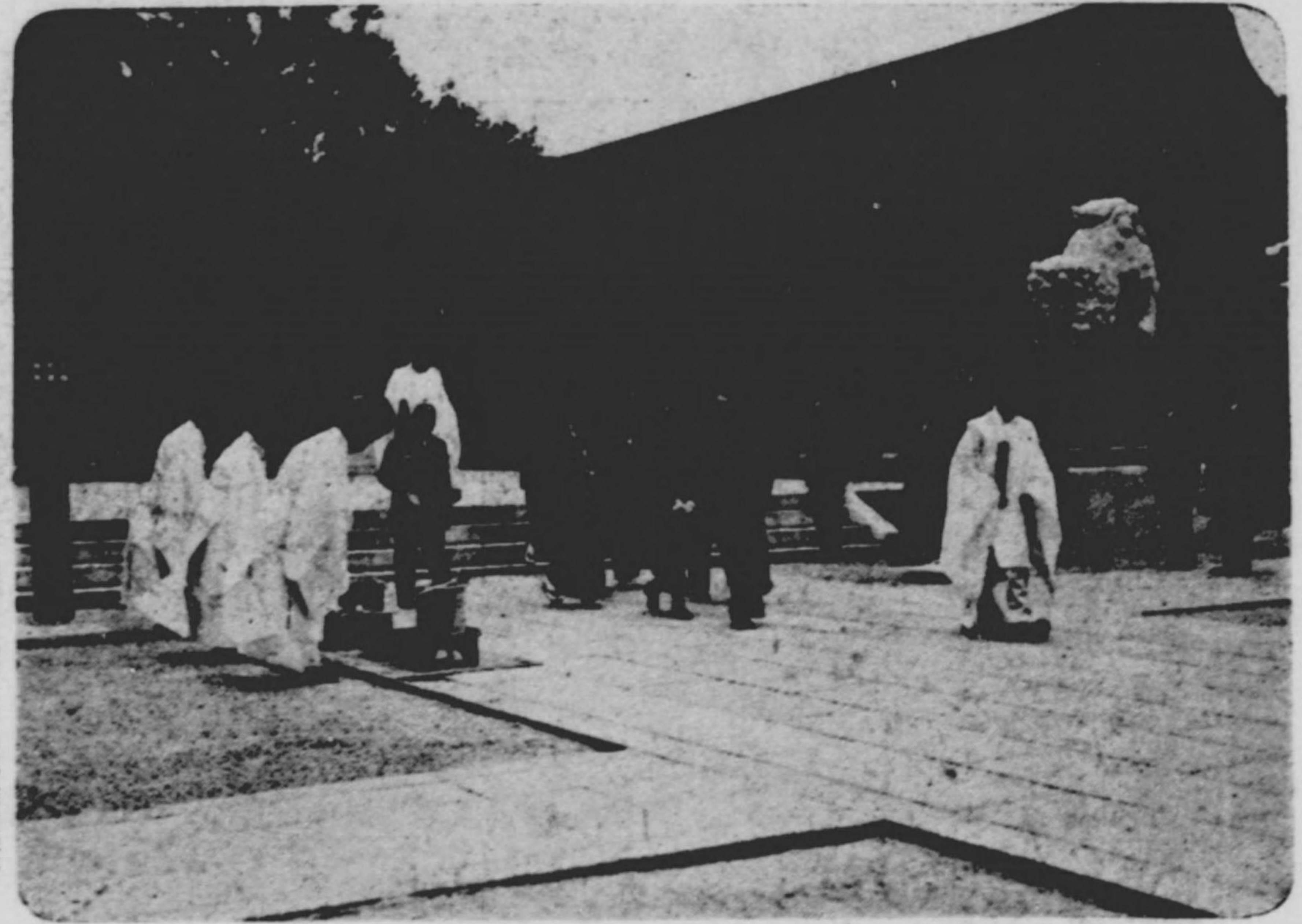
總裁殿下御茶會御成(廣島縣女)



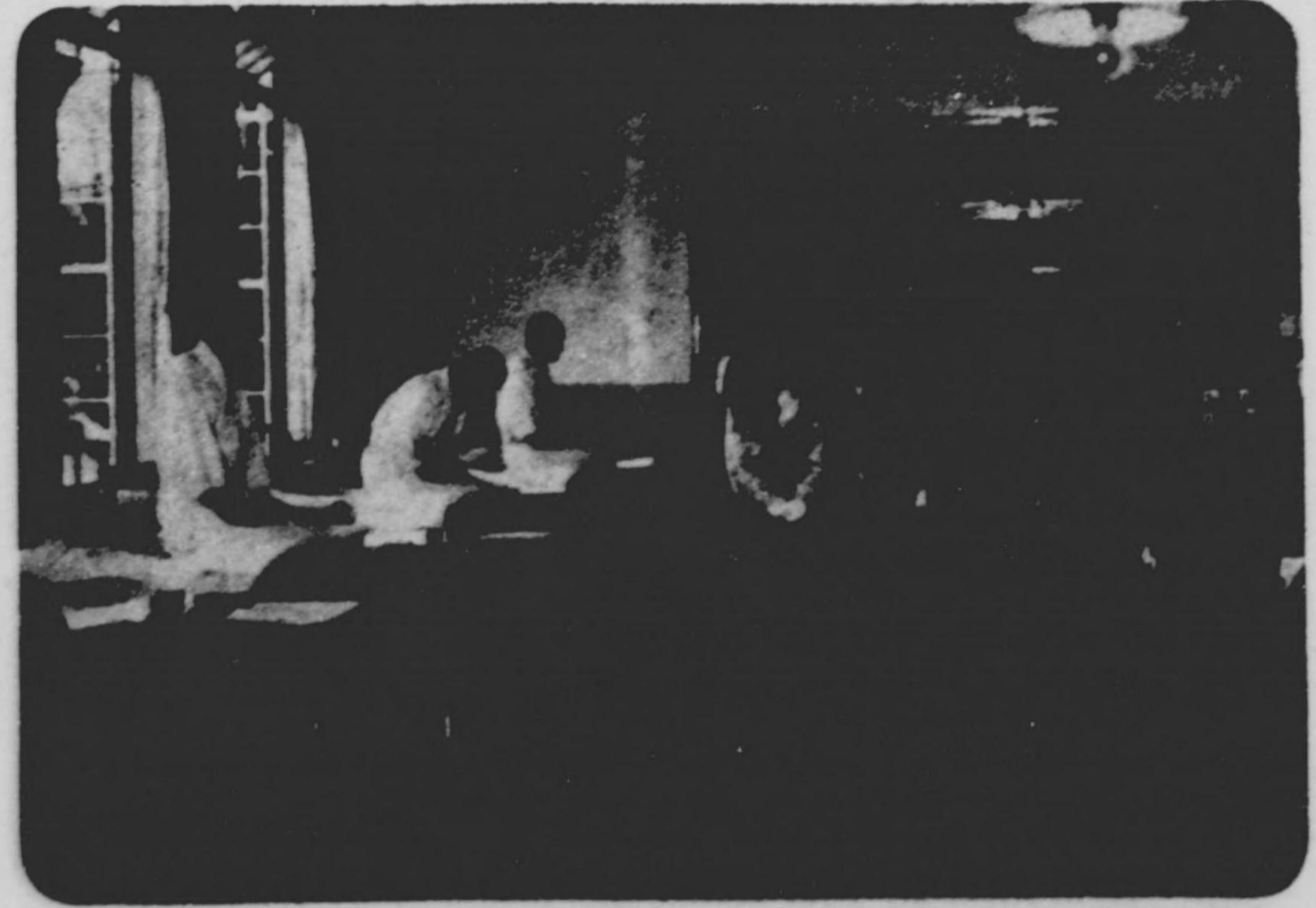
總裁殿下子女團御視閲(福山縣女)
御禮言上の岡岡長

(福山憲兵分隊檢閲所)

總裁殿下廣島護國神社御參拜



(昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部檢閲所)



總裁殿下陸軍病院御慰問

ゆ
か
り
の
人
々

下殿官香朝裁總會護援人軍
(察視御況狀習講ンシミ業生族家道)



念記散解部幹會本に心中下殿裁總

會組奥村五百子前線慰問の旅に



東京九段坂下の銅像（身死して名に生きる）

長會本の代歴



(初代) 岩倉久子



(二代) 阿部篤子



(三代) 岡部瑛子



(四代) 濱尾作子



(五代) 下田歌子



(六代) 本野久子



長會副の時當散解
子津太子金



(代七)長會本の時當散解
子壽萬野水

本會創立當時の顧問



初代支部長
江木中子



近衛公爵

長部支副理代長部支の時當散解
子龜萬井石



初代支副長部長夫人
上田種子



大谷伯爵



堀内中将



小笠原子爵





初代
江木
縣知事

與參の時當散解
長部務總縣井石



問頼の時當散解
事知縣永吉



長 部 支 代 近

子 敏 川 早 代 三 廿 第



子 敏 葉 千 代 十 二 第



子 花 田 富 代 四 廿 第



子 ヤア 澤 湯 代 一 廿 第



靜 川 相 代 六 廿 第



子 櫻 沼 飯 代 五 廿 第



子 照 本 鈴 代 二 廿 第



支部分立當時の婦人功勞者



參事
溫田冬子



評議員
賀屋鎌子



幹事
松浦柳子



評議員
三浦梅子

歷代支部分主事

四代 早水仁三郎



初代 門川正之



五代 柏四郎



二代 天野雨石



七代 (解散當時) 居士 野村吉



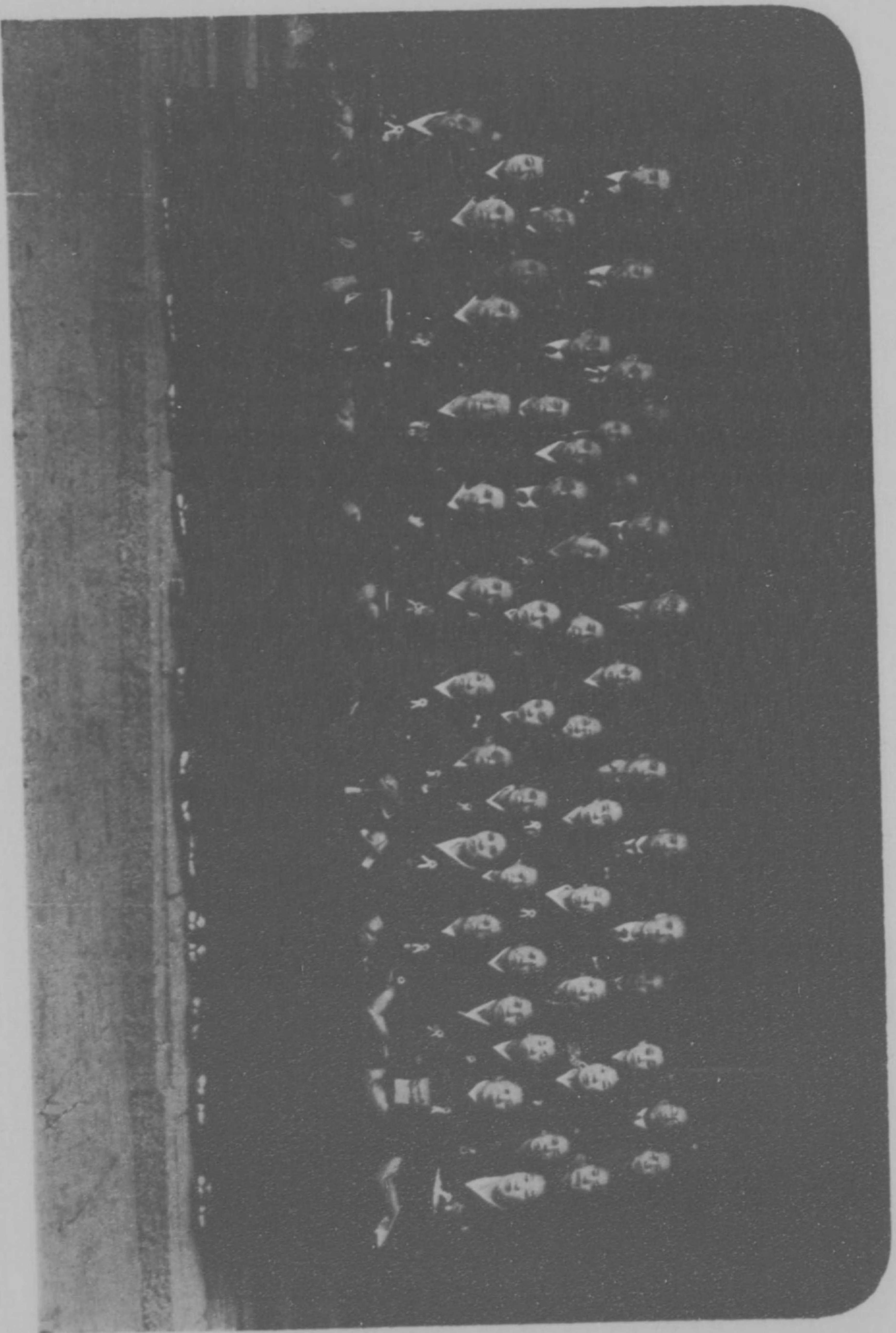
六代 玉川寛吾



三代 北川嘉七



念記員役の前散解

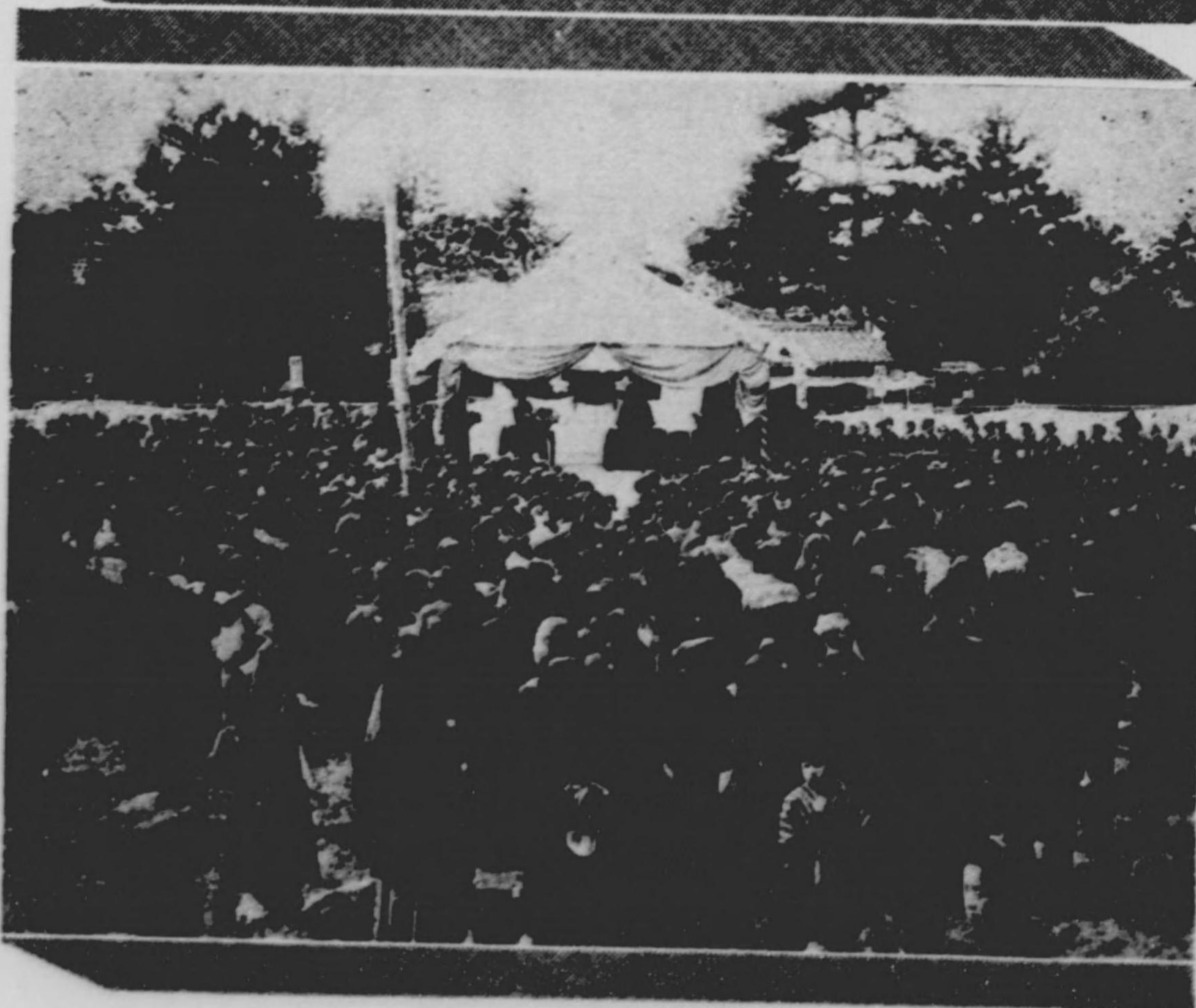


思ひ出の数々

明治四十年四月阿部本會長を迎へて
 吳市幹事部會員總會記念



吳鎮守府校開演



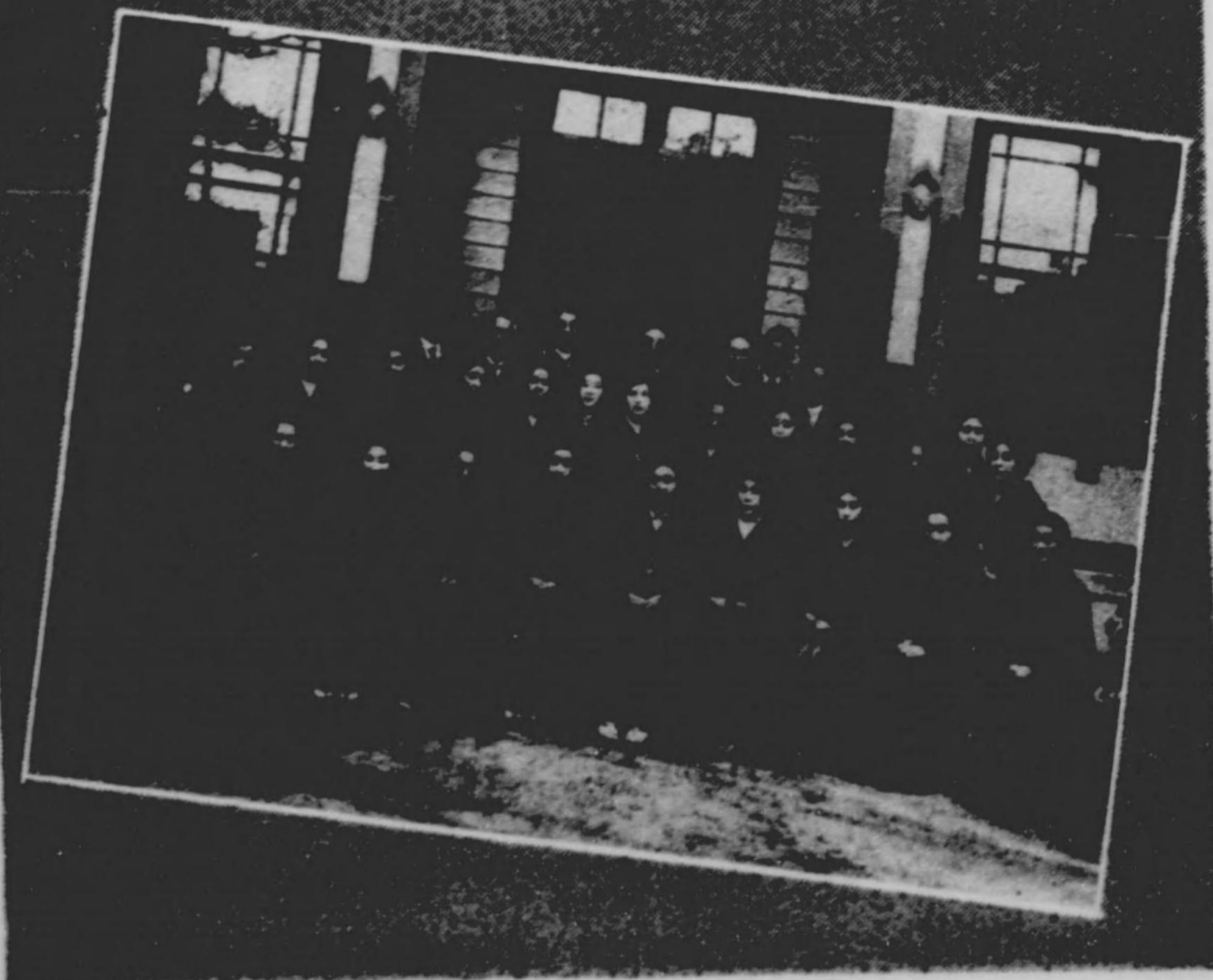
深安郡幹事部會員總會於山公園

明治四十四年四月阿部本會長を迎へて
 (於山公園) 深安郡幹事部會員總會

大正二年三月
中村支部長送別記念 (赤愛聯合)

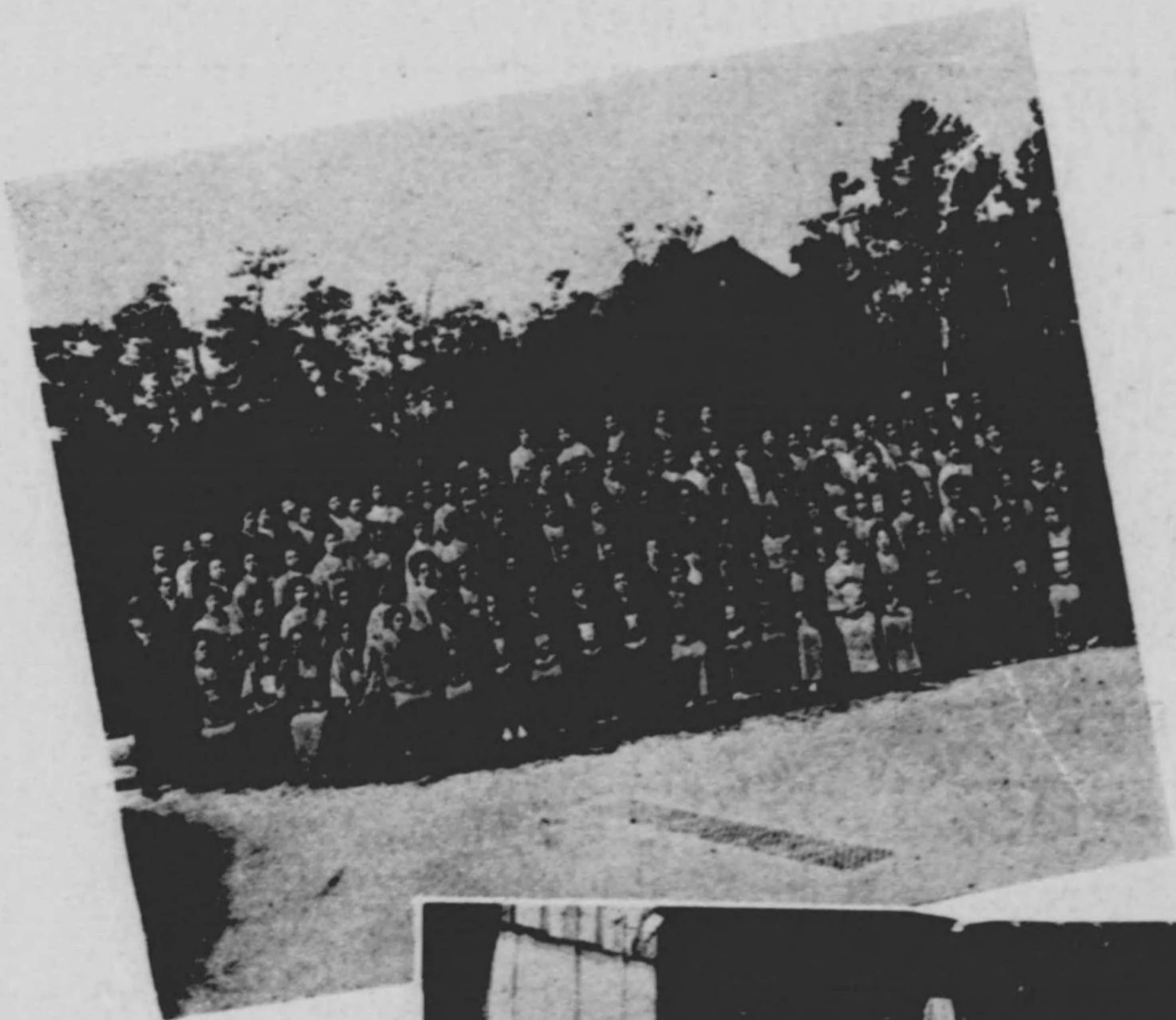


昭和元年十二月
赤愛聯合評議員會 (於知事官舎)



昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部開演

昭和八年五月
滿洲事變銃後活躍記念
(於羽田別荘)



昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部開演

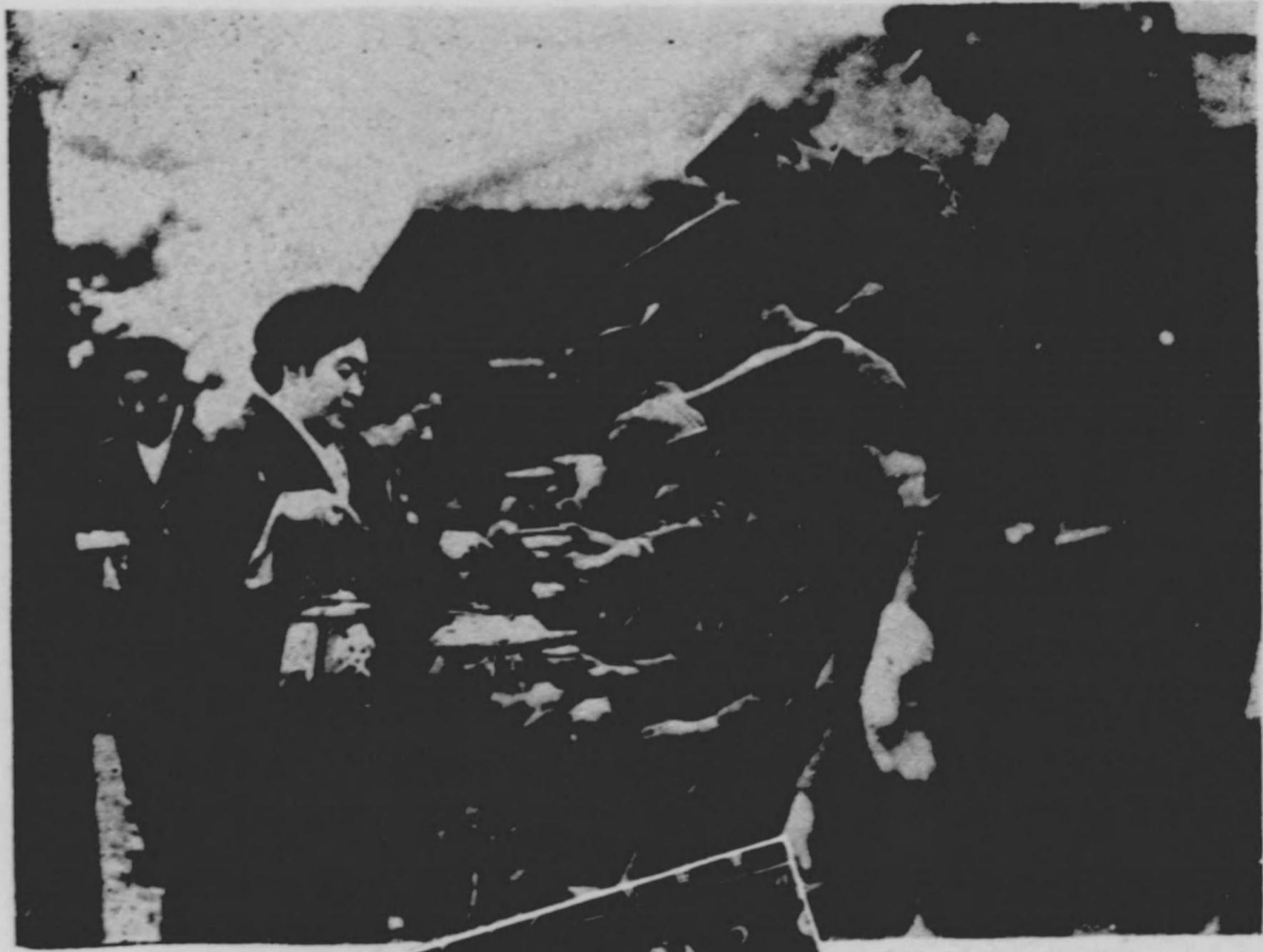


(中) 昭和十一年御調郡土生町分會總會實況
(早川支部長臨席)



(下) 昭和十四年雙三郡十日市町分會總會實況
(飯沼支部長臨席)

昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部概況

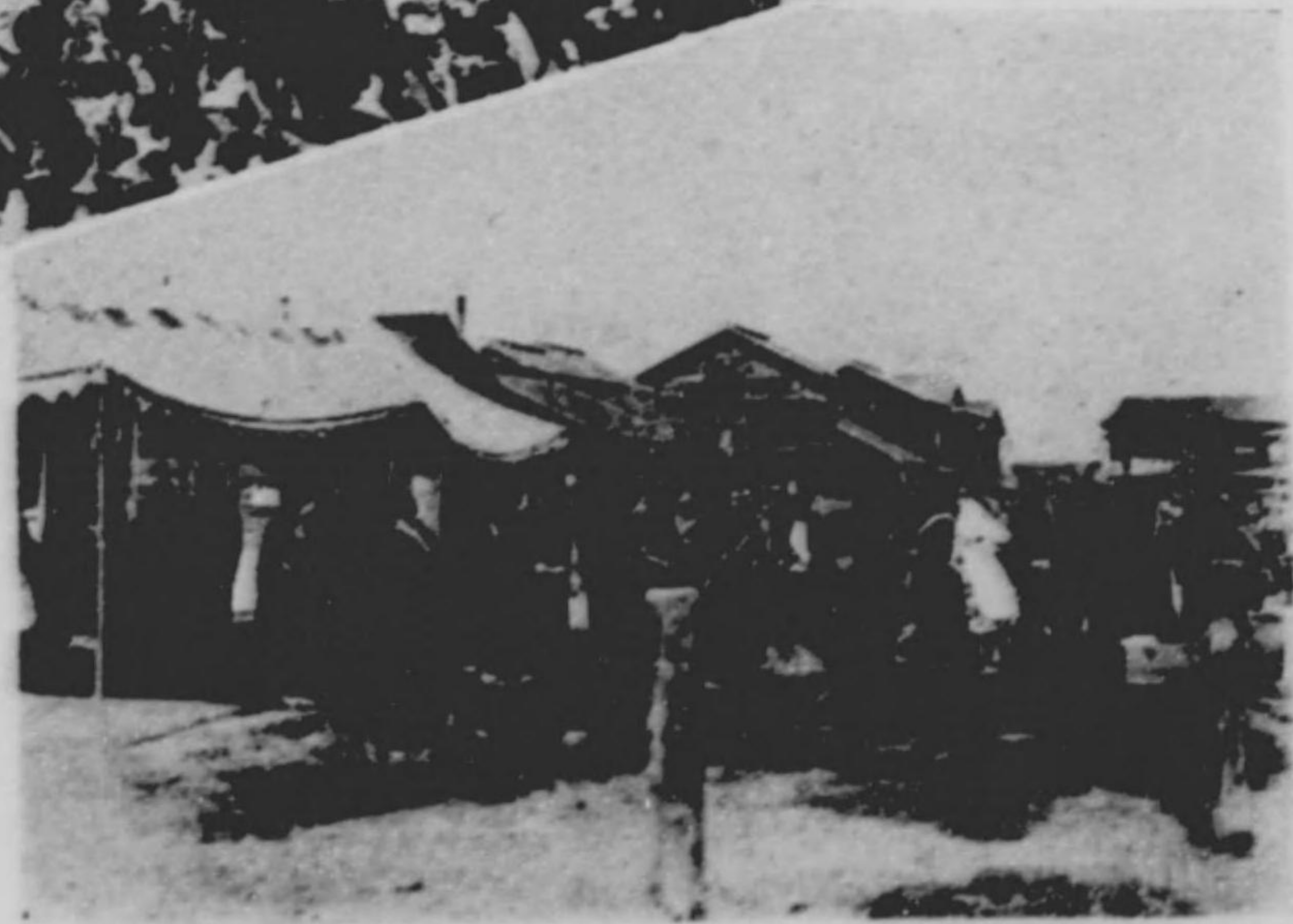


出動部隊湯茶接待（滿洲事變當時）



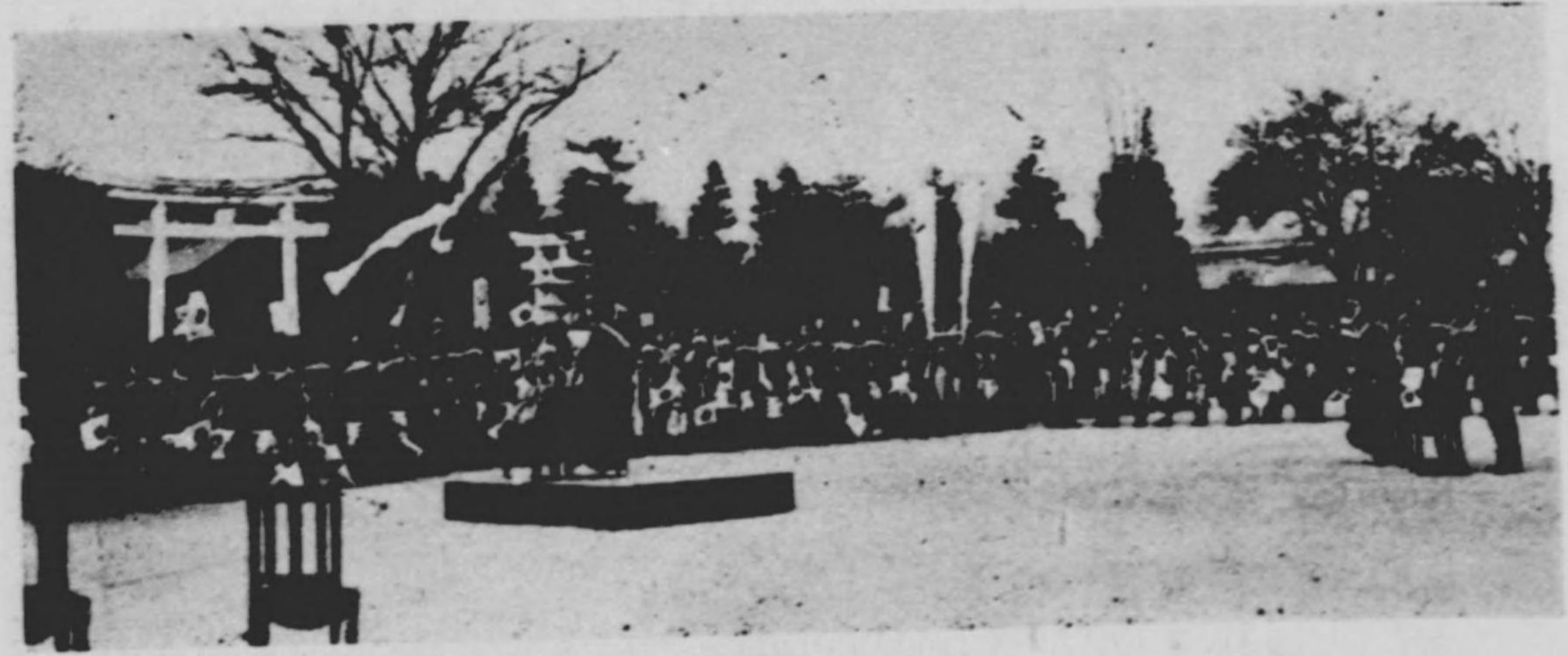
白衣勇士
軍人遺家族慰安會
（廣島市竹屋分會主催）

湯茶接待（支那事變當時）

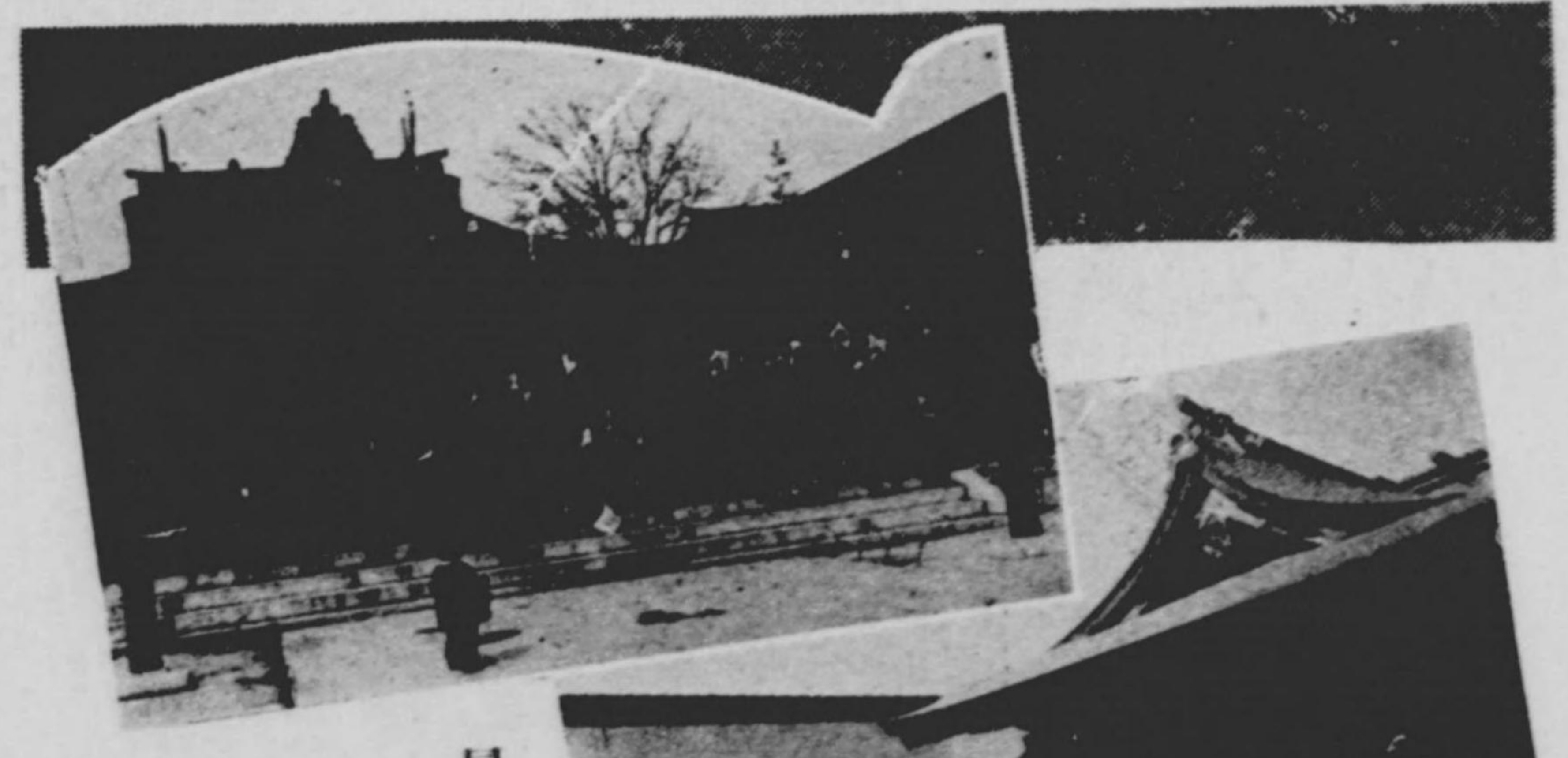


昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部概況

祝奉辰誕御様子皇の日



（一）祝奉節久地（社神國護於）祭國報人婦

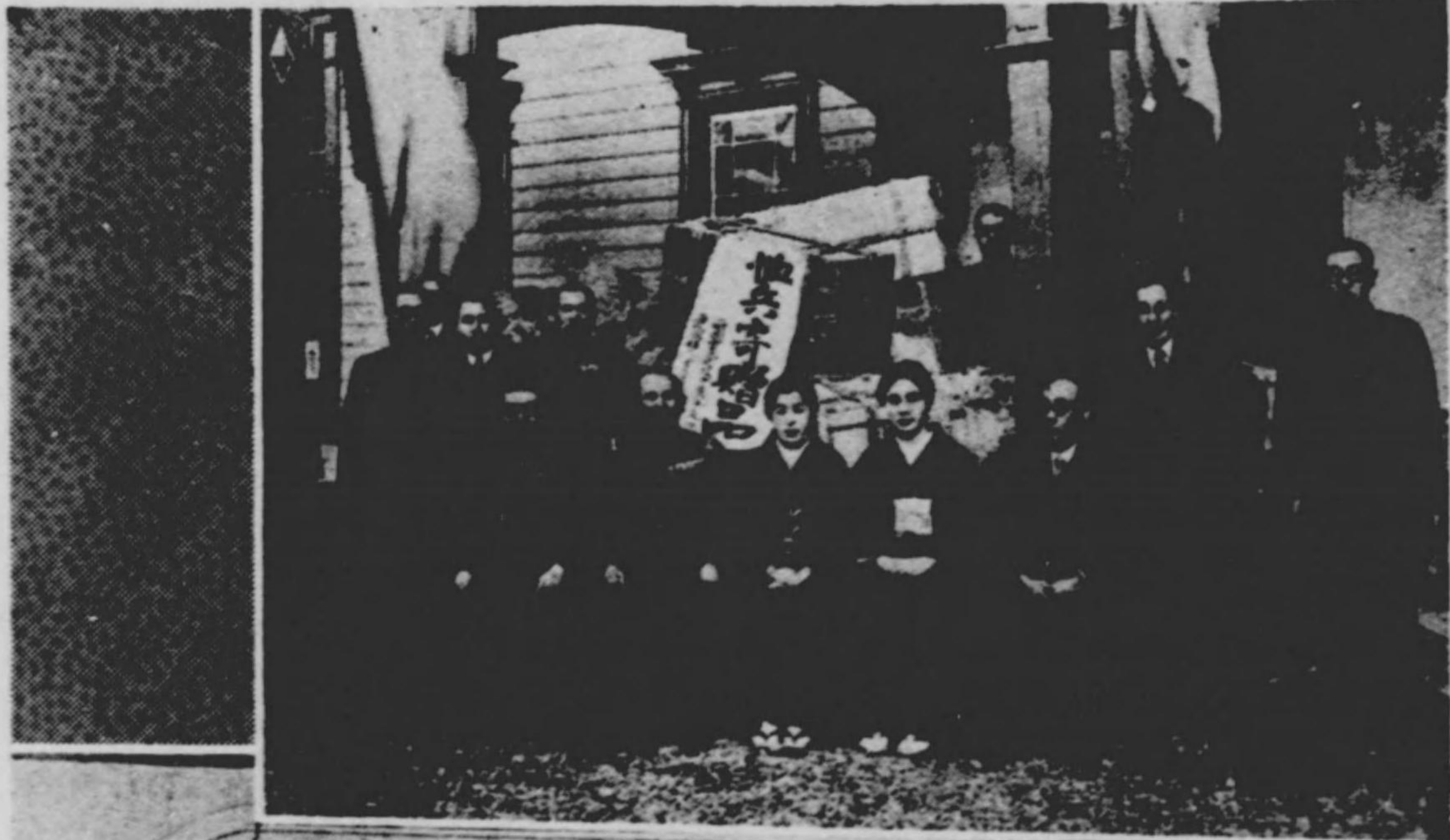


同上（二）

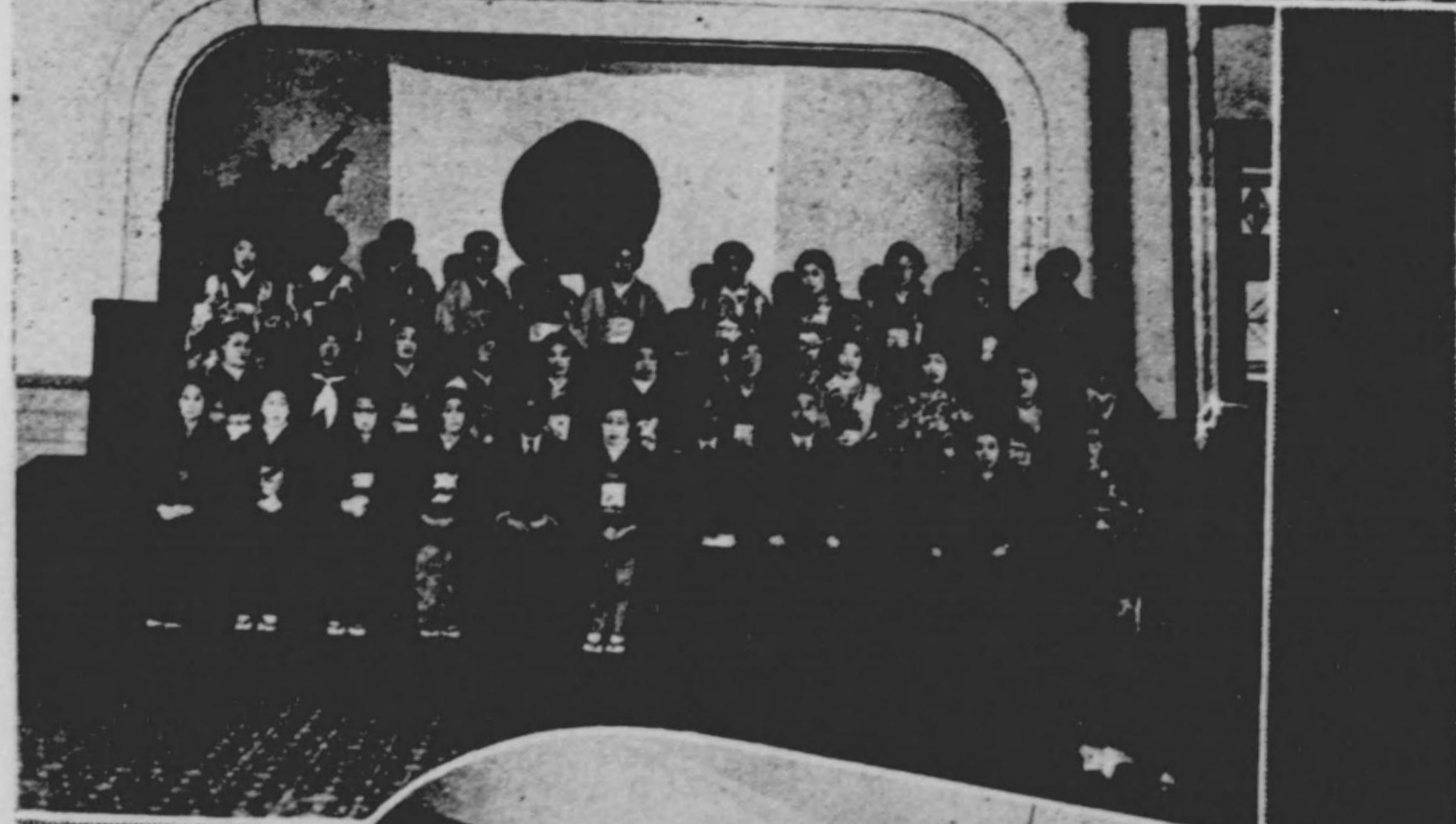
昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部概況（四枚共）



武運長久祈願
（於空鞘神社）
廣島市
中島分會員



後送白衣勇士用
凱着及揮寄贈
運輸部支團
富田支部長
松田評議員



第十一回
軍人遺家族
ミシン講習修了式(相川支部長臨席)



ミシン講習實況(飯沼支部長視察)

昭和三十四年五月十六日現地郷土慰問隊を終へて

(迎歡表代脇と長團居士)



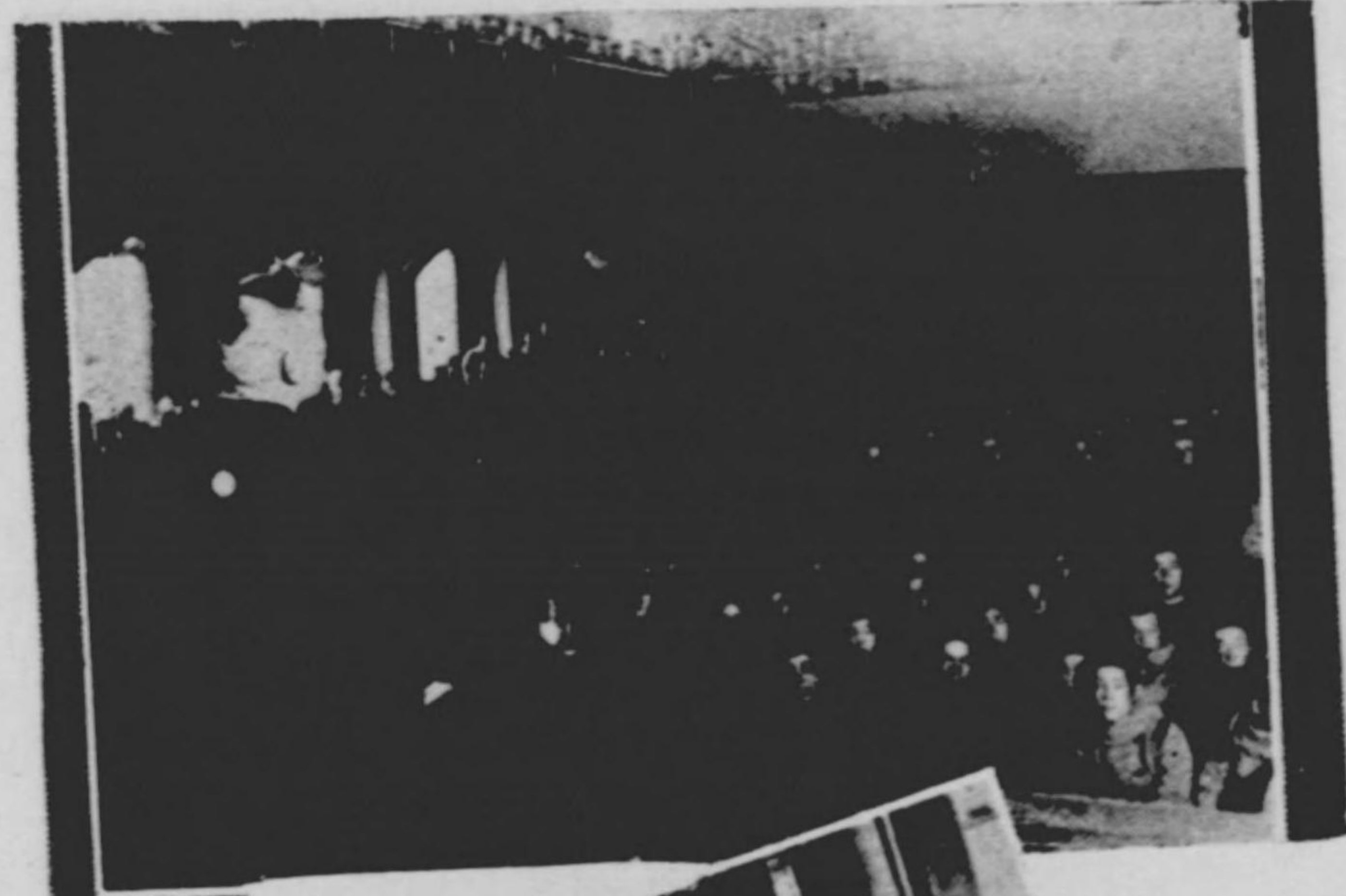
支那事變慰問袋整理
(中央富田支部長)



滿洲事變慰問袋梱包發送準備

昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部視察

（催主會分合聯市山福）會藝演安慰隊部營在



戰時下廢物利用足袋縫製講習會
（三原市聯合分會主催）

前線部隊へ切干甘藷寄贈
（吳市吉浦分會員包裝）



仕奉力勞援後後銃 事變 支那



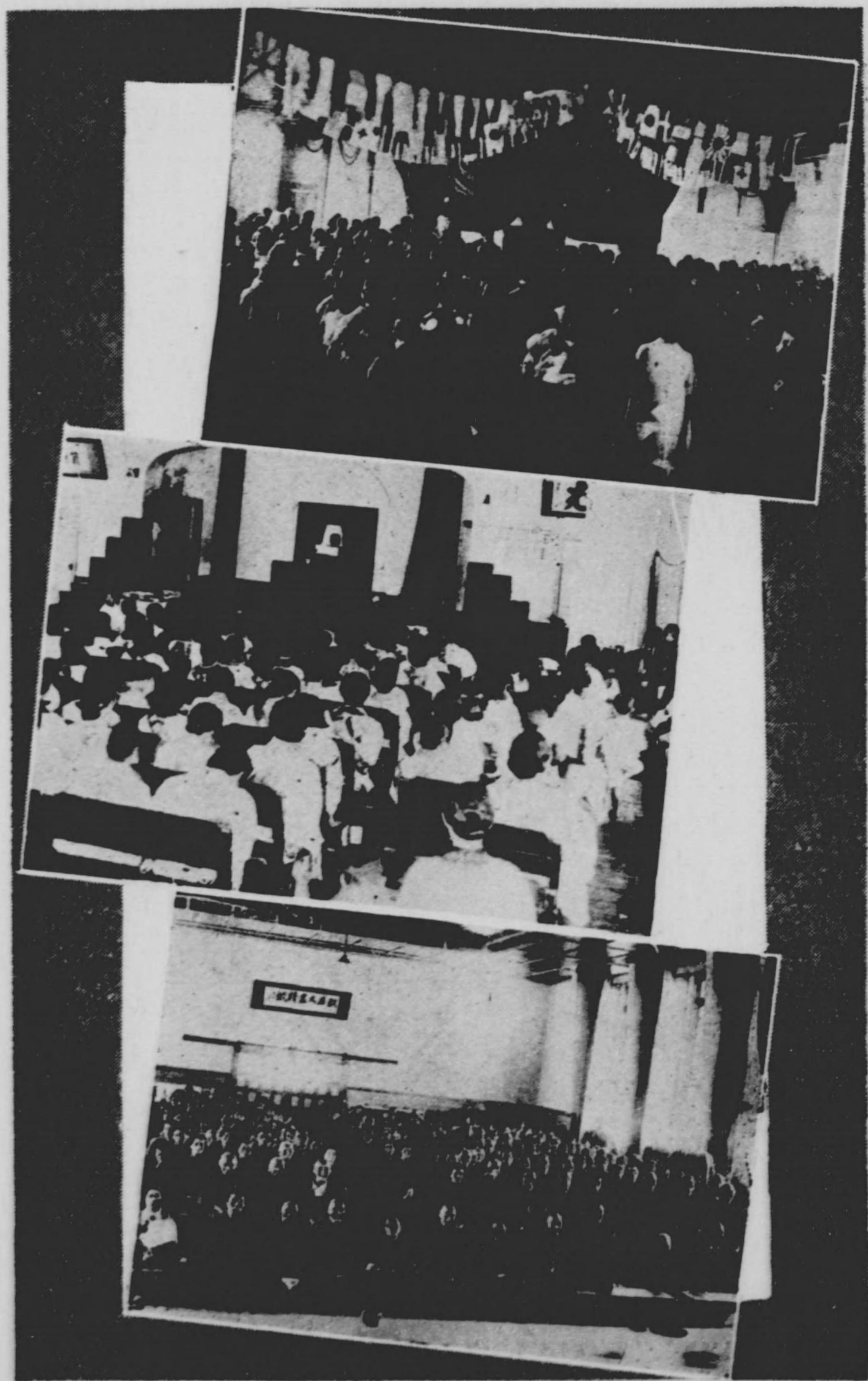
高田郡市川村分會會員田植奉仕



深安郡神邊町分會會員牛耕練習



縣立福山高女校
愛國子女團稻刈奉仕

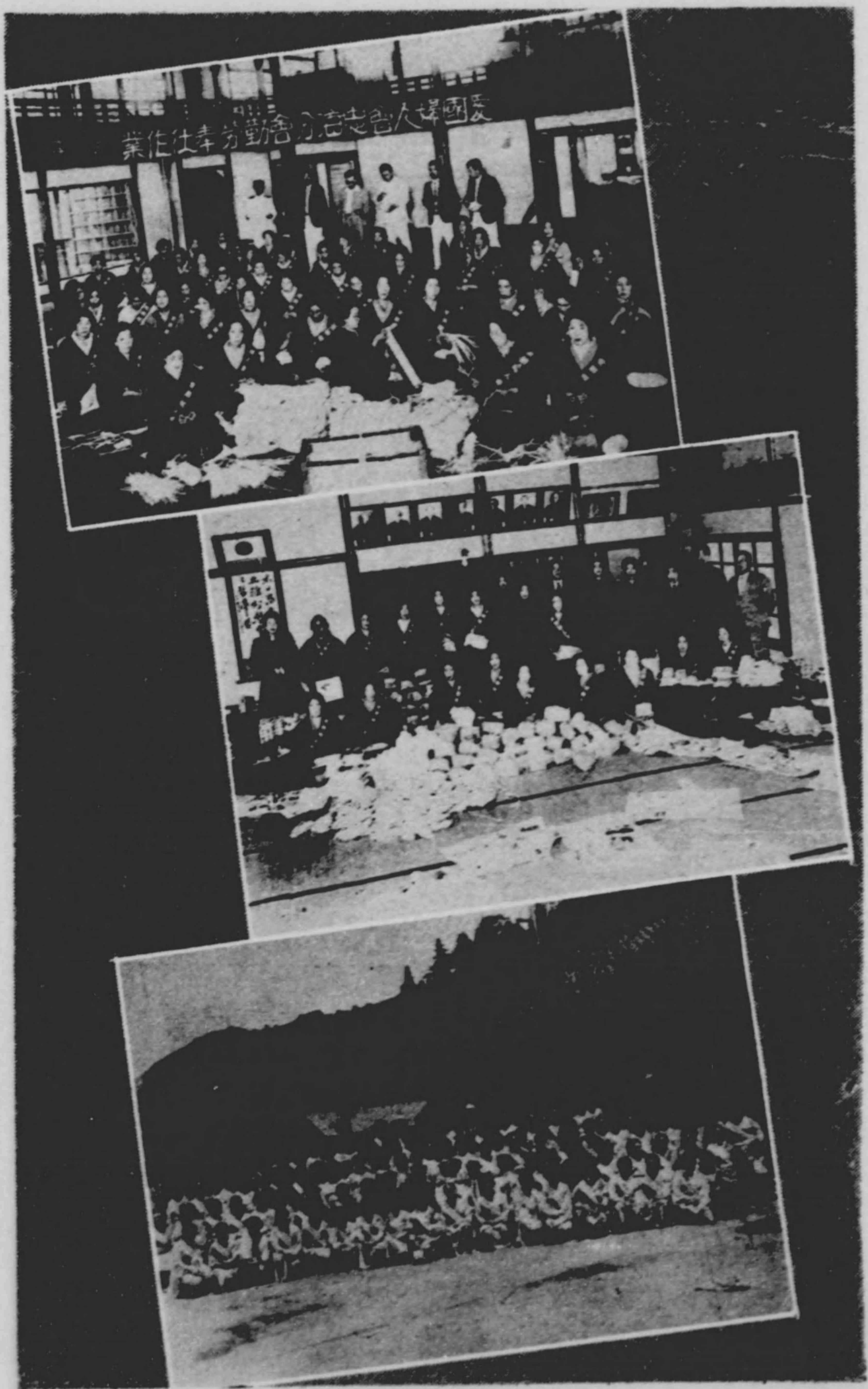


甲奴郡上下町分會總會

山縣郡吉坂村分會總會

賀茂郡鄉田村分會敬老會

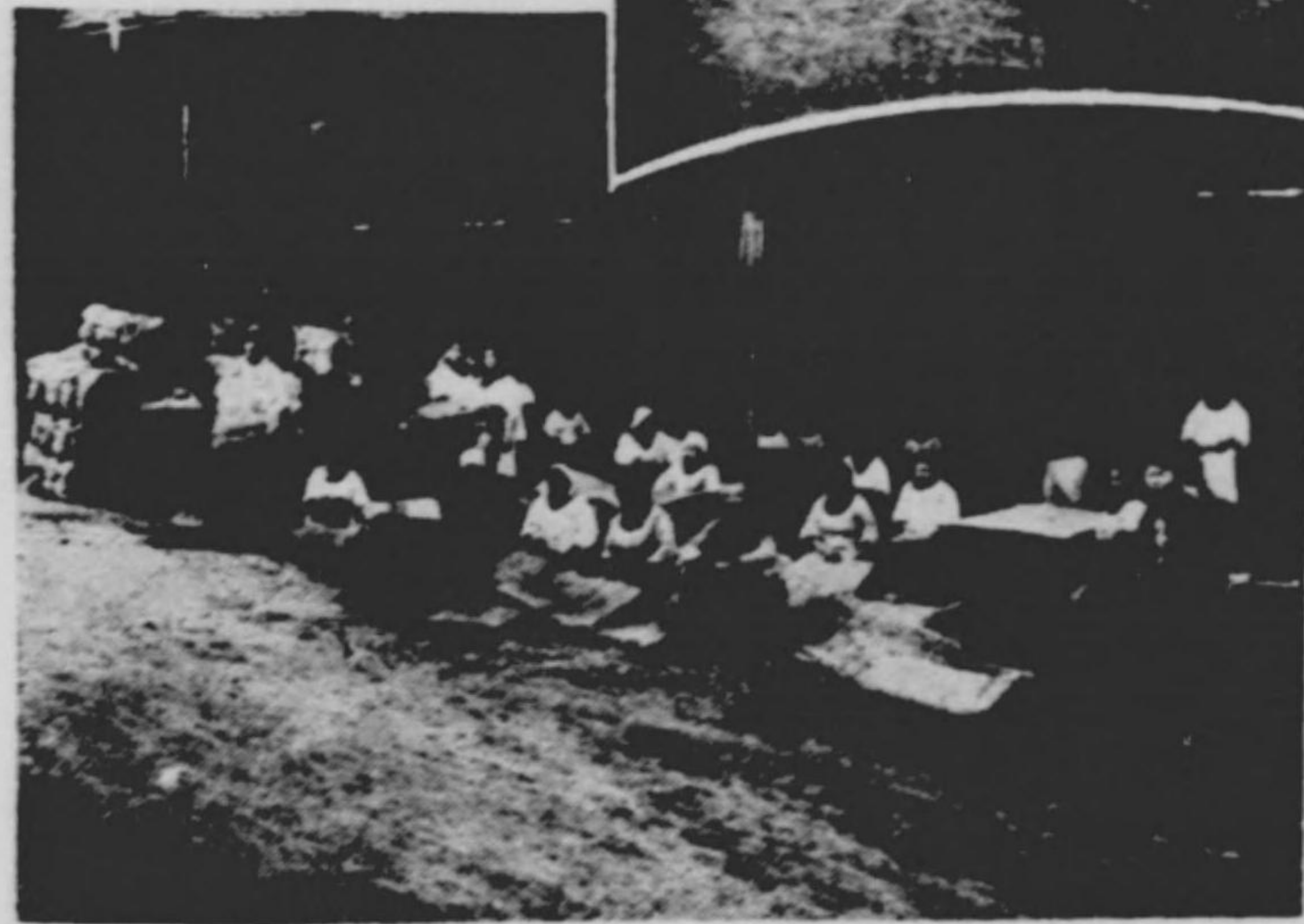
豐田郡忠海町分會員勤勞作業



蘆品郡福相村分會員慰問袋包裝作業

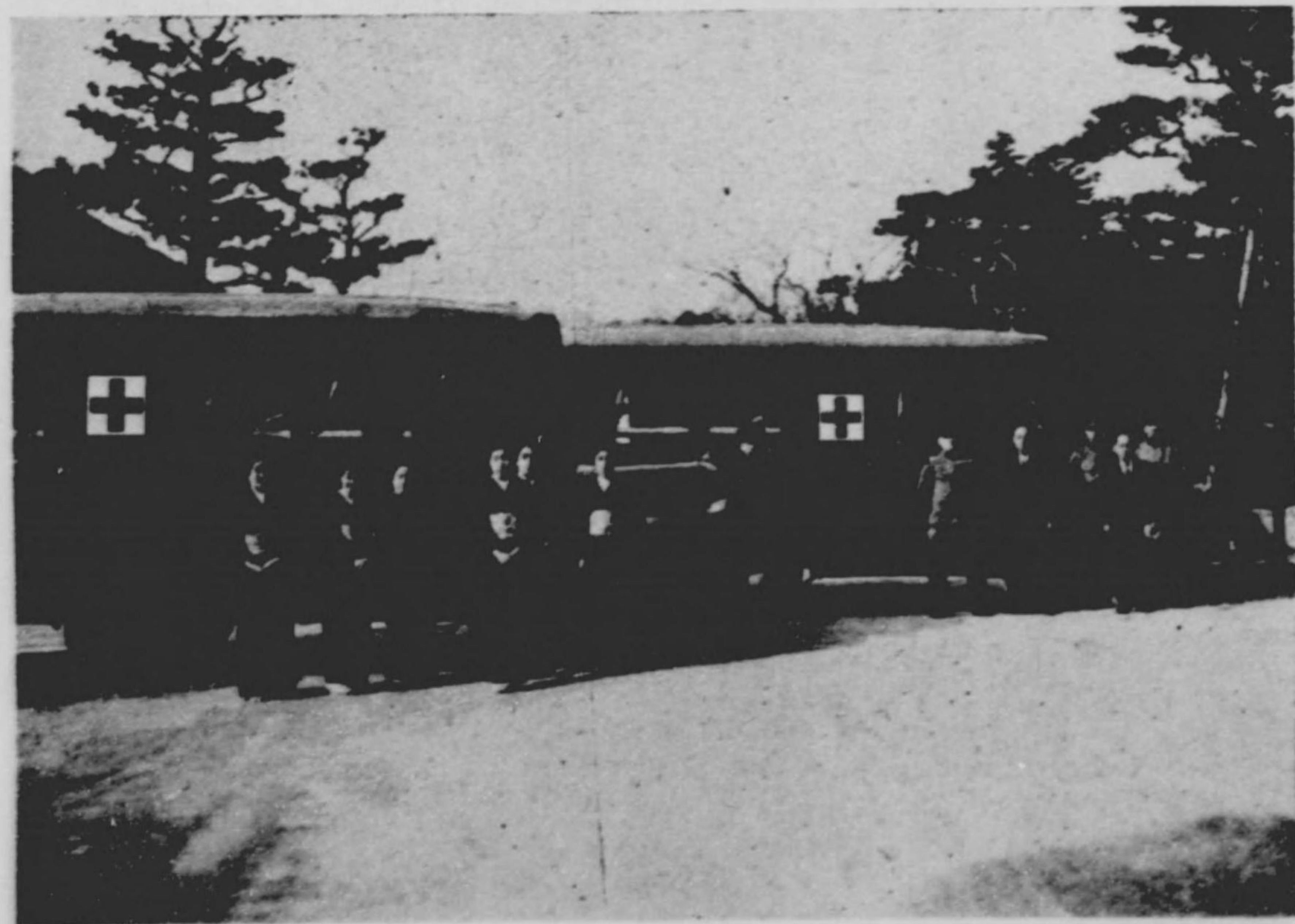
比婆郡東城町分會員應召兵士見送

賀茂郡上黒瀬分會員
道路改修努力奉仕



佐伯郡波分會員
飛行機献納資金調達
特別作業

患者用自動車献納(縣支部)



昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部贈贈

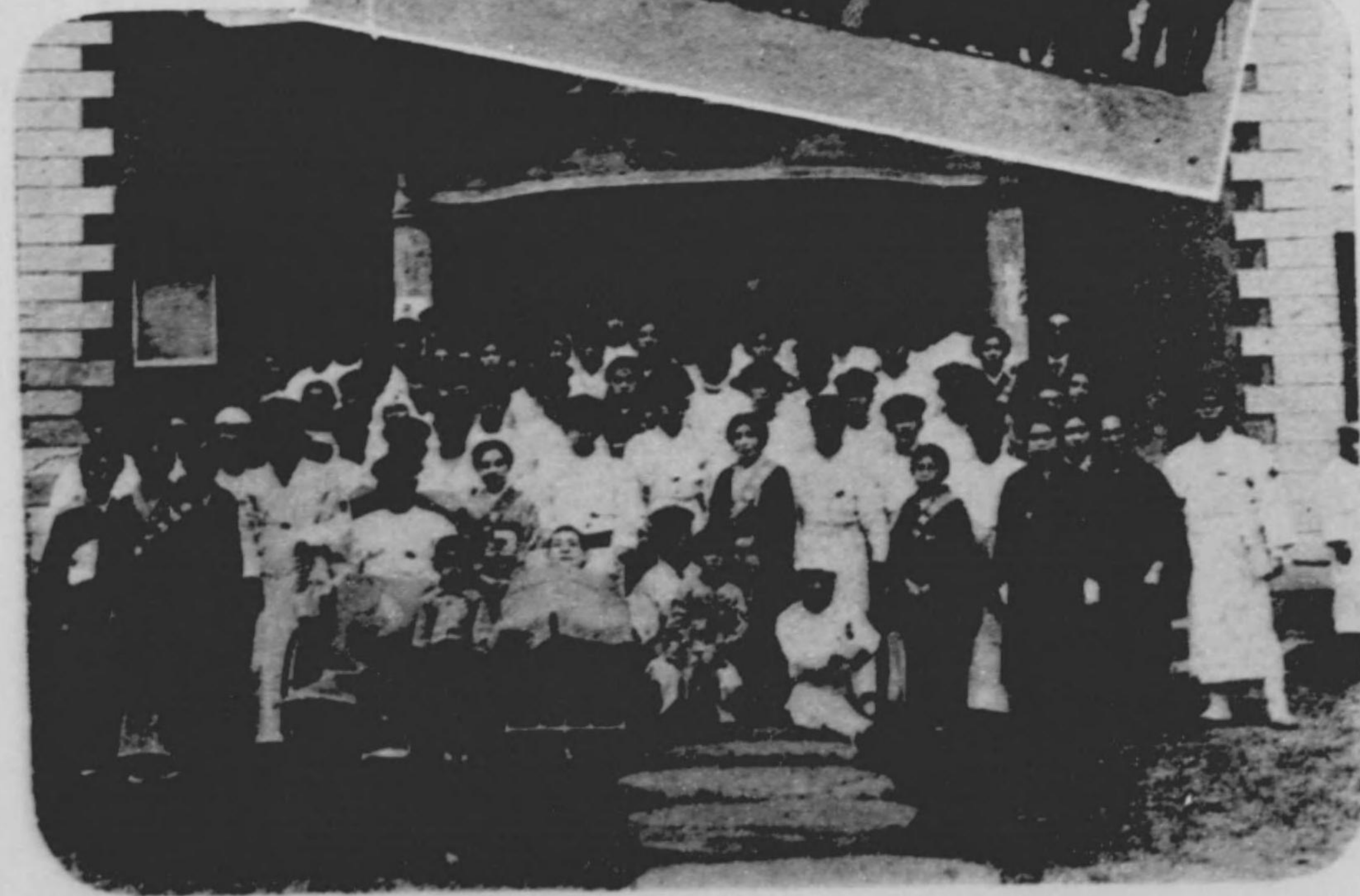
軍需品調達努力奉仕(八十歳の老嫗も加はりて)



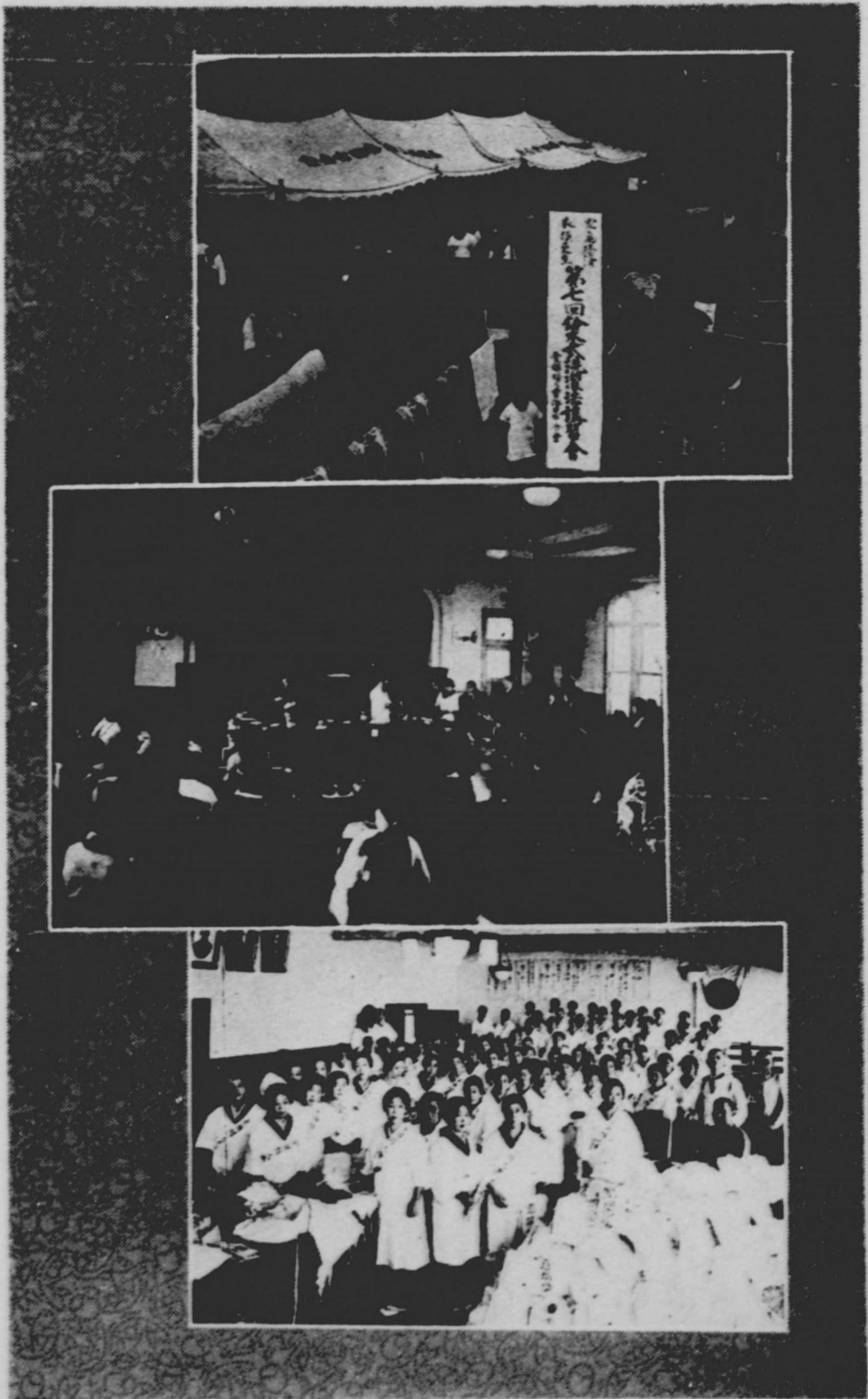
〇〇廠で
廣島市内分會長
懇談會



昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部贈贈



昭和十六年五月石井支部長代理其他會員
東京第一陸病郷上出身者慰問



尾道市聯合分會慰問袋整理の一時

衣類更正洗濯講習會(海田市町分會主催)

營養料理講習會(支部主催)



戦歿者霊前参拜の富田支部長



支部より廣島招魂社へ奉納大幟

昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部極秘演説



支部より英靈並遺族へ供贈品

品物捐義と災震東關



大正十二年九月關東震災と義捐品



同上義捐品發送(陸軍の協力)



岡山市水害と義捐品整理(廣島市内役員活動)

昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部報告



支部幼兒健康相談所 女醫さんが診察



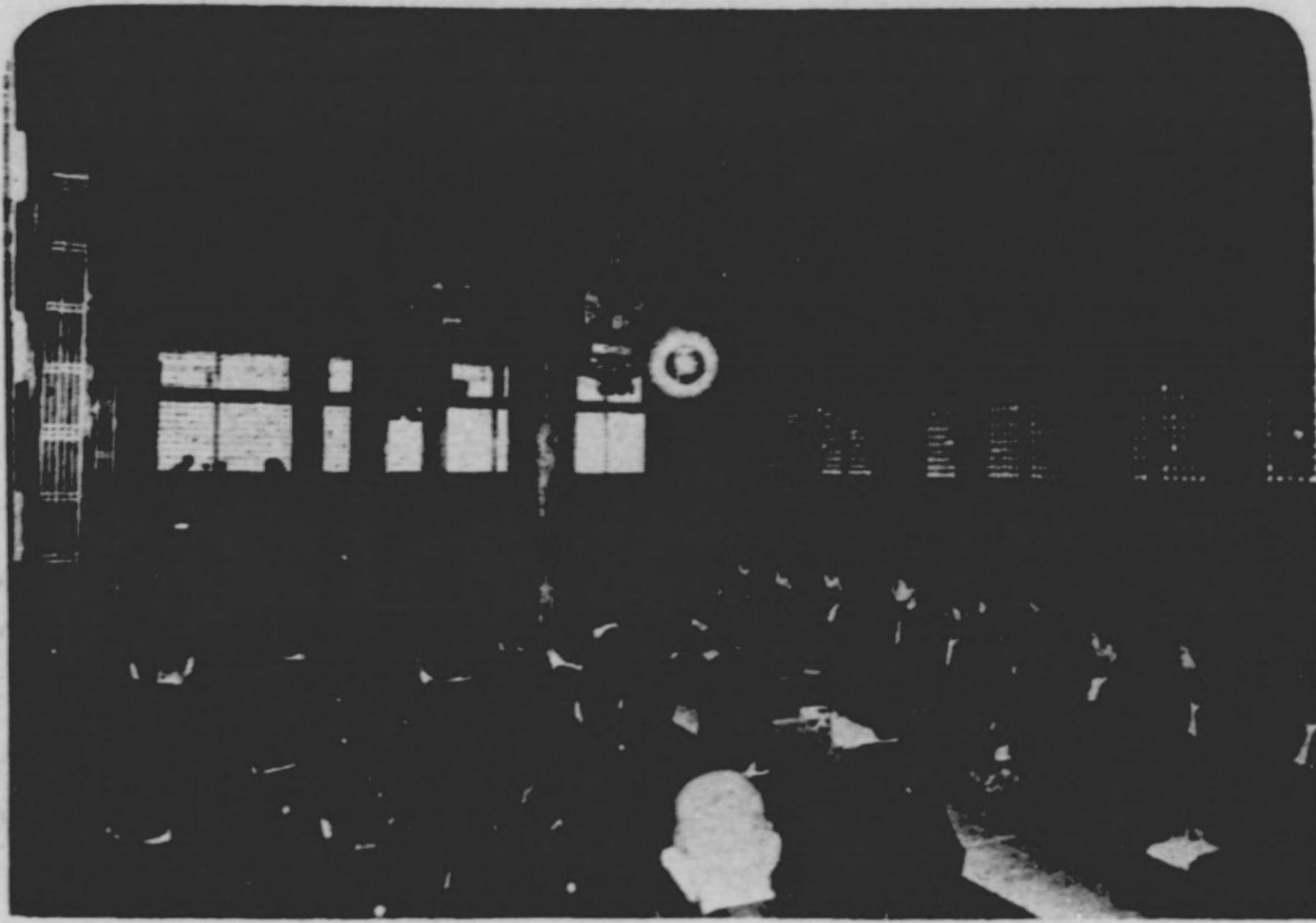
世羅郡津名村分會經營 託兒所食事の一時



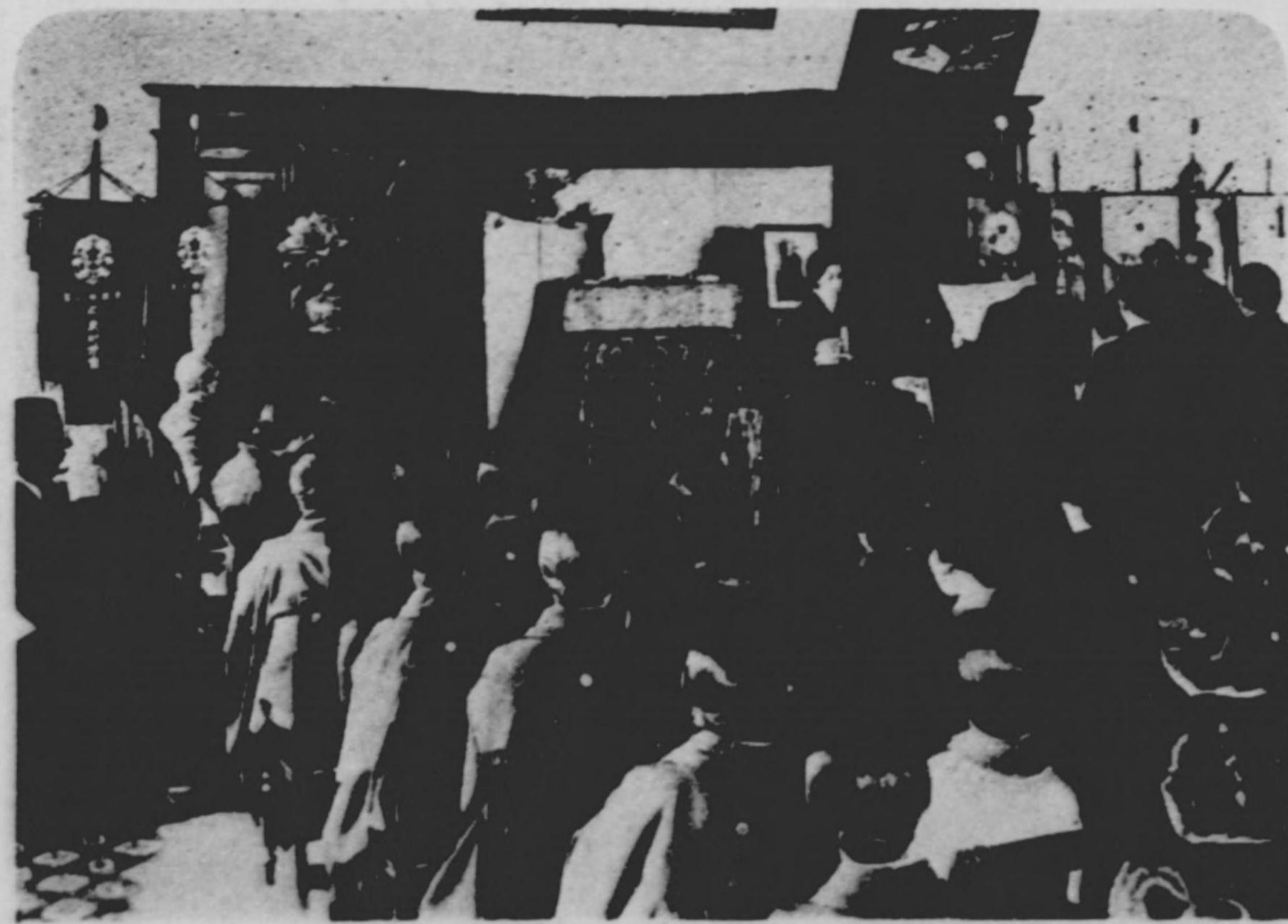
日の皇子様の御祝ひ日に 薄倅不遜兒に同席

(縣支部)

（院別島廣於）要法忌回五十三祖會



昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部極盛演



本會創立三十五周年記念表彰
（鈴木支部長表彰狀授與）



會祖二十五回忌
（於崇徳教社）



會祖三十三回忌
参拜の會員
（廣島別院）

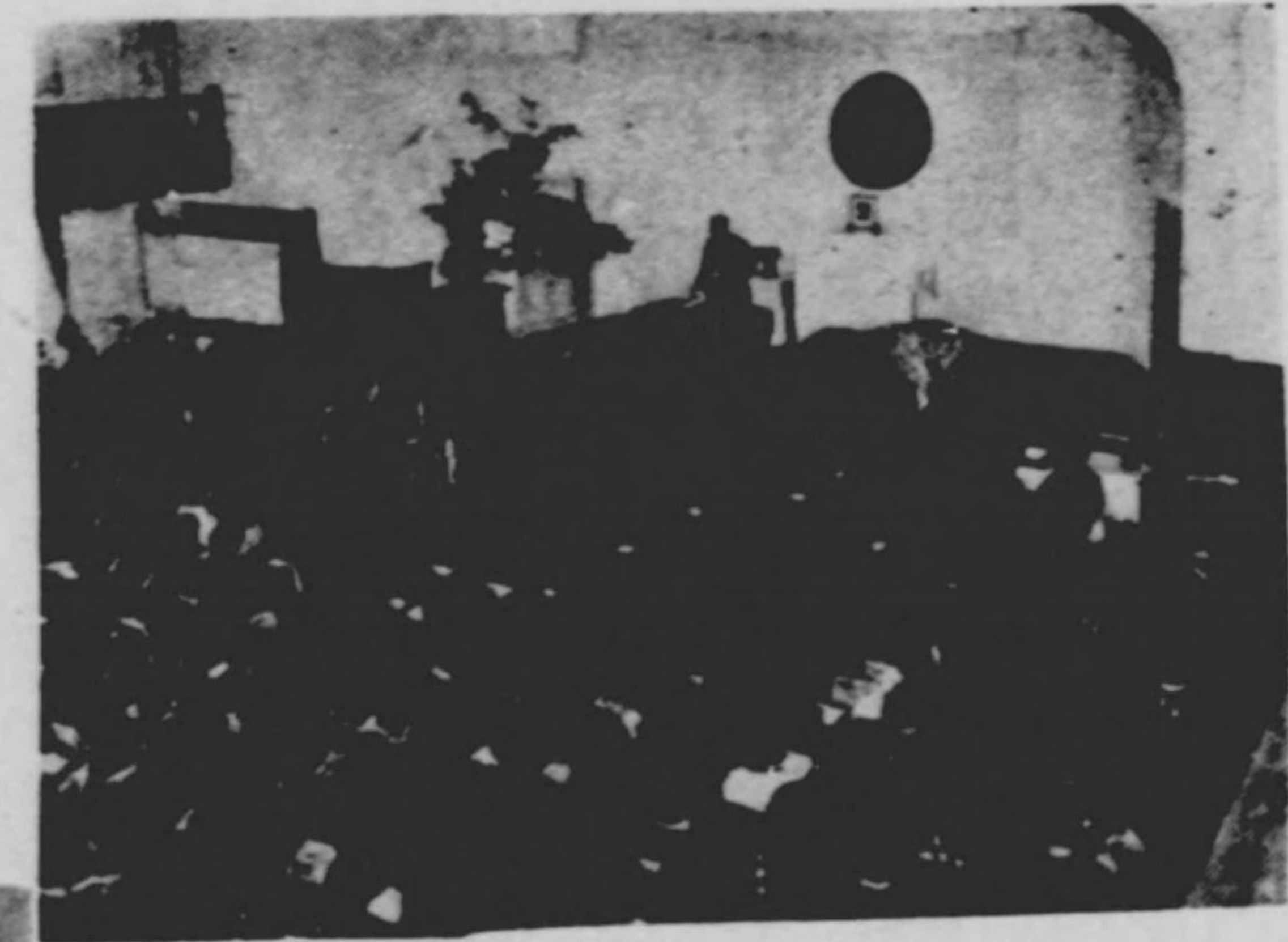


昭和十八年三月廿七日陸軍運輸部極盛演

同上 追弔講演
講師 東本願寺別院輪番
琴門 若師

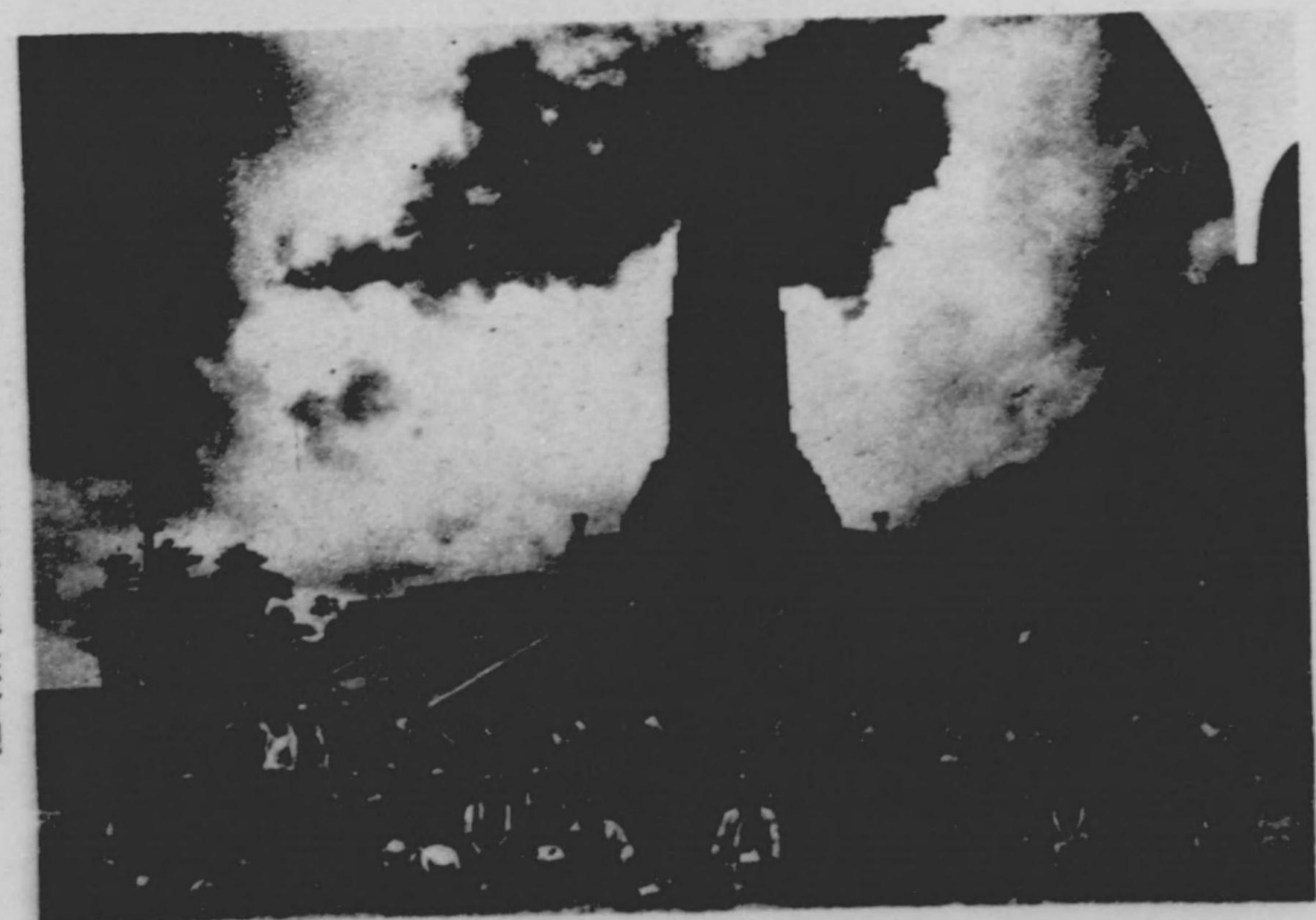
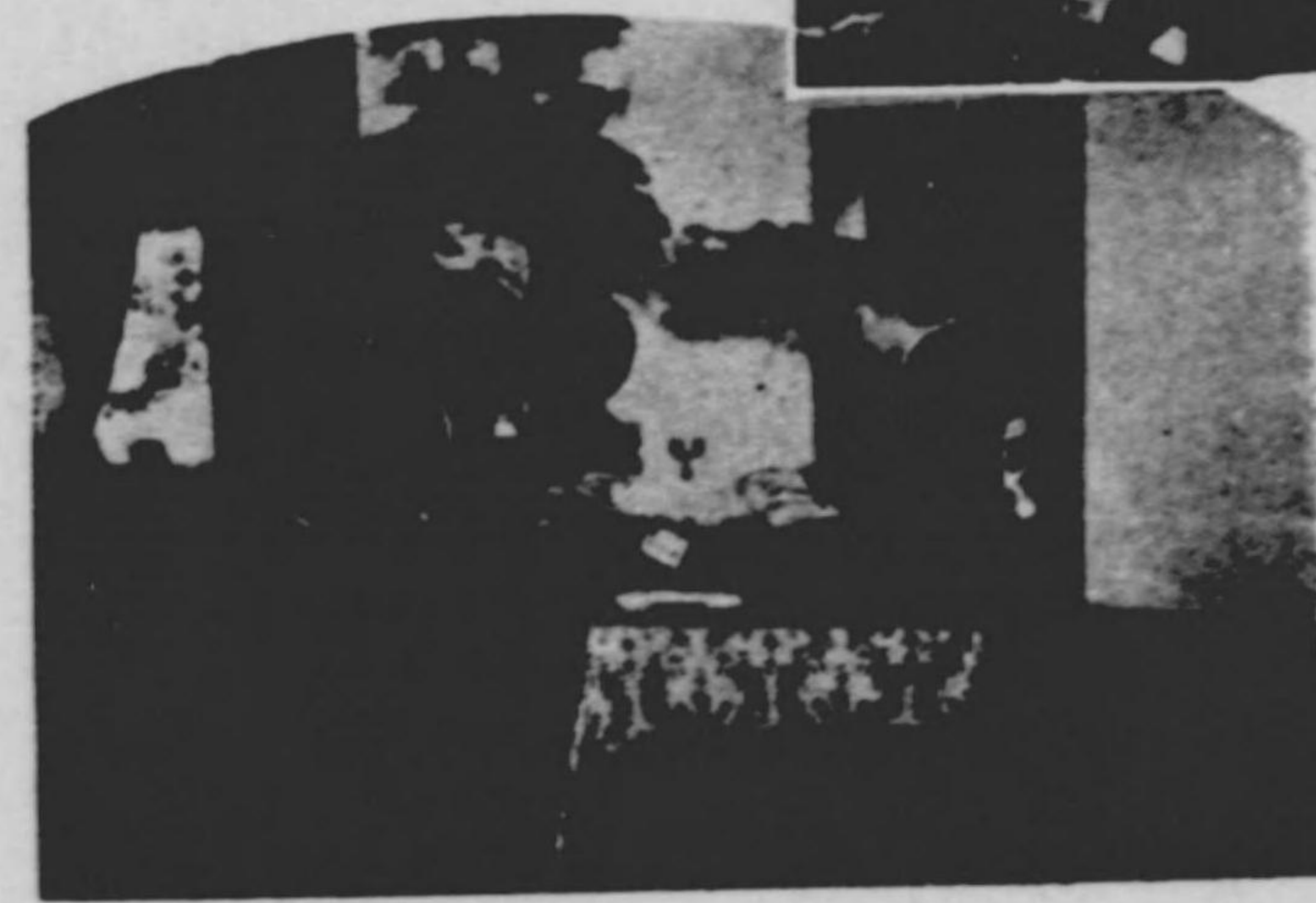
本會創立四十年紀念

吉永知事告辭



一家三名戦死の母へ
感謝状贈呈

(石井支部長代理)



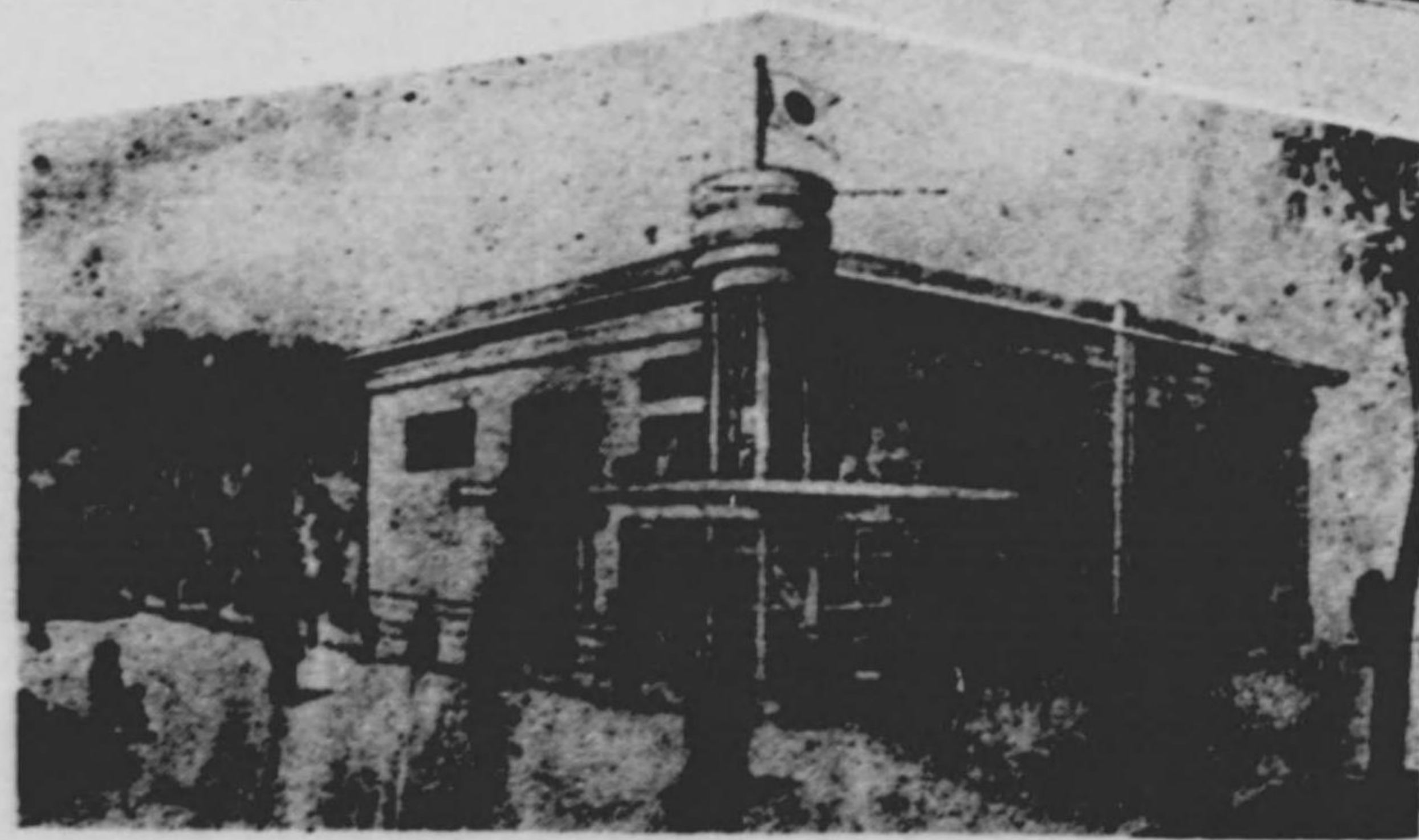
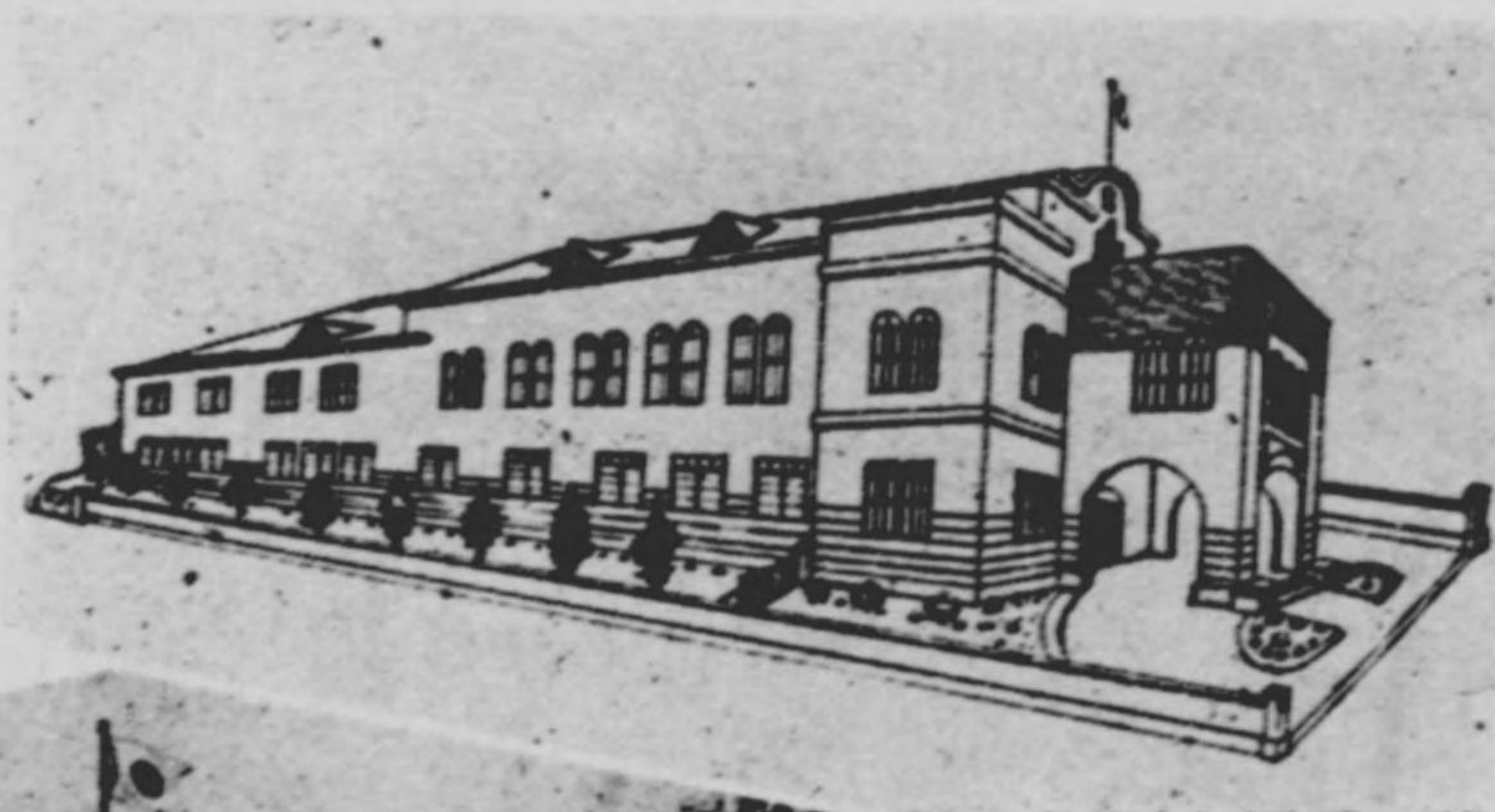
紀元二千六百年記念霊地参拜旅行團
(於昭和十六年八月宮崎神宮境内)

献納飛行機(陸軍及海軍各一機)



昭和十八年三月廿七日
陸軍運輸部機騰濟

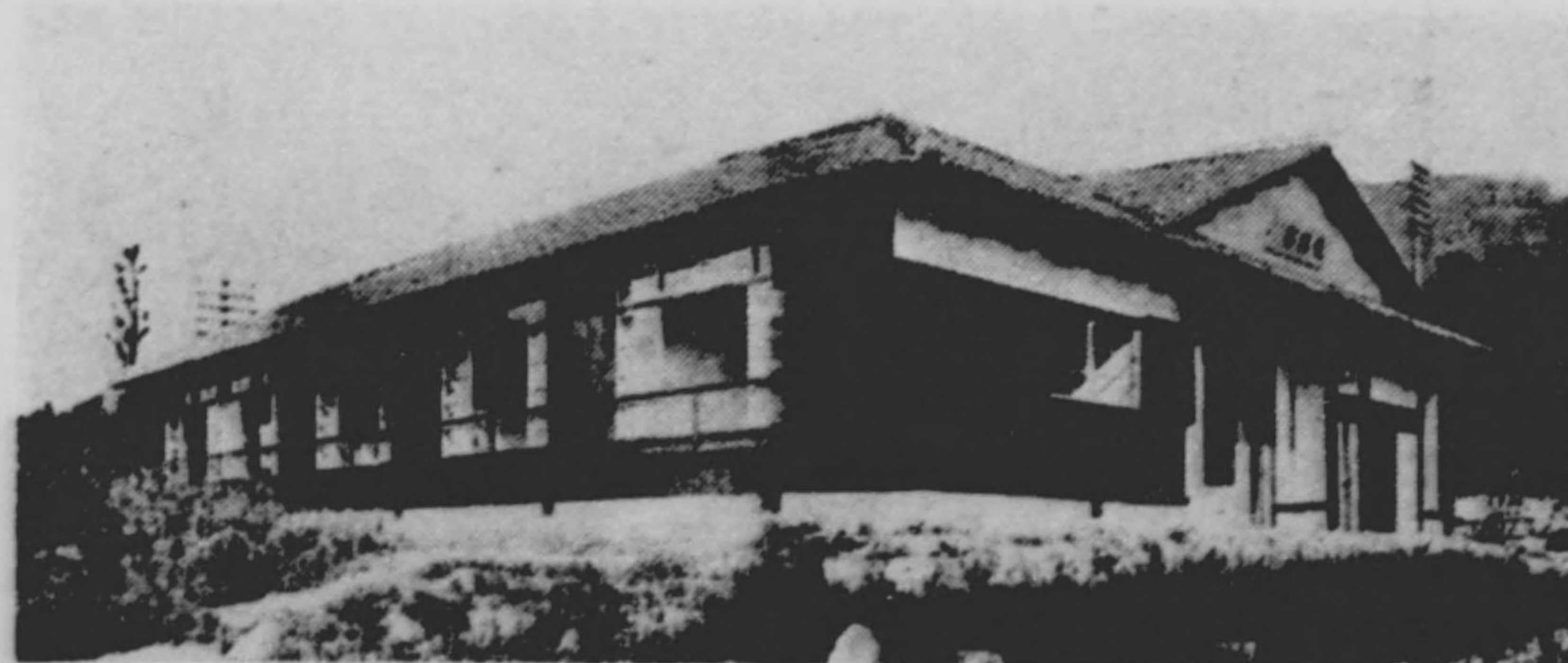
(下) 福山兵士ホーム
(福山市霞町)



福山兵分隊機騰濟

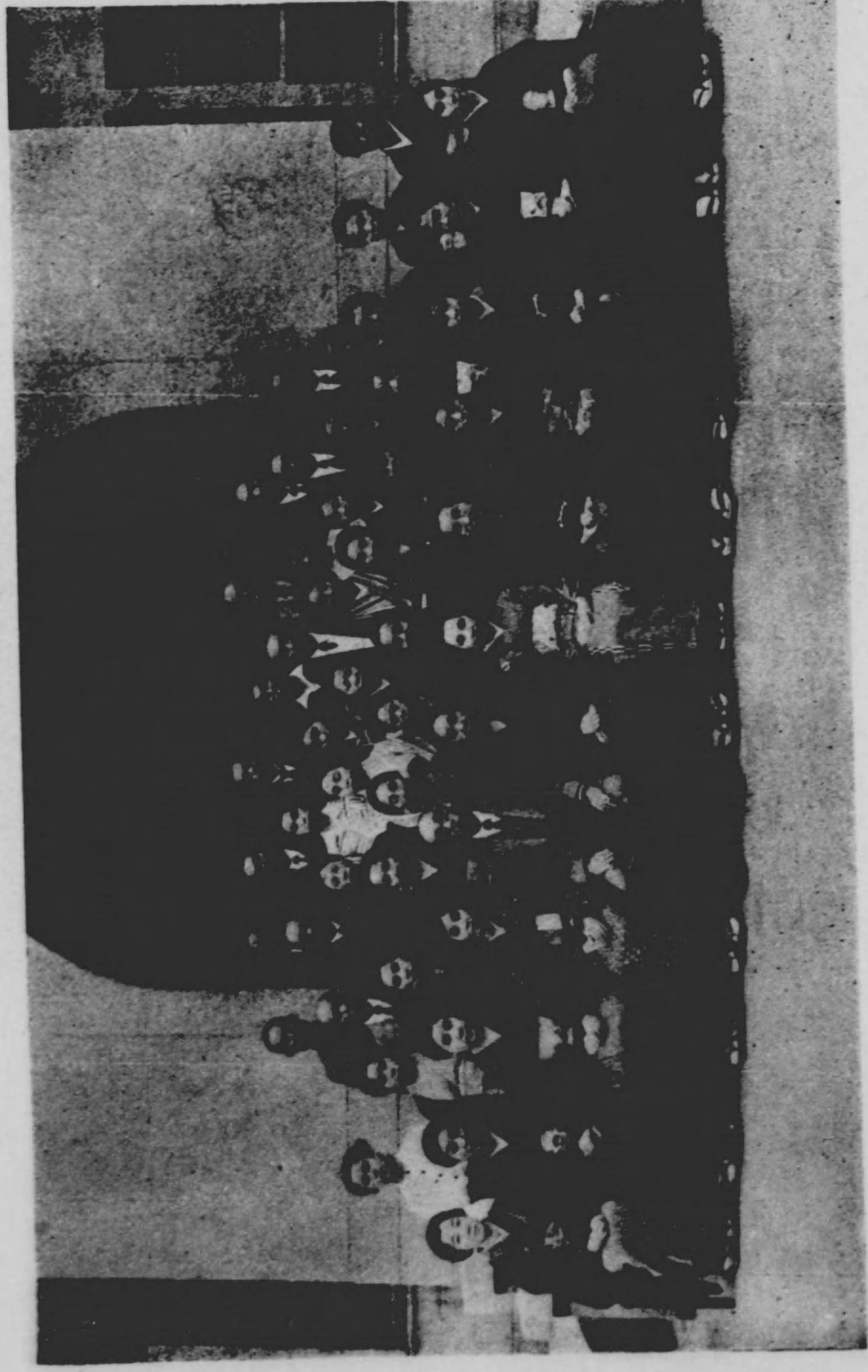
(上) 支部會館
(廣島市國泰寺町)

「愛國寮」本會解散の際の記念の爲め
日本赤十字社大野病院に贈寄せしめ



昭和十八年九月七日
陸軍運輸部機騰濟

支 部 殘 務 理 濟 職 員 記 念



民國十八年三月廿七日理事運轉部職員照

一、御沙汰書

愛國婦人會

其會設立戰死者遺族及廢兵救護
之趣被聞食

思召ヲ以テ金七千圓下賜候事

明治三十七年二月廿九日

宮内省

愛國婦人會

其會設立戰死者遺族及廢兵救護
之趣被聞食

皇后陛下思召ヲ以テ金五千圓下
賜候事

明治三十七年二月廿九日

皇后宮太夫子爵香川 敬三

愛國婦人會

右今次事變ニ際シ貢獻スル所不
尠趣被聞食特別ノ

思召ヲ以テ金壹封下賜候事

昭和十三年十二月二十三日

官 内 省

愛國婦人會

其會ニ於ケル事業ノ成績ヲ被聞食
皇后陛下ヨリ思召ヲ以テ本年ヨリ
昭和十七年迄五ヶ年間年々金貳千
五百圓宛下賜候事

昭和十三年十二月十三日

官 内 省

二、御 令 旨

明治三十八年四月二日第四回總會に賜ひし

令 旨

本日愛國婦人會ノ總會ニ臨ミ茲
ニ各員ヲ見ルヲ喜ブ殊ニ今回ノ
事務局ニ際シ本會ガ能ク救護ノ實
ヲ舉ゲツ、アルハ満足ノ至リナ
リ尙ホ將來事業ノ益々盛ンナラ
ン事ヲ望ム

日露戦役中の功績に對し下し賜ひし

令 旨

明治三十七八年戦役ニ於テ陸海
軍人ノ慰安存恤ニ努力シ克ク其
績ヲ舉ゲタルヲ懌ア

昭和十四年五月第三十八回本會總會に賜ひし

令 旨

茲ニ愛國婦人會第三十八回總會ニ際シ諸員ニ告グ本會ガ今次ノ事變ニ處シ會員結束ノ力ニ依リ克ク銃後ニ備ヘ其ノ事績見ルベキモノアルハ深ク満足スルトコロナリ
今ヤ内外ノ情勢益々多事ニシテ婦人ノ協力ニ待ツモノ愈々多キヲ加フルノ秋會員宜シク堅忍持久奉公ノ誠ヲ效シ以テ婦人報國ノ使命ヲ完ウセムコトヲ望ム

三、御 諭 旨

明治三十六年三月廿二日第二回本會總會に賜はりし

諭 旨

我が愛國婦人會ハ諸氏が赤誠ヲ集メテ能ク慈惠ノ美果ヲ着クルコトヲ得ントス今ヨリ益々斯會ノ培養ニ怠ラズバ遂ニハ君國ノタメニ身ヲ致シタル幾多軍人ノ忠魂ヲ慰メ遺族ノ窮困ヲモ救フコトヲ得ベシ我レ今日諸氏ノ望ミニ從ヒテコ、ニ總裁タル事ヲ諾シ以テ斯會前途ノ發達ヲ希フ

明治三十六年三月廿二日

愛國婦人會總裁載仁親王妃智恵子

總裁閑院宮妃殿下より各職員に對し賜はりし

諭 旨

我愛國婦人會ハ日ヲ逐フテ隆盛ニ赴クモ本會ノ目的ニ對シテハ前途尙ホ遼遠ナリ各職員諸氏ハ刻下ノ時局ニ鑑ミ一層奮勵シテ事業ノ擴張ニ勉メンコトヲ望ム

明治三十七年一月二十二日

諭 旨

此度府縣知事諸氏ノ上京ニ際シテ幸ニ一堂ニ會スルコトヲ得タレバ聊カコ、ニ希望ヲ述ベ
 ントス
 今ヤ戦局ノ前途ハナホ遙カナレバ内ニアリテ有志ノ人ノ爲スベキ勤メハ思フニ多端ナルベ
 クレド殊ニ戦死者ノ遺族負傷ノ療兵等ヲ救護シテ出征軍人ニ一層後顧ノ憂少カラシメンコ
 ト我レヲ婦人社會ノ本分トシテ努ムベキ適當ノ業ニシテ誠ニ本會ノ今日ニ貢獻セントスル
 所ナリ
 抑モ我が愛國婦人會ノ諸氏ノ助ケニ依リテ頓ニ振興ノ運ニ向ヘルヲ喜ブハ云フモ更ナルヲ
 冀ニハ長クモ遲キ
 恩賜モアリタルナレバ我が信頼スル顧問諸氏ヨ且ツハ
 聖旨ノ在ル所ヲ奉戴シ且ツハ深ク時局ニ鑑ミテ益々各支部ノ擴張ト資力ノ充實トニ力ヲ致
 サレンコトコソ願ハシケレ

諭 旨

曩ニ我が國不幸ニシテ露國ト砲火ヲ交フルノ
 已ムヲ得ザルニ至リシ時本會職員ニ望ムニ特
 ニ時局ニ鑑ミ努力事ニ膺ルベキヲ以テセリ諸
 氏克ク其ノ意ヲ體シ以テ之ガ遂行ニ努メラレ
 タルハ我が大ニ喜ブ所ナリ今ヤ我が
 皇國ノ御稜威ト將卒ノ武勇トニ依リ國威更ニ
 中外ニ宣揚シ戦局亦特ニ其終リヲ告ゲントス
 ルニ當リ顧ミテ戦死者幾萬ノ遺族ト傷者トノ
 將來ヲ考フルトキハ其ノ救護特ニ一層切ナル
 モノガアリ本會ハ今日以後益々奮勵努力シテ
 克ク此事ニ従フベキノ急ナルヲ覺ユ若シ夫レ
 現時ノ規模尙之ニ應ズル能ハザルガ如キアラ
 バ更ニ其ノ良法ヲ講ジ以テ本會ノ責務ヲ完ウ
 スルニ於テ遺憾ナキヲ期セヨ

昭和三十八年十月四日

愛國婦人會總裁載仁親王妃智恵子

諭 旨

本會事業ニ關シテハ年來諸氏ノ盡力ト援助ト
 ニ頼リ擴張ノ効觀ルベキモノアルハ智恵子ノ
 最モ欣喜スル所ナリ
 然レドモ救護ノ實ヲシテ遺憾ナカラシメンコ
 トヲ期セントセバ素ヨリ容易ノ業ニアラズ幸
 ヒ諸氏ノ出京ニ際シ一堂ニ相見ルノ機ヲ得聊
 カ諸氏ノ勤勞ヲ慰スルト共ニ將來尙一層盡瘁
 ノ勞ヲ執ラレンコトヲ望ム

内務大臣ノ答辭

本日ハ御招待ヲ受ケマシテ有リ難ク存上ダ奉
 リマス特ニ優渥ナル御諭旨ヲ賜ハリ感激ノ至
 リニ堪ヘマセヌ本會ノ爲ニハ各地方長官モ將
 來盡力ヲ致スデアリマセウ
 茲ニ私ハ地方長官一同ニ代リ御禮ヲ申シ上ダ
 マス

諭 旨

愛國婦人會ノ目的ハ我國婦人結束ノ力ニ依リ國運ノ隆昌及社會ノ福祉ニ貢獻シ併セテ婦人ノ智徳ヲ鍊磨シ其ノ地位ヲ向上セシメントスルニ在リ而シテ軍人後援ノ事業ニ關シテハ本會創立ノ趣旨ニ鑑ミ特ニ遺算ナキヲ期スベキナリ今ヤ我が國ハ内外ノ各方面ニ涉リ重大ノ時局ニ直面シ之ガ打開ハ婦人ノ力ニ待ツ所甚ダ多シ本會ハ曩ニ其ノ組織ヲ革メ全國市區町村等ニ互リ之ヲ單位トシテ會員個々ノ活動ヲ促シ其ノ職業及年齡ノ如何ヲ問ハズ當時ニ於テハ傷痍軍人及軍人遺家族ノ慰藉救援ニ社會奉仕事業ニ愛國精神ノ涵養ニ關スル各種運動ニ其ノ他國防上ノ必要ニ應ズル訓練ニ又家庭婦人トシテ須要ナル智徳技藝等ノ修得ニ其ノ力ヲ致シ且一朝有事ノ日ニ於テハ翕然起テテ國家ノ急ニ應ゼンコトヲ期セリ

惟フニ本會ハ現下ノ國情ニ鑑ミ畫策施設スベキモノ益々多キヲ加ヘムトス會員宜シク會祖ガ熱烈至誠ノ精神ヲ體シ常ニ清新ノ意氣ヲ以テ彌々其ノ結束ヲ鞏ウシ以テ婦人報國ノ實ヲ舉ゲムコトヲ要ス

昭和八年十一月七日

愛國婦人會總裁 故依仁親王妃 勳一等 周 子

愛國子女團に賜はりし

支那事變に際し賜はりし

諭 旨

我が愛國子女團ノ目的ハ日本ノ女性ガ國ヲ愛スル真心ヨリ帝國軍人ヲ後援シ又力ヲ一般社會公共ノ事ニ致スト共ニ自ラ智徳ヲ修養セントスル愛國婦人會ノ貴キ精神ニ遵ヒ我が國子女ノ未ダ學忍ニ在リ或ハ尙成年ニ達セザル者ヲシテ婦人報國ノ精神ヲ鍊磨シ且之ガ實踐ニ努メ以テ國民ノ母タリ愛國婦人會員タルノ日其ノ名節ヲ完ウスル素質ヲ涵養セシムルコトヲ期スルニ在リ

惟フニ女子ハ男子ト共ニ相携ヘテ國家ノ理想ヲ達シ國民ノ繁榮ヲ致スベキ重大ナル責任ヲ荷フ役職員及團員タル者深ク本團使命ノ存スル所ヲ念ヒ能ク所期ノ目的ニ副ハムコトヲ望ム

昭和八年十一月七日

愛國婦人會總裁故依仁親王妃勳一等 周子

諭 旨

愛國婦人會會員諸子ハ克ク本會ノ主旨ヲ體シ會員ノ本分ニ從ヒ熱誠會務ニ盡瘁シツ、アルハ深ク満足スル所ナリ近時東亞ノ情勢ハ愈々紛糾ヲ重ネ事態益々擴大スルニ至レリ本會ガ其ノ創立以來婦人ノ鞏固ナル結束ト統制アル訓練トニ意ヲ用ヒ併セテ諸般ノ奉仕事業ニ從事シタル所以ノモノハ豫メ有事ノ日ニ備ヘムカ爲ニシテ會員タルモノ今日ノ時局ニ處シ心ヲ一ニシ力ヲ協セ以テ銃後ノ後援ヲ全ウシ報國ノ實ヲ舉ゲムコトヲ要ス

事變ノ前途ヨリ豫測シ難キモノアリ、會員諸子益々堅忍持久ノ節ヲ堅ウシ出征軍人ヲシテ後顧ノ憂ナカラシメ本會ノ使命ヲ達成スルニ於テ苟クモ違算ナカラムコトヲ期スベシ

昭和十二年九月十一日

愛國婦人會總裁故依仁親王妃勳一等 周子

諭 旨

愛國婦人會創立四十周年記念式典ニ際シ茲ニ各員ト相見ルヲ悦ブ今ヤ世界ハ一大變局ニ際
會シ皇國亦未曾有ノ時艱ニ直面ス寔ニ國民ノ總力ヲ舉ゲテ奉公ノ誠ヲ效スベキノ秋ナリ。
會員宜シク會祖ガ熱烈ナル盡忠報國ノ精神ヲ體シ本會四十年ノ光榮アル歴史ヲ回顧シ愈々
我が國女性ノ美德ヲ發揮シ益々銃後婦人ノ操守ヲ堅ウシ以テ八紘一字ノ聖業ヲ翼賛シ奉ラ
ンコトヲ望ム

昭和十六年三月二日

愛國婦人會總裁 故依仁親王妃 勳一等 周 子

四、御歌

皇后陛下御歌

なくさめむことの葉もかなたゝかひの
にはをしのひてすくすやからを

あめつちの神もりませいたつきに
いたてになやむますらをの身を

やすらかにねむれとそおもふ君のため
いのちさゝけしますらをのとも

總裁兩院宮妃殿下の御歌

花をみておもふこゝろを

いまはとてちるををしまぬものゝふの

こゝろにゝたる山さくらかな

總裁東伏見宮妃殿下の御歌

奥村五百子の誠忠をよろこひて

ますらをもおよはさりけり國のため

こゝろつくし、君がまことは

會員に賜はりし御歌

むらきものこゝろあはせて國のため

やまとをみな道の道をふまなむ

はしがき

一、本誌は、明治三十四年三月本會創立、並に同年六月本縣支部創設以來四十餘年に亘る沿革の記録であるが、當初本會の事業としては、軍人遺族及び傷兵の援助施設を主とし、其後戦時事變の都度、送迎慰問等に盡せしこと少からず、昭和に入りて社會事業並に各種の婦人報國運動に手を伸ばし、兩者相待つて益々會勢發展の氣運に向ひ、年々會員も増加し、殊に滿洲事變勃發、次いで支那事變となり、軍事接護は勿論各種運動の施設に其の會業大いに見るべきものあるに至れり。此の間の閱歴を成るべく詳細に記録せんとしたるも、四十餘年間といふ長期に渉れる記録を辿ることゝ往々不明の事項もありて、記事の精細を缺けるものあるは遺憾とする所であるが、或は巻頭の寫眞、或は統計の表示に依り、其の業績の一端を推知し得らるゝものあるべし。

一、本誌は本文を三編とし、第一編は總誌として本部支部創立の際より、四十餘年間の沿革概要並に特殊事項を記し、第二編は年誌として支部創設以來毎年の出來事を各年別に概記し、第三編は主要誌として施設事項中其の主なるものを稍々詳細に記述し、最後に附録として、愛國子女團の記録を各團別に詳記せり。従つて重要事實は各編に亘りて重複記述の場合あるも、時、場所、又は事情に依り、自ら精粗の別あれば彼は對照せられたし。

一、子女團誌は、一定期間の施設報告を基として記載せしを以て、地方に依り又團の規模に依り自ら異なる所あるべし。

一、御尊影、其他一般寫眞は、官内省初め陸海軍及び縣當局の承認又は檢閲済なり。尙寫眞は可成多く掲載の積りなりしも、紙面に限りあるを以て特別のもの、外は、代表的のものみに止めたり。

一、本誌編輯に當りては、支部創設以來三十餘年間會務に従事せられたる、新林健造氏の示教を受けしこと多大であつたことを、茲に謝意を表する次第である。

昭和十八年六月

編輯者 識るす

本誌は、長年縣支部勤續の書記廣井以忠君に其の編輯を依頼し、同君の熱心なる資料の蒐集と、其の健筆に頼るもの尠からず、記して其の勞を謝す。

元主事 土居 肩吉

本文目次

上編 總誌

第一章 本會創立並支部創設	一
第一節 本會創立の由來	一
第二節 支部創設と四十年	七
第二章 支部機構改變	一七
第一節 機構更新につき指示	一七
第二節 愛國婦人會組織系統一覽	二四
第三章 諸規程	三五
第一節 愛國婦人會規則	三五
第二節 施行細則	三八
第三節 支部通則	二六
第四節 會員徽章僱用規則	二九
本文目次	一

第五節 改正支部規則……………三〇

第六節 幹事部細則……………三一

第七節 町村役職員規定……………三三

第八節 支部會費取扱規程……………三四

第九節 救護救濟規則……………三五

第十節 軍人遺家族子弟救養費補助規程……………三六

第十一節 支部弔慰規程……………三七

第十二節 分會役職員囑託解囑手續……………三九

第十三節 支部處務規程……………四〇

第四章 事務所變遷……………四二

第五章 會 員……………四三

第一節 創立當時新入會員申込狀況（附、郡市別會員數）……………四四

第二節 會員増募につき岩倉會長の通牒……………四五

第三節 明治四十年頃會員募集の苦心……………四六

第四節 會員増加の大勢（附、郡市別會員數一覽）……………四七

第五節 支部創設以來累年會員増加趨勢……………四八

第六節 郡市別會員種別一覽（昭和十七年解散當時）……………五〇

第七節 郡市別佩有功章等級別人員表（解散當時）……………五一

第六章 支部役職員……………

第一節 幹事長、支部長、顧問……………五二

第二節 支部副長……………五三

第三節 参 與……………五七

第四節 評議員……………五九

第五節 會計監督……………六九

第六節 主 事……………七〇

第七節 事務囑託及参事……………七一

第八節 事務員……………七四

第七章 郡市役職員……………

第一節 初代各郡市幹事と囑託依頼狀……………七七

第二節 地方官民有志囑託幹事……………七八

第三節 市幹事部役員……………八一

第四節 解散當時五市聯合分會首腦者……………八二

中編 年誌

第一章 明治時代	八五
自第一節至第三節	自明治三十四年至同三十六年	八五
自第四節至第七節	自明治三十七年至同四十年	九四
自第八節至第十二節	自明治四十一年至同四十五年	一〇七
第二章 大正時代	一七
自第一節至第五節	自大正元年至同六年	一七
自第六節至第九節	自大正七年至同十年	一三三
自第十節至第十四節	自大正十一年至同十五年	一九
第三章 昭和時代	一五〇
自第一節至第五節	自昭和元年至同六年	一五〇
自第六節至第十節	自昭和七年至同十一年	一五八
自第十一節至第十六節	自昭和十二年至同十七年	一八〇

下編 主要誌

第一章 軍事後援	二二五
第一節 生活扶助	二三三
第二節 遺兒其他教養施設	二三三
第三節 犒軍恤兵	二三四
第二章 社會愛護施設	二五六
第一節 薄倖不遇兒の愛護	二五六
第二節 健康相談所乳幼兒の保護	二五七
第三節 妊産婦保護	二六一
第四節 託兒所設置獎勵	二六一
第三章 社會救濟施設	二六五
第一節 遭難罹災者に同情	二六五
第二節 不遇兒年末同情	二七三
第四章 婦人報國運動	二七四
第一節 國旗尊重運動	二七四
第二節 皇后陛下御誕辰奉祝と婦人報國祭	二七四
第三節 皇太子殿下御誕辰奉祝と子供の祝ひ日	二七五

第四節 選舉肅正運動……………二八一

第五節 防空演習……………二八二

第六節 愛國貯金獎勵……………二八三

第七節 廢物利用……………二九〇

第八節 羊毛資源愛護運動……………三〇〇

第五章 支部總會……………三〇一

第一節 第一回支部總會……………三〇二

第二節 第二回支部總會……………三一

第三節 第三回支部總會……………三一九

第六章 記念施設……………三八三

第一節 創立三十五周年……………三八三

第二節 創立四十周年……………三九九

第三節 皇紀二千六百年……………四一八

第七章 愛國子女團……………四二二

第一節 愛國子女團の起りと其の趣旨……………四三

第二節 愛國子女團の結成……………四三

第三節 光榮に浴した子女團……………四五

第四節 子女團の活動……………四六

第八章 本會解散と統合……………四三五

第一節 婦人團體統合に就いて本會示達……………四三五

第二節 統合に關し市町村分會に示達……………四三六

第三節 西部愛國婦人會各縣支部懇談會……………四四〇

第四節 本會解散決議……………四四六

第五節 清算事務處理心得……………四五三

第六節 感謝狀贈呈と支部長最後の挨拶……………四六〇

第七節 清算事務完了報告……………四六二

第九章 會計……………四六六

第一節 自明治三十四年會計報告……………四六六

至同三十九年會計報告……………四六七

第二節 自明治四十年會計報告……………四六七

至大正二年會計報告……………四六八

第三節 自大正三年會計報告……………四六八

至同十四年會計報告……………四六八

第四節 自昭和元年會計報告……………四六九

至同十一年會計報告……………四七〇

第五節 昭和十二年以降決算……………四七一

第六節 昭和十七年解散に付清算.....四六八

第七節 解散以來歳入出決算一覽.....四八〇

第十章 功勞 餘談.....四八二

第一節 支部長の功績.....四八二

第二節 役職員の功勞.....四九〇

第十一章 團體 旅行.....五〇一

第一節 赤、愛聯合旅行のお勧め.....五〇一

第二節 第一回赤愛聯合旅行.....五〇五

第三節 第二回赤愛聯合旅行.....五〇五

第四節 聖蹟参拜九州旅行.....五二二

附錄 愛國子女團編

子女團歌

口繪(寫真)

各子女團施設.....

一、縣立廣島高等女學校愛國子女團.....一

- 一、縣立上下高等女學校愛國子女團.....五
- 一、縣立三次高等女學校愛國子女團.....九
- 一、縣立甲山高等女學校愛國子女團.....一〇
- 一、吳精華高等女學校愛國子女團.....一一
- 一、縣立福山高等女學校愛國子女團.....一六
- 一、田熊村立青年學校愛國子女團.....一八
- 一、縣立松永高等女學校愛國子女團.....二〇
- 一、進德高等女學校愛國子女團.....二〇
- 一、門田高等女學校愛國子女團.....二二
- 一、藝陽實科高等女學校愛國子女團.....二三
- 一、縣立尾道高等女學校愛國子女團.....二四
- 一、縣立賀茂高等女學校愛國子女團.....二六
- 一、増川學園高等女學校愛國子女團.....二六
- 一、縣立可部高等女學校愛國子女團.....二八
- 一、縣立府中高等女學校愛國子女團.....三〇
- 一、土井田高等洋裁女學校愛國子女團.....三三
- 一、縣立竹原高等女學校愛國子女團.....三五
- 一、廣島愛仁女學校愛國子女團.....三五
- 一、縣立吉田高等女學校愛國子女團.....三五
- 一、町立瀬戸田高等女學校愛國子女團.....三六
- 一、町立向原高等女學校愛國子女團.....三九

一、縣立忠海高等女學校愛國子女團	四〇
一、尾道市立高等女學校愛國子女團	四〇
一、津田實科高等女學校愛國子女團	四七
一、吳市丸橋學園高等女學校愛國子女團	四七
一、廣島西高等女學校愛國子女團	四九
一、吳市土肥學園高等女學校愛國子女團	五〇
一、町立鞆實科高等女學校愛國子女團	五一
一、縣立深安實業學校愛國子女團	五一
一、廣村立實科高等女學校愛國子女團	五一
一、吳市立高等女學校愛國子女團	五二
一、濟美實科高等女學校愛國子女團	五三
一、縣立吳高等女學校愛國子女團	五三
一、廣島女學院高等女學部愛國子女團	五五
一、山中高等女學校愛國子女團	五七
一、吳市立實科高等女學校愛國子女團	五九
一、向島實科高等女學校愛國子女團	五九
一、祇園高等女學校愛國子女團	六〇
一、江田島實科高等女學校愛國子女團	六一
一、河內高等女學校愛國子女團	六一
一、縣立東城高等女學校愛國子女團	六二
一、縣立土生高等女學校愛國子女團	六三

上編 總誌

愛國婦人會々歌

- (一) 天地に輝く御稜威のかけに 朝日照る御旗常に仰ぎつ
國に報ゆる誠心かたく 強く結びし我等ぞ女性
- (二) 常には家庭の守りとなりて 日々の勞務に倦まずいそしみ
波風四方に荒ぶる時は 起ちて捧げん銃後の力
- (三) 自らを恃む心を基に 餘力を貯へ廣くほどこし
やさしく強き我が日の本の 婦女の道をば世界に布かん

第一章 本會創立並支部創設

第一節 本會創立の由來

奥村五百子女史が北清の慰問を了へ歸郷するに及び、戦死者遺族救護の急務を絶叫し、明治三十四年一月九日上京して舊藩主小笠原長生子爵を訪れ其の素志を陳べ、更に同月十四日子爵と同道して平素知遇を受けつゝある近衛篤磨公爵を訪ね、北清軍慰問の復命を兼ねて、戦地に在る我が軍の困苦の有様を述べ、涙ながらに軍人遺族救護の急務を説き、此の際是非さうした目的の婦人會を作りたいからと、熱心援助を依頼した。近衛公爵は豫てより東洋の大勢の趨くところ、將來益々日本の地位の重大性を加ふべきを察し、最近國民の間に報本反始の念が薄らぎ、舉世滔々として浮華に流れ、只利己にのみ生きんとする現状を見て、國家の前途を憂慮し、此の際純眞な婦人の力を利用して、是非とも富國強兵の策を講じなければならぬと深く考へてゐたので、五百子の意見に一も二もなく賛意を表し、その卓見を喜ぶと共に、専心その志の實現に盡力する旨を約し、爾後五百子を後援指導すること甚大なものがあつた。

其の年一月二十四日二人は再び會合し、同二十九日三たび談合、翌日公爵は軍人遺族扶助の件につき山脇房子女史を引見し、二月四日更に五百子と會見した。女史は、小松若宮殿下（東伏見宮）の御邸に伺候して兩殿下の御前に於て、支那の現状、北清に於ける日本軍の行動を言上し、進んでこれら軍人の後援をする爲め、是非此の際一大婦人會を作る必要がある旨熱心に御説明申し上げ、非常な御同情を拜受した。尙ほ、殿下の御心添へにより、閑院宮妃殿下にも拜謁することが出来、でも前述の主旨を申上げて、厚い御嘉納を賜はつた。

茲に於て二月六日、近衛公爵及び同貞子夫人の斡旋に依り、貴族院議長官舎に相談會を開き、近衛公、小笠原長生子、堀内文次郎陸軍少佐の外、近衛貞子、下田歌子、山脇房子、奥村五百子四婦人會同し、愛國婦人會創立に關する準備を整へ、會名を「愛國婦人會」と決定し、趣意書の起草を下田歌子女史に依頼した、かくして左記三十九名の人々を發企人とし、その斡旋のもとに遂に本會の誕生を見たのである。

- | | | |
|------------|-------------|------------|
| 公爵夫人 一條 悦子 | 公爵夫人 岩倉 久子 | 公爵夫人 二條 冷子 |
| 公爵世嗣 九條 惠子 | 公爵夫人 近衛 貞子 | 公爵夫人 島津田鶴子 |
| 侯爵夫人 大山捨松子 | 伯爵夫人 板垣絹子 | 伯爵世嗣 大谷 章子 |
| 伯爵夫人 大隈 綾子 | 伯爵夫人 松平 充子 | 子爵夫人 伊東美津子 |
| 子爵夫人 岡部 珉子 | 子爵夫人 小笠原 秀子 | 子爵夫人 谷 玖滿子 |
| 子爵夫人 松前 藤子 | 男爵夫人 花房千鶴子 | 男爵夫人 千家 俊子 |
| 伊集院 繁子 | 伊澤千世子 | 鳩山 春子 |
| 河野 關子 | 片岡美游子 | 嘉納須磨子 |
| 山本たほ子 | 後閑菊野 | 江原 縫子 |
| 佐方 鎮子 | 相馬陸子 | 三輪田真佐子 |
| 森村 菊子 | | 島田 信子 |
| | | 下田 歌子 |
| | | 濱尾 作子 |
| | | 山脇 房子 |
| | | 佐藤 猶子 |
| | | 武内 錦子 |
| | | 跡見 花溪 |
| | | 原 禮子 |
| | | 武内 錦子 |

越えて同月二十四日、發起人會を東京麹町區禮法講習會内に開き、近衛公爵自ら座長席に着き、本會創立の趣旨を略述し、左の趣意書を決議發表した。

(一) 愛國婦人會創立趣意書

掛卷も長き吾が皇國の御楯となれる軍人たち戰場に臨みて或ひは彈丸に碎かれ、或は瘴氣に斃るゝに當り是の國民として其の功に報ゆるには自ら種々の方法あるべしと雖も生計困難なる遺族の救助こそ最も先にすべきものため、抑も我が帝國嚮に征清の役あり去夏復た兵を北清に出だし、に忠勇義烈の軍人は命を鴻毛の輕きに比して雨なす彈丸の下に身を抛ち劔なす氷の床に夜を守り、名譽の戦死を遂げ不起の病に罹り異域の鬼となれる者果してそれ幾ばくぞ、されば公にも深く之を憫みおぼしてつぶさに救護の道を盡させ給へり。然れども公けの救ひの手には限りありて救はれ人は數限りも無し。あはれ頭に霜を戴ける翁の子を先立てたる這ひおざりだにしあへぬ兒の親に後れたるあるは夫に別れ兄に離れて衝にさまよへるともがら擧げて數ふるに追あらざるべし、之を救ふの方法將たいかにかすべき博愛に富み慈善を體せる中輻社會の力を協せて以て是等の遺族を賑恤するにしく者無からん。

爰に肥前唐津の人奥村五百子齡耳順に達して愛國の銳氣燃ゆるが如く嚮には朝鮮の衰運を悲みて之を傍觀するに忍びず東奔西走してそが教育の道を開き今又奮然起ちて海を渡り血を踏み屍を踏え、遠く北清に入りて親しく戦地の實況と軍隊の勞苦とを視察し歸國に及びて切に其の遺族救護の良法を講じ軍人達に後顧の憂ひなからしめ、愈々皇國の光輝を放たしめんとす。女史曰く「願はくは君達が半襟一掛の用を節し其の資を積みて之に充てよ」と眞に適切の言と云ふべし。われら不敏なりと雖も均しくこれ女史が同胞姉妹たりといかでか同感同情の熱涙を澱ぎて以て女史が希望を助けざるべき、依りて爰に愛國婦人會なるものを設立し普く有志の諸媛を糾合せんとするに當り、長くも各妃殿下の聞し召す所となりて漸次賛同の光榮を給はんとす。希くは世の閑秀たち吾等が微衷を賢察ありて賛成助力せられんことを切望し

て止まざる所になん。

明治三十四年二月

會長 公爵岩倉具定夫人 岩倉久子
 理事 公爵一條實輝夫人 一條悦子 外四名
 評議員 公爵二條基弘夫人 二條洽子 外百三名
 男爵 澁澤榮一
 會計監督 陸軍少將 佐藤 正

(二) 會務擴張の請願

明治三十四年七月二日、内務大臣男爵内海忠勝、司法大臣清浦圭吾兩氏及び地方長官會議のため上京中の、各府縣知事五十七名を華族會館に招待し、席上下田歌子女史は會旨を説明して會務擴張の要を述べ、内海内相大いに之を賛成し、地方長官に向つて本會の爲め應分の力を盡さんことを勸奨、地方長官一同亦これに賛意を表した。後日に於ける全國支部の設置は實に茲に基因したのである。

同年九月廿九日、日本體育會に於て在京各府縣警部長を招待して、本會より松前、奥村兩評議員出席會務擴張に關し、來會の警部長の助力を求むる所があつた。

その後清浦司法大臣の斡旋により、同年十一月大阪、長崎、廣島、名古屋、仙臺、函館の控訴院長、檢事長各夫人に書を贈つて入會を勸め、更に東京市内名流婦人二十餘名にも入會を勧誘する所があつた。かくして凡ゆる機會に會員の増

加に努め、會勢の擴張を圖つた。

次で同年十二月岩倉會長は會務の擴張に關し、地方長官及び郡區市町村長等の助力を要する點少なからざるを以て、支部職員より依頼したる場合は、支障なき限り之に應じ便宜を與へらるゝやう内訓あらんことを内海内務大臣へ請願した。即ち

拜啓我々共儀今春來別紙趣意書並規則書に據りて愛國婦人會を設立候處種々閣下の御援助に因り日を逐ふて盛況を呈し來り候然るに本規則中地方官並郡區市町村長の助力を要せざれば行はれざる件數多有之候間甚だ乍恐縮各支部職員即ち幹事長幹事婦人より本會事務取扱上の件につき依頼候節は各地方官吏並に郡區市町村に於て無差支限りその求めに應ぜしめ被下候様豫て大臣閣下より御内訓様のもの其向へ御示置可被下様切望に堪えず此段奉願上候 敬具

明治三十四年十二月三日

愛國婦人會長 岩倉久子

内務大臣 男爵 内海忠勝 殿

これに依り内海内務大臣は同月十日左記書面を各府縣知事に贈り、今後支障無き限り相當便宜を與へらるべき旨依頼する所があつた。

愛國婦人擴張の儀に就ては豫て御配慮相煩し候處今般更に同會長岩倉久子氏より左記の通り依頼有之候に就ては貴官に於て事務上差支無き限りは相當便宜を與へられ候様致度及御依頼候也

明治三十四年十二月十日

男爵 内海忠勝

各府縣知事宛

又翌三十五年二月會長及理事連名にて、兒玉陸相の添書と共に次のやうな書面を各陸軍將官夫人に贈つて、その入會を勸誘した。これは當時の陸軍大臣男爵兒玉源太郎氏の理解と厚意によつたものである。

拜啓愈々御多祥御起居可被爲在御祝賀申上候。左候へば私共此度別紙趣意書の如き會を發起致し、不東乍ら東洋今日の形勢に鑑み候て何卒國民尙武の氣象を鼓舞する一端とも致し度微衷に御座候。然るに此の事業は申す迄もたく其の關係致し候處誠に廣大にて、世間多數の方々の御賛同に預かり候はでは逆も目的を達し候譯に参り兼ね候。夫に就ては先づ第一に社會の上流に御座被遊候御許様方の御賛成を受け族はでは、本會の結果宜しからずと被存候へば何卒本會の趣旨を御賛成御入會遊ばし被下候様偏に御願申上候且御賛成御入會被下候上は本會評議員に御推薦申上度、此の儀御舍被下甚だ御手数數恐入り候へ共、其邊に就き御思召の程御伺申上度速に御返事可被下様申上候 勿々敬具

明治三十五年二月十一日

愛國婦人會長 岩倉久子

一條悦子

近衛貞子

愛國婦人會理事 島津田鶴子

大山捨松

谷 玖滿子

各陸軍將官令夫人宛

拜啓愈々御健勝奉欣賀候陳者今回愛國婦人會より別紙書面並趣意書規則等相添へ令夫人御入會勸誘の儀依頼有之候間可成御賛成の上御入會被下候様、貴令夫人へ御傳達之程希望の至りに不堪候先は 早々敬具

明治三十五年二月十七日

男爵 兒玉源太郎

各師團長宛

かくて以上の請願は當局者の同情と斡旋とに依り豫期以上の成功を奏し會務は着々として發展の一路を辿つたのである。

第二節 支部創設四十年

一世の女傑、佐賀縣唐津高德寺に呱呱の聲を上げた奥村了寛の娘五百子女史が戦死軍人遺族並に傷兵援助の目的を以て全國の女性に呼びかけ、婦人報國團體の結成を提唱、朝野貴顯有志の賛助を得、明治三十四年三月二日、東京に於て發會式を擧げ、次いで各府縣に支部設置を勸奨せしが、本縣は縣出身の佐藤正陸軍少將が本部に於ける事務主任たる關係もあり、逸早く之れに應じ、同年六月一日支部を設置した。當時支部の長は幹事長と稱し、時の縣知事江木千之閣下夫人江木中子氏其の任に當られ、全國に於て、第一回に幹事長の囑託を受けしは廣島佐賀の兩縣のみであつた。而して副長には、舊藝藩の重臣男爵夫人上田種子氏、幹事には各郡市長夫人の外、民間側では現大藏大臣賀屋閣下母堂賀屋鎌子氏、三浦樞子氏、次いで温田冬子氏、松浦リウ氏(安佐郡)種谷サメ氏(福山)等就任せられ、事務は、縣官房及び兵事係に於て本務の傍ら、其の勞を取りしが、會員募集に關しては、奥村五百子刀自の遊説及之れを助けし賀屋鎌子の郡部巡回講演によ

り、漸次増加し、創立當時の八十九名は、其の年末には百九十二名の多数となり、支部の基礎を築くことを得たのであつた。次いで、明治三十七年日露開戦となり、國民の緊張は一齊に昂揚し、戈を取らざる婦人は、茲に起ち上がり爲に會員數も俄かに、一萬を超過するに至つた。蓋戦死軍人遺族並に傷兵援助の要目前に迫り、愛婦の使命銃後婦人の活動を望む切なるものあるを認めし結果なるべし。而して本戦役中に於ける支部として、又會員として施設活躍せし一端を擧ぐれば、部隊の送迎、物品の寄贈、留守家族の慰問、陸海軍病院慰問、戦死者の葬儀参列は勿論、爲に生計に支障を生ぜし向に對しては、或は臨時に、或ひは定期生活費援助に手を伸ばしたが、當時戦時中に於ける此等の出費は貳萬六千餘圓であつた。事變終熄せしも本會の使命達成に要する資金は、他日の準備と共に、一層其の必要を感じ、茲に會員の大増募を計畫し、併せて其の結束を堅ふる爲、第一回支部總會を開くこととなり明治四十年十一月廿四日、長くも 總裁閑院宮妃殿下の台臨を仰ぎ、光榮に輝く總會は西練兵場で開催されたのであつた。時に會員數は、一躍三萬三千名に激増した。其の後大正三年十月に至り廣島第一中學校々庭に於て第二回總會を開催せしが、今次亦長くも、總裁閑院宮妃殿下の台臨を忝ふし盛況を極めたり。(別項詳記)翌大正四年滿州出動の十七師團、同七八兩年中第五師團及吳海軍のシベリア及び地中海方面出動につき、之が後援慰問は、感謝状にも見る如く目覺ましき婦人活動であつた。同九年尼港事件、支那暹春馬賊事件、同十二年關東大震災、同十四年三丹地方震災、越えて昭和五年靜岡縣下の震災、同六年及九年の東北凶作地の救済同七年北海道の水害、同九年函館の大火、岡山及び京阪地方の風水害、同年縣下殉職教員、同十年臺灣震災及縣下水害、同十三年神戸地方水害山嘯等の際、支部としての見舞金や、縣下募集の同情金品は莫大のものであつた。殊に昭和六年勃發の滿州事變に關しては、婦人の自覺に依り、會員の自然増加も著しく、昭和十年には一躍二倍の六萬人に達し、此の間に於ける部隊の送迎は、廣島驛及び宇品にて百七十回、慰問袋の發送三萬一千五百個、其他銃後後援に要せし總支出金高は拾貳萬三百五拾貳圓六拾六錢であつた。

次に國民の體位向上と、幼兒の保護は、最も必要なることを強調せる本部の指示に従ひ、昭和十年より町村分會に託兒所の設置、學童に對する給食費及び學用品の給與を獎勵し、更に進んで、妊産婦及び乳兒保護兒童健康相談所を設置し、婦人報國事業として、選舉肅正國民運動、國旗尊重運動、日の皇子様御誕辰奉祝、愛國貯金の實行等、着々其の事績を顯はしたり。昭和十二年五月廿三日には 總裁東伏見宮故依仁親王妃殿下の台臨を仰きて、廣島第二中學校運動場に於て第三回支部總會開催、會員一躍拾貳萬人に激増し異常の盛況であつた。(別途詳記)就中、特別會資の寄附、又は會員募集上の功勞等に依り有功章御親授の光榮に浴せしもの貳千餘名であつた。次に北支の風雲急を告ぐるや、第一着に、銃後後援實施要項を印刷して、五市三百六十六ヶ町村分會長に指示し、愛婦の一翼たる愛國子女團は、一週間に千人針一萬四千四百枚を準備し、應召軍人留守家族に對しては、生活生業其の他に關し相談に應ずべき本會の至情を周知せしむべく説明書十萬枚を配布した。斯くて事變の擴大に伴ひ、北支事變は支那事變となり、年を経ること五年にして遂に大東亞戦となり出動の皇軍は事變と共に其の數を加へ、戦果の擧がる裏面に戦死病歿及傷病者多數を生じ、之が爲其の送迎、慰問を初め留守家族や遺族に對する後援生業指導に關しては、力の限りを盡したのである。其他他銃後報國のため、所有奉仕に涙ぐましき活躍を爲し、食糧増産、休閒地の利用、荒蕪地の開墾、植樹造林、蓖麻栽培、忠靈塔建設費寄附、飛行機献納資金募集、不用金屬の回收、毛屑毛織物蒐集、茶殻蒐集、滿蒙開拓義勇軍並に開拓士獎勵等に至るまで、全力全精神を盡して愛婦使命の完遂に遺憾なからむことを期したのである。されば其の實績は一般の認むる所となり、愛國の至情に燃ゆる婦人は、聲に應じ進んで入會を希ひ、日々に増加せる會員は、年々一萬三四千人の多數を見るに至り、本縣二十萬人全國七百萬の會員を擁し、四十年の歴史に一層の光輝を放ちて、時局即應の活躍をなしつゝありしが、日夜進展せる時局の重大性は、各種團體の統制を望み、打つて一丸となることを要求せり。國策に副ふは愛婦の忠なる所なれば、昭和十七年二月十二日を以て、潔く本會の發展的解消を爲し、茲に新しく「大日本婦人會」を結成して之れに統合したのである。願ふ

に愛婦の名は消ゆるも、その精神は新團體に於て、彌々充實し、益々發輝せるが故に、會祖の遺業は永久不滅何等遺憾とする所なしと謂つべし。

(一) 創立當時苦心の往復書

左記は本會創立當時本部事務主任原胤昭氏より江木支部幹事宛送られし挨拶と用件

謹啓過日來當會趣旨擴張の爲め奥村五百子出張に際し佐藤少將殿の御紹介により尊臺には特に御同情被下非常の御熱誠を以て御賛助被下候儀誠に難有次第に奉存茲に謹みて私共の謝意を奉表候

陳者佐藤少將殿の御垂示により過日貴地職員囑託狀三十枚差出し申候可然御取扱奉希候尙會員徽章は特別會員の分五十個、通常會員の分三百個三個の小包郵便にて發送仕候實は佐藤少將殿御滞廣中に到達爲致候様被仰越に依り悉く取急ぎ製作爲致候に付或は不出來のもの有之やも難計候間御見分被下度若し不出來のもの有之候得ば引換爲致申すべく候間御斟酌なく仰越被下度候右不取敢申上候 以上

六月五日(三十四年)

江木中子殿 尊下

愛國婦人會 原 胤 昭

左記は陸軍少將佐藤正閣下(創立當時本會事務囑託)より門川支部事務員への回答であるが、一讀創立當時事務上に關し苦心の程察せらるべし

拜啓貴書拜誦益々御壯到御起居欣喜之至將亦小生滞廣中は不相變御懇命を蒙り御厚情奉感謝候

擬亦彼の婦人會の義に付ては御多忙中へ一事を加へたるの感あり必らず君の所へ此の用事の落ち來らんとは豫て想像罷在候何卒御婦人方の及ばざる處は御盡力の程爲邦家爲廣陵御願申上候、當地に於ても創設勿々の事にて貴婦人方の事に付矢張り男子の賛助員を要し小生も不知の間に其の員にある様の次第に御座候、御申聞の領收用紙は過日御送付したる筈于今御落手なきや、多分貴書と行違ひに相成りたる乎と存候若亦不着なれば一報を乞ふ。

御地に於ての事務費即ち筆墨紙郵便切手代の如きは御地會員納金の幾部を留置き御支拂相成候て可なり年末決算御報告相成候て可なり是れは江木御婦人様へは御話申上げ置きたる様相覺へ候、會員出金も幹事長の所へ御受領某銀行なりへ御預け置き年末に取纏め事務費御控除決算報告書と同時に御送附可然と存候其間に本會より送附を促したる時御送附にて可なり、本會は入會者の人員にて金員は間違なき様現有するものと認め實際遺族へ附與する時は中間にて請求する可とあるべし。

特別會員にして年々貳圓を醸出し拾五圓となれば止む
普通會員は拾圓に至れば止む。

この法は京都にて行はれ居候是れは京都より伺出會長の所にて地方の適宜に任せられたる由、畢竟本會規則修正迄は本會の規則に明文なきものは地方幹事長の意見に任すとのこと随分同意を表し難きなれども此の修正も八九月頃なるべし否十月になるべし、其の際は多分七圓五拾錢となるべし他は此の件に付ては京都通りにて尙其の他に中途より一時金へ移るの法を設くることゝなるべし。

依て此の際廣島には普通會員の一時金を七圓と御定め相成りては如何ん、他日規則修正するも既得權にて別に差支へなかるべし、幹事長より本會長宛尋ね出られ候へ共必らず許可ある事と存候御参考迄に申し添候。

又豫算を以て請求云々誰に宛て、可なるや云々是等凡て幹事長より會長宛、場所は體育會内にて可なり、若亦他事込み

入たる件なれば貴下より小生宛私信御尋ね被下候ても相辨じ可申右要々御答へ迄 勿々敬具
六月十七日(三十四年)

門川正之殿

佐藤正

二伸 江木令夫人此の件に付御盡力の趣奉感謝何卒御序によろし御致聲を乞ふ 不一

(二) 奥村會祖會旨宣傳講演

決死演壇に立ち病を冒して熱辯を振ふ(當時の記録)

愛國婦人會趣旨擴張の爲め各府縣巡回講話中の奥村女史が廣島縣内に於て講話するとの事を聞くや、幹事長評議員等と諮り幹事並に事務員等を督勵し諸般の準備をなし頻りに會員の増募に努め、同女史十二月廿七日午後五時八分本縣へ來着するとの確報を得たれば、直に宿舎を定め或ひは講話の場所日割等を豫定し各郡市幹事等に對しては特に諸般の準備方を照會し、或は支部事務員を派し或は郡市より事務員來り諸般の打合等をなし來着の日を待ちつゝありたり。

(十一月廿七日) 午後五時八分廣島驛着の汽車にて奥村女史は隨行者本部事務員中村菅二郎と共に無事來着したり。此の日偶々風雨に際したれども多數の歡迎者ありて女史は會釋の上豫定の通り宿舎廣島市西地方町三浦幹事の邸宅に入りたり、時に午後六時なりし。此日幹事長は評議員幹事事務員等と共に廣島停車場へ參集して歡迎したり。

(十一月廿八日) 午後一時廣島偕行社に於て講話會を開會したり。聽衆約四百名許り此日の來會者は多くは在廣官民中流以上の婦人にして、競つて愛國婦人會々員となりたるもの其の大部分を占めたれば即時入會せしものは少數なりしも本

會擴張の趣旨を普及するには最も好機會にして、殊に女史の講話は非常なる感動を與へ滿場殆ど涙を灑ぎ袖を濕さざるものなかりき。即時入會者二十一名ありたり、此の日幹事長以下幹事事務員等終始幹旋盡瘁したり。

(十一月廿九日) 午前九時より武徳會廣島支部發會式舉行に付き支部顧問徳久恒範の案内に依り女史は徳久幹事長以下評議員幹事等と共に臨席せり。

同日午後六時より廣島市清岸寺に於て講話會開會し聽衆無慮千有餘名市内の男女大部分を占め、即時入會申込者廿四名ありたり。

(十一月三十日) 女史は前夜より腹痛にて食事もなされざりしが、病を押して午前六時過ぎ廣島市を發し汽車にて賀茂郡西條町に着し正午より同地教善寺に於て講話午後六時廣島に歸着せられたり、此の日聽衆八百餘名、即時入會者二十一名ありたり。

(十二月一日) 安佐郡可部町眞宗品竊寺に於て講話會開會の豫定なりしが、女史は前日來腹部を痛め苦悶に堪へざれば匹田病院長に診察を乞ひたり、匹田醫學士は同夫人が幹事たるの緣故を以て直に驅け付け、投藥百方治療に盡力したり。尙宿主三浦幹事は後藤病院長(醫學士)を招請し、徳久知事は縣病院副院長内科部長眞木醫學士を差向け見舞はしめ又市内に於て開業せる岩間醫院々主岩間鑑太郎氏は女史と同郷故舊の縁を以て見舞ひたり。此の如く孰れも懇篤治療を加へ幸ひに重きに至らざりしも、未だ病褥に臥し僅かに牛乳粥汁を舐むるに止まり、身体衰弱せるを以て醫師の意見に依り此の日は休講することとなし其の代理として幹事賀屋鎌子女史出張講話會は支障なく開會することを得たり、聽衆千餘名大いに感動を與へたり。

(十二月二日) 午前七時廣島市を發し佐伯郡廿日市町に着し午前十時より同地郡役所議事堂に於て開會せり。聽衆無慮七八百名同地附近の男女並に同地婦人會員、學校教員、町村長有志者等も多數出席す。此の日女史は病氣全く治癒に至ら

ず病褥に臥し既に四日間も絶食せるを以て、凡て身體未だ舊に復せず醫師幹事長等より懇切に注意を加ふるも敢へて肯んぜず演壇上に倒れるは満足なりとして遂に病褥より出で、熱誠に講話をなしつゝありしが、悲しいかな中途にして忽ち全身に汗を流し顔色蒼然として將に卒倒せんとするに至り、已むを得ず隨行幹事中の賀屋鎌子女史代つて講話をなしたりしが、女史は再び演壇に立ちて引續き講話をなし遂に同會の講話を全うするを得たり。講演中滿場肅として恰も水を打ちたる如く拍手の音さへ耳にせず唯女史の熱心と赤誠とに感動して歎歎流涕の聲暫く止まざりし、尙此の日は午後六時より同郡嚴島町光明院に於て開會の豫定なりしを以て一行は嚴島町へ向ひ豫定の通り開會せり。聴衆約五百餘名即時入會者十五名あり本日は同町に宿泊せらる。

(十二月三日) 午前嚴島神社參拜せられしが一行に對し内陣參拜御神樂等の待遇あり、寶物をも縦覽、午前十一時同郡大竹村に到り同地勝善寺に於て午後一時より開會、聴衆八百餘名實に盛會なりし。此地の講演は豫定外なりしも同地小學校長高田義尹、有志者を代表し廿日市町に來り懇請せしを以て開會することゝなせり。高田校長廿日市町に來り懇請するや會々女史は褥に入り病を慰しつゝあり、尾野郡長登原事務員等は額を感め首を傾け協議せるに當り女史は室を隔てゝ之を聞き忽ち起ちて承諾の旨を述べ、然れども豫定ならば兎も角病を推して講話の場所を増すは身體を害すべしと制したれども女史は演壇に斃るれば即ち止む、國家の爲に死するは本望なり故に推して出講すべしとて遂に此地にも開會することゝなりしなり。

(十二月四日) 午前六時廣島市を發し午前十一時豊田郡忠海町に着午後一時同地明泉寺に於て開會、聴衆約千餘名即時入會二十八名ありたり、就中特別一時金四名あり一般に感動を與へ盛況なりし、此の日同地に滞在したり。

(十二月五日) 午前八時忠海町を發し午前十一時尾道市に着す、午後一時より豫定の通り同地小學校に於て開會聴衆約

二千名、即時入會者四十三名にして最も盛況を極めたり、此の日同地の富豪天野半次郎方に宿泊せり。

(十二月六日) 午前八時尾道市幹事及會員等と共に同地高等小學校に於て寫眞を撮り直に深安郡福山町に向ふ。同日午前十一時福山町に着し、豫定の宿舍同地幹事藤井モト子方に到り午後一時より同地葦陽館に於て開會、聴衆千有餘名即時入會三十四名ありて頗る盛況を極めたり。此の日同市滞在

(十二月七日) 午前八時福山町を發し沼隈郡松永町に着し午前十時より同地高等小學校に於て開會、即時入會三十名ありて此地の講話も豫定外なりし、同地幹事並に婦人會の懇請ありて開會のことゝなれり同日午後六時一行は廣島市に歸着す。

(十二月八日) 午前八時廣島市を發し吳市に向ふ。此の日は吳鎮守府より廻はされたる汽船に便乗して吳市に着し午後一時より同地專徳寺に於て開會、聴衆八百餘名即時入會百二十二名頗る盛況を極めたり。此日吳市澤原コト子方に宿泊
(十二月九日) 午前八時より吳軍港碇泊の軍艦松島拜觀せしが柴山司令長官夫人の斡旋に依るものなり。拜觀終りて鎮守府の汽船に便乗、字品に歸航午後三時廣島に歸着す。同日午後六時より廣島市大手町六丁目神宮奉齋會に於て開會即時入會二十三名ありたり。

(十二月十日) 午前九時より廣島私立高等女學校(山中高女)に於て講話、午後六時より春和園に於て晚餐會を催うし奥村女史を招待したり。本催しは師團長夫人山口評議員、旅團長夫人長岡評議員、知事夫人徳久幹事長の發起であつた。

(十二月十一日) 午前十一時徳久幹事長の發起にて副幹事長幹事事務員等大手町八丁目竹茂樓上に於て晝餐會を催はし奥村女史、中村事務員を招待す、席上幹事等の餘興あり歡を盡して散會す。同日午後六時より猫屋町明教寺に於て開會、即時入會四十名ありたり。

(十二月十二日) 午後一時を期し幹事長以下一同廣島偕行社に參集し寫眞を撮り午後三時より縣立高等女學校に於て師

範學校女生徒をも集合せしめて講話ありたり。

同日午後八時五十三分廣島驛着上り列車にて東伏見宮殿下十二日江田島兵學校卒業式へ御成の御途中、當市長沼旅館に御一泊あらせらるゝに付き奥村女史は廿日市驛に奉迎し同所より廣島驛に供奉せり。廣島驛では幹事長以下幹事會員等は奉迎同所御休憩所に於て拜謁を賜はり一同感涙に咽びたり。

(十二月十三日) 午前八時奥村女史は廣島市出發愛媛縣に向ふ、同縣よりは數日前より事務員大西量平出迎への爲め來廣したり。當支部よりは登原猪之助及び宿主三浦新平の兩人愛媛縣迄見送りの爲め出張幹事長以下幹事等は宇品港迄見送り一同別れを惜み袂を潤したり。

第二章 支部機構改變

、明治三十四年六月一日、本縣に支部を創設するや、各郡市役所兵事係に事務を囑託し、同年十月二十六日各郡市長夫人に地方幹事を囑託したり。斯くて縣支部に於ては知事夫人を幹事長とし、各郡市長夫人をそれ〳〵郡市幹事部幹事と稱へしが、其後民間に幹事を設くるに至りしを以て明治四十二年一月郡市を幹事部、町村を委員區と稱へ、縣支部幹事長を支部長と改稱、郡市長夫人を幹事部長、町村長夫人を委員區長と呼ぶこととなり、同時に郡市長及町村長に對してはそれ〳〵顧問を依頼したり。爾來、多年郡市町村長の援助を受けつゝありしが、大正十五年六月郡役所廢止と共に、自然幹事部は消滅し、昭和八年四月支部規則の改正に依り、市町村區域を分會と改稱し、分會の下に分區を、分區の下に班、班の下に組を設け、分會をして専ら事業を行はしむべく機構の改正を行はれたるか、就中資金の多額を要する事業は、依然支部の施設に待つべきもの多かりき。次に廣島市幹事部は、明治四十二年八月、縣支部の直轄とせしが、大正三年十月、再び幹事部を置き、同十四年十二月更に縣支部の直轄となせり。

第一節 機構更新に就きて湯澤支部長の指示 (昭和八年四月)

(一) 非常時への總進軍

今や吾が國は洵に内外多事多端で、數へ來れば曰く思想の赤化、曰く財界の不況、曰く國際聯盟脫退、曰く日米問題、

曰く日支問題等々、幾多の國難の時象が眼前に展開されて居るではありませんか。加之南洋諸島委任統治、ワシントン及ロンドン條約改訂問題等、國家の安危に拘はる大問題も亦聽て私共の頭上に墮ち來るのであります。國民の半數として將又家庭の半身としての重要な地位にある私共日本婦人たるもの、此の國歩艱難の秋に方つて、如何でか手を拱ぬいて之を傍觀して居られませうか。吾が愛國婦人會は茲に其の陣容を新にし其の聲を大にして全日本婦人に呼び懸け、更により強く非常時への總進軍を試みつゝあるのであります。

(二) 機構更新の三要點

之は約言すれば機構更新であります。之を形式的に申せば從來の府縣支部中心主義から、市町村分會主義への轉換であり、又實質的に申しますれば事業の分任であり内容の擴充であります。其の結果として次の三點が重要な問題となる譯であります。

其の第一は、愛國婦人會の標榜する婦人報國の新らしい内容は、吾が市町村の婦人として將又吾が日本の婦人として爲さねばならぬ又爲し能ふべき凡てのものが網羅さるべきであります。此の主旨を徹底しますれば、凡ての婦人團體に於ける愛國的奉仕運動を包括することゝなるのでありませう。随つて吾が愛國婦人會員の名に於いて全日本婦人が打つて一丸となり得る可能性をより一層強めることゝなつたのであります。

其の第二は、此の婦人報國の運動は先づ其の郷土に其の基礎を築かうとするものでありますから、其の經營さるべき事業は必ず其の市町村の實情に即したるものでなければなりません。随つて其の認識と運用とは、必然的に其の市町村に於

ける婦人自からの體驗と工夫に俟たなければなりません。此の意味に於ける會員の活動は、即ち愛國婦人會の會務分任であり團體行動の自治であります。今回市町村を事業經營の單位とし、更に分區を設けて役職員を密加するものも此の主旨からであります。

其の第三は、市町村に於ける事業の經營に伴うて支部から其の經費を供給することが必要となります。乍併之は一面から見ますれば、市町村に於ける新なる事業の創設でもあり繼續でもありますから、支部としては勢ひ新なる會員の増加に依る財源に俟たなければなりません。故に之を一方から申せば市町村への財源の自己還元でもありますから、其の市町村の會員の増加が最も重大な且根本の要件となる譯で支部は之に基いて今後市町村の事業經費には若干の補助を致します。

(三) 今後に於ける支部の職能

果して然らば、此の機構の更新に伴ふ支部の職能如何といふことが問題となつてくる譯であります。今後に於ける支部としての職能は、第一に統制機關としての分會の指導援助であり、其の次が縣下全般を對象とする救護事業又は社會事業に就いて其の經營を進めることになるのであります。故に分會が事業經營の主體となるといふことは、支部事業の廢止を意味するものではなくして、否寧ろ其の部面を限つて、より一層之を擴充せうとするものであることは、念の爲めに申加へて置きます。

今後に於ける市町村分會が、如何なるものを經營すべきかは、將來に於ける愛國婦人會の統制上極めて重要なことと思はれますから、次に其の主なるものを例示して諸姉の御参考に供しませう。

(四) 分會に於ける新經營の題目

- (1) 軍人の救護弔慰
名譽の戦死を遂げ、又は不幸にして従軍中病歿された方に對しては懇ろに其の英靈を弔ひ、其遺族の方に對して能ふ限りの救護慰藉の手段を講じます。
- (2) 軍人の優待
會員も自ら進んで入退營又は出征軍人の歡迎送に加はり、又時々其の留守家族の慰問を致し、若し其の家事生業に手不足を生ずる場合には、郷里の會員は率先之を援助し、遠征の軍人をして後顧の憂無からしむるやうに致します。
- (3) 國防への参加
國防に就いての知識を養ひ、特に防空講習とか防毒演習とかには進んで之に参加し、或は國防の爲めの金品、出征中の軍隊に對する慰問文・慰問袋・恤兵金の勸誘募集などを致します。
- (4) 貧困者の救助
日常の生活に困つて居るものに何等かの救助を爲し、又天災地變の罹災者に對する義捐金品の募集などを致します。
- (5) 知徳の修養
産業、衛生其他婦人としての智徳技能の修養練習をする爲めに講習講話會などを開き、又は國體觀念鼓吹の爲めに國旗章の頒布などを致し、又時々觀察見學旅行を致して見聞を博めます。
- (6) 家庭教育の振興

子女教育の方法を研究し、其他幼兒の育て方兒童の躰け方など、凡て母としての必要なる事業の修得、其他托兒所の經營などを致します。

(7) 生活の改善

結婚の改善其他虚禮廢止並に臺所の改良等、凡て家庭生活の合理化を實行し、貯蓄特に愛國貯金の實行を致します。

(8) 婦人の親睦扶助

部落又は村内の婦人の親睦和樂の施設を爲し、又不時の災害などには互に扶助し慰安する方法を講じます。其他に尙、自己の修養、婦人報國の趣旨に適ふものは適宜に之を選定して何等差支のないことであります。

(五) 會員の體驗と興味

斯くして吾が愛國婦人會は、自己の修養に依つて得ました體驗と、其の實務に干與することの興味とに依つて、更により強く自己と愛國婦人會とを結び付け、愛國婦人會は自己の愛國婦人會であるとの觀念を鞏固にすると同時に、自己も亦愛國婦人會に依つて始めて婦人報國の實を擧げ得るといふ認識を強め得ることゝ信じます。

(六) 自警と自省の四則

以上は今回の機構更新の骨子であります。扱て愈々之が實行に方りましては、尙相互に自省し自警せねばならない點が多々あると信じます。茲に其の一端を述べて諸姉の御理解を願ひたいと存じます。

(1) 苟も婦人報國の理想の傘下に集り、日本婦人の大同團結に加はる私共日本婦人としましては、其處に何等貴賤の別がある筈もなく、勿論斷じて貧富の隔てなどがあつてはなりません。又吾が愛國婦人會として自ら高く居るべきものでなく、又獨力で以つて能く其の大を爲し得るものと考うべきでもありません。吾々は凡ての女性と和衷協同し、凡ての有識者からの援助と支援とを眞心から冀望するものであります。就中他の婦人團體に對しては、夫れが如何なる組織の團體であろうとも、苟も私共の理想とする婦人報國と其の方向を異にせざる限りは、互に相提携し相共働すべきで、決して他を排し又は他より排せられないやう努めて謙虚でありたいと存じます。

(2) 吾が愛國婦人會の機構の更新は可成急角度でもあり、又着手せうとする事業も亦相當多面的でもありますから、茲にお互は之が事業の爲めの事業に墮して了はないやうに戒心しなければなりません。要は婦人自己の修養であり、婦人報國の手段でありますから、先づ手近な簡易な事業から習熟し、現實に其の効果を擧げなくてはなりませんから、苟も手續の煩瑣に涉るものや、又其の名の實に伴はない虞のある事業は、寧ろ最初より之を爲さざるの勝れるに如かないことと存じます。

(3) 必しも吾が愛國婦人會には限りありませんが、從來此の種の團體に於いては、動もすれば唯會費を納めさへすれば會員たるの能事了はれりとする風があるやうであります。特に愛國婦人會の目指すところは、繰り返して申す如く婦人としての修養であり國家社會への奉仕でありますから、會員は躬ら其の會務の實際に當ることに依つて、所謂事上練磨の效を積むといふところの心懸けが肝要と存じます。斯る心意氣を有つ愛國婦人會に依つてこそ、始めて第二の國民たるべき子女にも犠牲奉仕の觀念が植え付けられ、又國家の單元としての家庭生活をも薰化することが出来るのであります。吾が愛國婦人會員は實に此の家庭と國家とを結び付ける紐帯となるの使命を有つて居ること、即ち「家の守りは國の守り」であるべきを忘れてはならないと信じます。

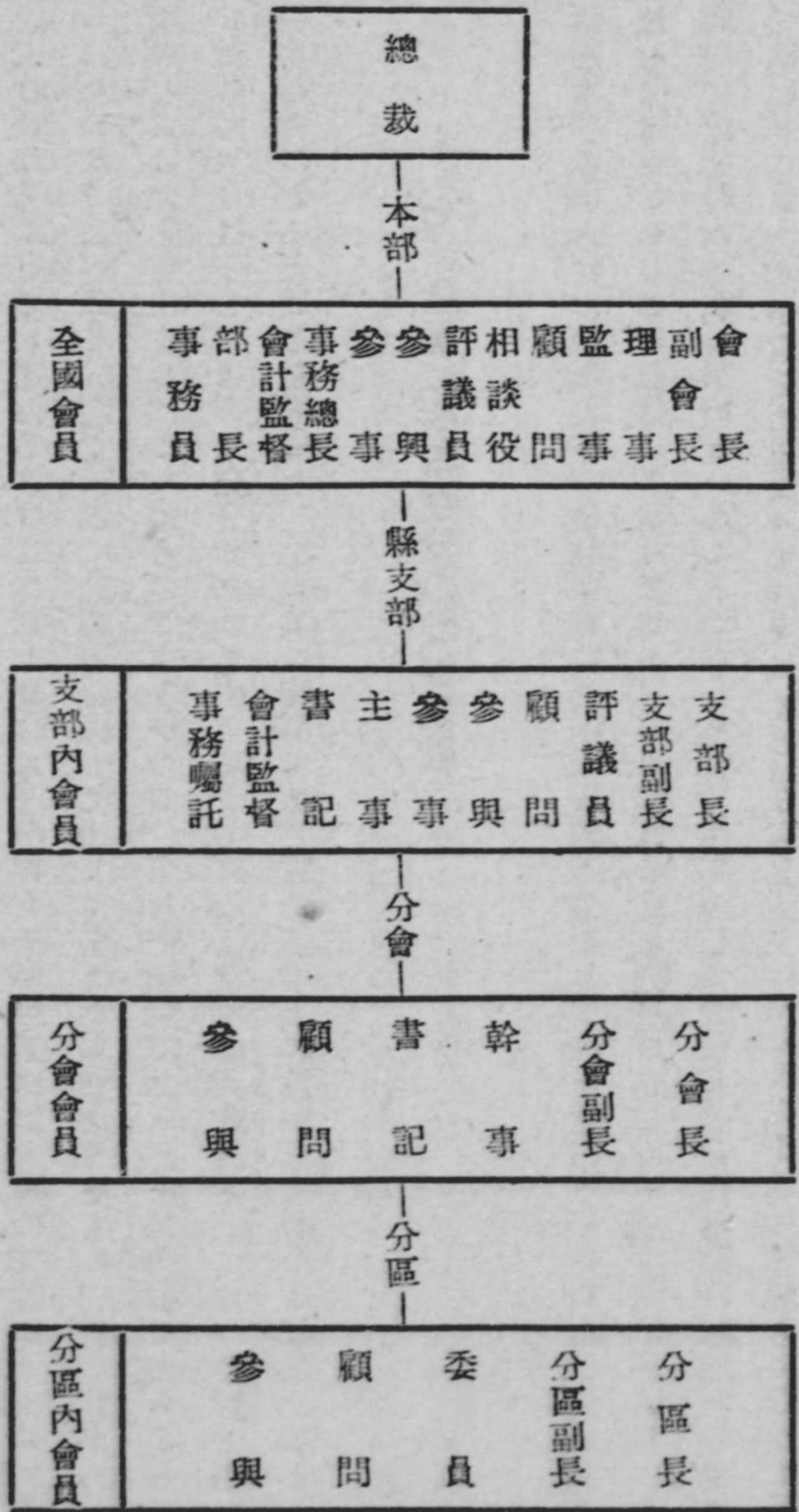
(4) 愛國婦人會員は特に質素を重んじなければなりません。奥村女子が服装は黒木綿の紋付に木綿の丸帯を着用するやうに勧められたのは、之が最も簡素で安價で且禮容を保つに適して居るからであります。併しながら會員たるものは必ず之を新調し又は之を着用せねばならぬものではないので、例令不斷着であらうと又綺物であらうと、唯一つの徽章さへあれば愛國婦人會員としては夫で充分であります。要するにお互愛國婦人會員としては、奥村女子が誠められた質素といふ根本精神のあるところを體得し、之を其の時勢に應じ實生活の上に生かして働かせば良いことと確信致します。

(七) 會員に依る會員の増加運動

終りに臨んで特に申上げたいことは、會員諸姉は吾が愛國婦人會をして倍々隆昌ならしめんとすることに於いて、私共と其の希望を同じうされることを信じて疑ひません。然らば此の會を隆昌ならしめるの途如何といふことは、詮じ結めれば結局多數の會員を得ねばならないといふことであります。然り而して從來吾が會員増加の運動といふことには、地方によりましては私共會員自身が骨を折るよりも、兎角其の局に當つて居らるゝ男子に任せ勝ちになつて居つたとも謂へます。吾が愛國婦人會の盛衰の鍵が、男子の方の掌中に在るといふことであつては、私共婦人の無力を示し、又會員の怠慢を表はすこととなりますから、今後に於いては先づ會員自身が第一線に立つて同志を引入れるといふやうにならなければならぬと存じますから、此の點切に諸姉の御諒解と御援助とを希望致します。

第二節 愛國婦人會組織系統一覽

前節の如く機構更新せられたに付ては本會の組織系統は左表の如く縦の連絡を保ち上意下達、下意上達を圖ることゝなれるか尙分區の狀況に依りては班を設け班の下には組を設け隣組制度との連絡を圖ることの出來得る仕組に迄進んだのである。



第三章 諸規程

第一節 愛國婦人會規則 (明治三十四年二月制定九月修正セシモノ)

- 第一條 本會ハ戰死、准戰死者ノ遺族ヲ救護スルコト及重大ナル負傷者ニシテ癡人ニ屬セル者ヲ救護スルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ愛國婦人會ト稱シ本部ヲ東京ニ置キ支部ヲ各地方ニ置クモノトス
- 第三條 本會々員ヲ分チテ左ノ三種トス
 - 一、名譽會員 皇族ヲ推戴ス
 - 二、特別會員 會費トシテ拾ケ年間毎年金貳圓ヲ納ムルカ若クハ一時金拾五圓以上ヲ納ムルモノ
 - 三、通常會員 會費トシテ拾ケ年間毎年金壹圓ヲ納ムルカ若クハ一時金七圓ヲ納ムルモノ
- 第四條 本會ハ多少ニ係ラス有志者ノ寄附金ヲ希望ス
- 第五條 本會ハ收入シタル金圓ハ確實ナル銀行ニ保管セシムルモノトス
- 第六條 本會ハ收入シタル金圓ハ 總裁ノ允許ヲ經テ被救護者ヘ贈與スルモノトス
- 第七條 本會ハ左ノ職員ヲ置ク
 - 總裁 一名
 - 會長 一名

理事 若干名
評議員 若干名

各支部ニ左ノ職員ヲ置ク

幹事長 一名
副幹事長 二名 (明治三十四年十二月追加)
幹事 若干名

會長ハ會計監督若干名ヲ囑託スルモノトス

第八條 本會ハ右職員ノ外有給事務員若干名ヲ置ク

第九條 會長及理事ハ評議會ニ於テ選舉シ 總裁ノ允許ヲ仰グモノトス但任期ハ三年ニシテ再任スルコトヲ得

評議員、幹事長、副幹事長、幹事ハ會長及理事ヲ推薦シ 總裁ノ允許ヲ仰グモノトス

第十條 本會ハ毎年一回大會ヲ開ク

第二節 施行細則 (明治三十四年二月制定)

第一條 本會ハ左ノ徽章ヲ各員ニ贈與ス

- (一) 特別會員 金色製
- (二) 通常會員 銀色製
- (三) 贊助員 銅色製

第二條 本會ノタメ特ニ功勞アリタル人及ヒ金額五拾圓以上ヲ出金シタル人ニハ左ノ有功章ヲ贈與ス

- 一、七寶製
- 二、七寶金色製
- 三、七寶銀色製

但有功章ハ男女ニ係ハラズ贈與スルモノトス

第三條 寄附金者ヘハ金額ノ多少ニ係ハラズ謝狀ヲ贈與ス

第四條 本會ハ毎年一月ヲ以テ前一年間ノ事務及收支會計ヲ報告ス

第五條 救護方法ハ左ノ程度ニ依ル

(一) 救護ノ程度ハ甲乙丙ノ三種ニ區分ス

甲ハ衣食ニ差支ナキモノ

乙ハ半バ補助ヲ要スルモノ

丙ハ全部補助ヲ要スルモノ

(二) 會長ハ前項ヲ斟酌シ收入金額ニ從ヒ原案ヲ調製シ評議員ノ議決ヲ經テ總裁ノ裁可ヲ仰キ各地ヘ金員ヲ分配スル程度ヲ定ム

(三) 遺族ニ給與スルニハ幹事長、幹事ノ手ヲ經ル事又遺族ハ受領證ヲ直ニ會長宛ニテ出ス事但當分ノ中分配法ハ會長ノ規定スル簡便法ニ依ルコトヲ得

(明治三十四年十二月有功章ニ關シ左記ノ通り内規ヲ定ム)

第二條 有功章贈與支部内規 (追加)

- 第一條 總裁。名譽會員。金參百圓以上寄附者。五百名以上入會者ヲ紹介シタル者。之レニ準スル特別功勞者。
- 第二條 金百五拾圓以上寄附者。三百名以上入會者ヲ紹介シタル者。之レニ準スル功勞者。
- 第三條 金五拾圓以上寄附者。百五十名以上入會者ヲ紹介シタル者。之レニ準スル功勞者。
- 謝狀贈與支部内規（追加）
- 二葉（大小）ノ謝狀ヲ製シ置キ大ハ七圓以上ニ小ハ七圓以下ニ用フルモノトス
- 又五拾圓以下ニハ會長ノ名ヲ用ヒ五十圓以上ニハ總裁並ニ會長ヲ併用スルモノトス。物品ニ對シテモ又之レニ準ス

第三節 支部通則（明治三十四年二月制定）

- 第一條 各地方ニ支部ヲ置キ愛國婦人會某地支部ト稱ス
- 第二條 支部一切ノ管理ハ幹事長之ニ任シ本通則ノ範圍内ニ於テ便宜處置スルモノトス
- 副幹事長ハ幹事長ヲ補佐シ幹事長不在ノトキ一名之ヲ代理ス
- 第三條 各幹事ハ受持郡區ヲ定ムル者トス
- 第四條 各幹事ハ金圓ヲ受領シ毎月末ニ之ヲ該地方幹事長ヘ出スベシ
- 幹事長ハ更ニ出金者ノ氏名身分宿所金額ヲ會長ニ報告シ金員ハ東京市日本橋區通一丁目森村銀行ヘ送附シテ預ケ入ル、モノトス

- 第五條 各幹事ハ其受持區ノ市長區長郡長島司並ニ有志婦人ト協議シテ戰死准戰死者（戰死者同様ノ扶助料ヲ官給セラレタルモノ）ノ遺族及重大ナル負傷者ニシテ癡人ニ屬セル者ノ現況ヲ調査シ其救護程度ヲ指定シ毎年四月及十月ノ二回ニ幹事長ヘ出スベシ
- 第六條 納金ノ徵集方法及徵集期日等ハ地方ノ便宜ニ從ヒ幹事長之ヲ定ムルモノトス
- 第七條 支部經費ハ實收納金ノ十分ノ二以内ヲ以テ支辨スルモノトス
- （明治三十五年追加）寄附金ハ控除セサルコト
- （明治三十七年追加）支部經費ハ十分ノ三以内ニ増額ス
- 第八條 幹事長ハ毎年一月十日迄ニ前年間ノ事務及ヒ會計報告ヲ會長ニ提出スベシ
- 明治三十四年十二月左記第九條及第十條ヲ追加ス
- 第九條 會員ニシテ現住所ヲ轉シタルトキハ所屬支部幹事長ニ届ケ幹事長ハ之ヲ新ニ轉入シタル支部ニ出金名簿ヲ添ヘ通報シ尙本部ヘモ報告スルモノトス
- 第十條 支部職員ニシテ現住所ヲ出テ他府縣ニ轉住シタルトキハ其職員ヲ辭任スルモノトス

第四節 會員徽章佩用規則（明治三十五年制定）

- 第一條 有功章會員章ハ本支部大會理事會評議員會支部幹事會ノ節佩用ス其他必要ナルトキ佩用スルモノトス
- 第二條 有功章會員章ハ何レノ服裝ヲ問ハズ佩用スルコトヲ得而シテ左胸ニ佩フルヲ法トス
- 第三條 有功章會員章ハ併用スベシ併用スルトキハ有功章ヲ右ニシ會員章ヲ左ニスヘシ

第四條 有功章會員章ハ本人ニ限り用フルモノニシテ他人へ譲與スルコトヲ得ズ亦退會シタルトキハ會員章ヲ本會へ返納スベシ

第五條 有功章會員章ハ自ラ製作スルコトヲ許サズ故ニ遺失若クハ紛失シ又盜火水難等ニ罹リタルトキハ其ノ事由ヲ記シ本支部へ届出テ再受スルコトヲ得但原價ヲ徵集ス

第五節 改支部規則(拔萃)

明治三十七年十月制定
大正十五年七月改正

第一條 支部は府縣廳所在地に置く

第二條 支部の下に幹事部を置き町村には委員區を置く

第三條 支部に左の職員を置く
支部長一名 支部副長三名以内 評議員若干名 主事一名 事務員若干名

第五條 支部に顧問及參與を置く
必要に依り參事、名譽副長、名譽評議員を置くことを得

第七條 幹事部に左の職員を置く
幹事部長一名 幹事若干名 事務員若干名

第八條 幹事部に顧問を置く必要に依り參與を置くことを得

第十條 委員區に左の職員を置く
委員區長一名 幹事若干名 委員若干名

第十一條 委員區に顧問を置く又必要に依り參與を置くことを得

第十三條 評議員、幹事の任期は三年とす但し重任を妨げず

第十四條 支部は遺族名簿及廢兵名簿を備へ其の異動並狀況を登記するものとす

第十五條 支部は會員名簿を備へ會員籍を明にし其の員數は三ヶ月毎に本部に扱はすものとす

第十六條 會費徵集期及其の方法は地方の便宜に依り支部長之を定むるものとす

第十七條 支部長は毎年前年度に於ける事務成績書を作り二月末日限り會長に報告するものとす

第六節 幹事部細則(明治三十七年十一月ヨリ施行)

第一條 幹事部ハ郡市役所所在地ニ置ク

第二條 入會及資格變更申込書ハ一ヶ月分ヲ取纏メ翌月五日迄ニ支部長ニ送付スヘシ

第三條 會員ニシテ他支部又ハ他幹事部へ轉任シタルトキハ第一號書式ニヨリ支部長ニ報告スベシ、其ノ當支部内他幹事部ニ係ルモノハ第二號書式ニヨリ同時ニ其幹事部へモ送籍スベシ

第四條 會員ノ死亡、氏名變更ノ届出アリタルトキハ支部長ニ報告スベシ

第五條 退會ノ届出アリタルトキハ協約狀及會員章ヲ回收シ協約狀ハ支部長ニ送付スベシ

第六條 會員ノ除名ヲ爲サムトスルトキハ支部長ニ具申シ指揮ヲ受クベシ

第七條 會員名簿ニハ左ノ事項ヲ記スベシ
一、氏名 二、戸主又ハ夫トノ續柄 三、住所(寄留ハ本籍共) 四、會員資格 五、入會年月日 六、紹介人氏

名 七、釀金(所屬年及納付濟年月) 八、職員トナリタル者ハ其年月日及就任辭任年月日 九、協約狀、會員章、門標及紅組交付年月 一〇、有功章受領年月日 十一、資格變更、轉出入、退會、死亡、除名年月日

第八條 收集又ハ受領シクル金品ハ確實ナル方法ニ依リ保管スベシ

第九條 釀金ハ毎年之ヲ五月十月ノ二期ニ分チ各其半年分ヲ徵收スベシ但土地ノ情況ニ依リ一ケ年分ヲ一時ニ徵收スルコトヲ得

第十條 收集シタル釀金ハ第三號形式ニ依リ毎年六月十一月ノ兩度支部長ニ送金スベシ

第十一條 寄附金品ヲ受領シタルトキハ第四號書式ニ依リ其ノ都度支部長ニ送付スベシ

第十二條 釀金皆納者(一時出金共)アリタルトキハ住所氏名及納付金額並年月日ヲ其都度支部長ニ報告スベシ

第十三條 戰死並准戰死者遺族(第五號書式)及廢兵(第六號書式)名簿ヲ備ヘ人事ノ異動及生活狀況ノ異變アリタルト

キハ直ニ支部長ニ報告スベシ

前項名簿ハ左記生活程度ニ依リ甲乙丙丁ノ四種ニ分級スベシ

甲、生計ニ餘裕アルモノ

乙、生計ニ差支ナキモノ

丙、日々ノ生活ニ困難ナルモノ

丁、日々ノ生活ニ大ニ困窮セルモノ

第十四條 戰死並准戰死者遺族及廢兵ノ現況ヲ調査シ第七號書式ニ依リ丙丁ノ該當者ヲ毎年十月支部長ニ報告スベシ

第十五條 會員増減表ヲ毎月第八號書式ニ依リ翌月五日迄ニ支部長ニ報告スベシ

第十六條 會員章受拂表ヲ毎年六月十二月第九號書式ニ依リ翌月十日迄支部長ニ報告スベシ

第十七條 門標受拂表ヲ毎年十二月第十號書式ニ依リ翌月十日迄ニ支部長ニ報告スベシ

第十八條 前年ニ於ケル事務ノ概況ヲ翌年一月十五日迄ニ支部長ニ報告スベシ

第十九條 幹事部經費ハ實收入金(釀金)百分ノ十五ヲ以テ充ツベシ

(附則)

第二十條 本則ハ明治三十七年十一月十五日ヨリ施行ス

第七節 町村役職員規定 (明治四十三年十月通牒要項)

一、各町村毎ニ幹事及委員ヲ置クコト

一、幹事ハ町村長ノ妻女ヲ以テ之ニ充ツ土地ノ狀況ニ依リ會員中ノ信用アル篤志者一名若クハ數名ヲ選ヒ増員スルコトヲ得、但幹事二名以上ナルトキハ内一名ニ專ラ金錢取扱ノ事ヲ囑託スルコト

一、委員ハ町村長ヲ以テ之ニ充ツ、土地ノ狀況ニ依リ右ノ外信用アル篤志者(男或ハ女)一名若クハ數名ヲ増員スルコトヲ得

一、前各項ノ通り定ムルニ付テハ事務員トシテ從來幹事部ニ交付セシ實收金額百分ノ十五ノ外更ニ百分ノ二ヲ増加即チ百分ノ十七ヲ交付スヘクニ付各町村幹事ニ適宜配分セラレタキコト

委員囑託ノ件

明治三十七年十月ヨリ支部幹事囑託ノ際受持地域ヲ定ムルコト、ナル。同年十一月ヨリ郡市幹事部ニ委員ヲ設ケ之レガ囑託ヲナスコト、ナル、而シテ委員ハ町村ヲ分擔スルモノトス、從ツテ委員ハ町村長ヲ以テ之レニ充テ町村長差支

ノ場合ハ其ノ妻女ニテ差支ナシ。

第八節 支部會費取扱規程 (昭和八年十二月改)

第一章 總 則

第一條 會費ノ領收ハ分會長ニ之ヲ委任ス但支部ニ直接納付シタルモノハ主事ヲシテ領收セシム

第二條 會費ハ郵便振替貯金規則ニ依リ愛國婦人會廣島縣支部口座ニ拂込ムベシ

第三條 補助金、贊助金、寄附金、徽章再渡代金ノ取扱ハ本規程ヲ準用ス

第二章 支 部

第四條 支部長ハ會費納付期日ヲ定メ納入通知書ヲ調製シ毎年二月分會長ニ之ヲ送付ス

第五條及第六條(略)

第七條 分會所管ノ會費ヲ支部ニ直接納付シタルモノアリタルトキハ分會長ニ代リ主事之ヲ領收シ其ノ旨ヲ當該分會ニ通知スベシ

第八條 (略)

第三章 分 會

第九條 分會長支部長ヨリ會費納入通知書ノ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ會員ニ配布スベシ

第十條 分會長、會費、贊助金、寄附金、徽章再渡代金ヲ除キ其ノ他ハ別ニ定ムル交付金ヲ引去リ五日以内ニ第二條ニ依リ郵便振替貯金口座ニ拂込ミ其ノ收入濟ニ係ル會費、贊助金、賛成金納入通知書ニ領收月日ヲ記入シ左記様式ノ

送納書ニ添ヘ之ヲ支部長ニ差出スベシ

第十一條及第十二條(略)

第十三條 分會ハ左ノ帳簿ヲ備ヘ出納整理ヲ明ニスベシ

- 一、會費收入臺帳
 - 二、會費受拂日計簿
 - 三、贊助金受拂日計簿
 - 四、賛成金受拂日計簿
 - 五、寄附金受拂日計簿
 - 六、徽章再渡代金受拂日計簿
 - 七、經費受拂簿
- 第十四條 市分會長ハ前年度ノ精算書ヲ二月末迄ニ支部長ニ差出スベシ

第九節 救護救濟規則 (大正十四年八月改)

第一條 凡テ救護救濟ハ本則ニ基キ施行スルモノトス

第二條 本則ニ於テ遺族ト稱スルハ軍人ノ妻、子、父、母、祖父、祖母及兄弟姉妹ニシテ恩給法第七十五條第一號又ハ第二號ノ扶助ヲ受クル資格アル者、廢兵ト稱スルハ軍人ニテ公務ノ爲メ不具廢疾トナリ同法第四十六條各項ノ恩給ヲ受クル者ヲ云フ

第三條 遺族廢兵中救護ノ必要ヲ認ムル者アルトキハ之ニ金品ヲ贈與ス

第四條 遺族救護ノ恩給法ニ規定セラレタル扶助料ヲ受クル者ノ順位ニ依ル

第五條 遺族廢兵ノ生活ノ安定ヲ向上セシムルタメ救護事業施設ヲ爲スコトヲ得

第六條 陸海軍現役兵又ハ應召中ノ陸海軍下士兵卒ニ代ハリ扶養ヲ受クヘキ家族及廢兵ノ遺族ニ對シテハ本則第三條乃至第五條ヲ準用ス

前項ノ陸海軍現役兵ニハ未入營現役兵及歸休兵ヲ包含セズ

第七條 前條ニ於テ廢兵ノ遺族ト稱スルハ廢兵ノ妻又ハ子ニシテ現ニ廢兵カ死亡ノトキ屬シタル家ニ在ル者及廢兵ニ依リ扶養ヲ受クベキ者ニシテ廢兵カ兵役ヲ免セラレタ時ヨリ引續キ之ト同一ノ家ニ在ル者ヲ謂フ但シ養子ハ家督相續人ニ限ル

第八條 陸海軍現役軍人及ビ應召中ノ陸海軍々人ニシテ不時ノ災害疾病其ノ他ノ事由ニ依リ救護ノ必要ヲ認ムルトキハ之ニ金品ヲ贈與スルコトヲ得

第九條 本會ハ本則ニ規定シタル救護ヲ爲スノ外小兒婦人等ノ保護其ノ他社會ノ福祉ニ關スル救濟事業施設ヲ爲ス前項ノ場合ニ於テ事情已ムヲ得ズト認ムルトキハ救濟金品ヲ贈與スルコトヲ得ルモノトス

第十條 支部長ハ其管内ニ於テ本則第三條第六條第八條及第九條第二項ニ依ル救護救濟ノ必要ヲ認メタルトキハ適宜金品ヲ贈與スルコトヲ得ルモノトス

第十一條 支部長ニ於テ本則第五條及第九條第一項ノ救護救濟事業施設ヲ爲サントスルトキハ豫メ其目的、方法程度及豫算ヲ定メ會長ノ認可ヲ受クルモノトス

第十二條 戰時若クハ天災事變ニ際シテ救護救濟ヲ要スル者アルトキハ本則ニ據ラズ別ニ其ノ方法ヲ定ムルコトアルベシ
(以下四ヶ條報告規定ヲ畧ス)

第十節 軍人遺家族子弟教育費補助規程 (昭和十一年二月改)

一、教育費補助ハ左ノ範圍内ニ於テ貧困ノ爲特ニ必要ト認メタルトキ之ヲ證議ス

- (イ) 戰死並ニ之レニ準ズル公務ニ依リ死亡シタル下士官兵ノ子弟ニシテ特ニ學費ヲ要スルトキ
- (ロ) 傷痍軍人(主トシテ下士官兵)ノ子弟ニシテ特ニ學費ヲ要スルトキ
- (ハ) 現役兵ニシテ入營ノ爲其ノ家族ニ對スル學費ノ乏シキニ至リタルトキ

二、就學範圍概ネ左ノ如シ

- (イ) 高等小學校ニ在學スルトキ
- (ロ) 各種學校ニ在學スルトキ
- (ハ) 盲學校又ハ聾啞學校ニ在學スルトキ
- (ニ) 師範、中學、女學、實業ノ中等學校ニ在學スルトキ

三、補助金交付ノ種別

- (イ) 高等小學校ニアリテハ一人年額三十圓以内
 - (ロ) 各種學校ニアリテハ一人年額五十圓以内
 - (ハ) 其他前項ノ學校ニアリテハ一人ノ年額七十圓以内
- 四、補助申請手續及五、補助金交付方法(略)

第十一節 支部弔慰規程 (昭和十年十月改)

第一條 會員並ニ贊助員及佩有功章者、支部又ハ分會、分區ノ職員死亡シタルトキハ本規程ニ依リテ弔慰ス

第二條 弔慰ハ支部又ハ分會、分區ノ職員會葬シ會長或ハ支部長ノ弔詞ヲ呈シ支部長ヨリ供物料ヲ供ス

第三條 左記ニ該當スル者ノ弔慰ニハ支部職員會葬ス

一、佩有功章者

二、特別維持會員

三、會長囑託以上ノ職員

四、支部職員

第四條 左記ニ該當スル者ノ弔慰ニハ分會分區ノ職員會葬ス

一、特別會員

二、通常會員

三、贊助員

四、支部長囑託ノ職員

第五條 弔詞ハ支部又ハ分會ニ於テ別記第一號文例ニ準據シテ之ヲ認メ概前ニ於テ朗讀ス

第六條 供物料ノ金額ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、佩一等有功章以上ノ者 金參圓

二、第三條第一項第二項ニ該當スル者 金貳圓

三、終身會員並第四條第三項第四項ニ該當スル者 金壹圓

四、第三條第三項第四項ニ該當スル者ノ供物ハ其ノ都度詮議ノ上之ヲ決定ス

第七條 弔詞ノ文例左ノ如シ

第一文例（佩有功章者） 第二文例以下略ス

愛國婦人會佩特別徽章（佩何々）何會員何某様ハ報國ノ御志厚ク夙ニ本會ノ趣旨ニ贊同セラレ會資ヲ補助シ（或ハ會員ヲ募集シ）（其他何々）本會ノ使命ニ對シ貢獻セラル、コト多年其功績尠カラズ深く感謝スル所ナリシニ今ヤ訃音ニ接シ誠ニ哀悼ノ至リニ堪ヘス茲ニ

總裁故依仁親王妃周子殿下ノ台閣ニ達シ謹ミテ弔意ヲ表ス

年 月 日

愛國婦人會長 氏

名

第十二節 分會役員囑託解囑手續（昭和八年改）

第一條 分會職員の囑託は左の各項に據る

一、分會長は市町村長の夫人とす但特別の事情あるときは次號の例に依ることを得

二、分會副長、分會幹事は名望家の夫人其他篤志の婦人女子教職員。女子青年團幹部等とす

三、分會顧問は市町村長を推薦す

四、分會參與は、市町村の助役又は名望家を推薦す

五、分會書記は收入事務の取扱を收入役とし其他は役場吏員及篤志家とす

六、分區長、分區副長、分區委員は會員の互選とす

七、分區顧問、分區參與は名望家を推薦す

- 第二條 分會長は分會顧問より其他の役職員は分會長より支部長に内申す
 - 第三條 囑託推薦書には本人の職業（夫人は戸主又は夫の職業及續柄）を記載すること
 - 第四條 役職員其の所轄區域外に轉住したる時は其の職務は解囑せられたるものとす市町村吏員にして其の職を罷めたるもの亦同し
- 前項の場合は直に支部長に報告すべし

第十三節 支部處務規程（昭和二年十月改）

- 第一條 本支部ノ事務ハ左ノ區別ニ從ヒ各主任者ヲ置キ之ヲ處理セシム
 - 一、庶務ニ關スル事項
 - 二、會計ニ關スル事項
 - 三、會員異動ニ關スル事項
 - 四、救護及救濟ニ關スル事項
- 前項事務ノ分掌ハ主事之ヲ定ム
- 第二條 本支部ニ到達シタル文書及電信ハ文書往復主任者ニ於テ之ヲ受ケ所定ノ整理簿ニ記入シ主事ノ認印ヲ得テ之ヲ各分掌者ニ配付ス其ノ親展書ニ依ルモノハ封緘ノ儘之ヲ主事ニ差出スベシ
- 第三條 文書ノ配布ヲ受ケタル擔任者ハ即日處分案ヲ具シ主事ヲ經テ上司ノ決裁ヲ受クベシ但三日以内ニ處分案ヲ起草スルコト能ハザルトキハ豫メ主事ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス處分ヲ要セザルモノハ回覽ニ供スルモノトス

- 第四條 文書ハ支部長名ヲ以テ發送スルヲ常例トス但シ輕易ノ事項ハ支部名又ハ主事名ヲ以テスルコトアルベシ
- 第五條 發送文書ハ番號ヲ附シ之ニ相當ノ印章ヲ押捺スベシ
- 前項ノ場合ハ其ノ番號及發送年月日ヲ原簿書ニ記入シ取扱者認印ヲナスベシ
- 第六條 文書往復主任者ハ郵便切手受拂簿ニ月末合計ヲナシ翌月五日迄ニ之ヲ會計主任者ヲ經テ主事ニ差出シ捺印ヲ受クベシ
- 第七條 金品ノ送付ヲ受ケタルトキハ會計主任者ニ於テ直ニ收入ノ手續ヲ了シ現金ハ之ヲ銀行ニ預入ル、モノトス
- 第八條 文書ノ淨書編纂及保管ハ各主任ニ於テ之ヲ行フモノトス
- 第九條 休業日及執務時間ハ凡テ本會本部ノ例ニ據ル
- 第十條 公務ノ爲旅行ヲ要スル場合ハ當該主任者ニ於テ旅行命令簿ニ必要事項ヲ記入シ主事ノ認印ヲ受クベシ。主事旅行ノ場合ハ支部長ノ決裁ヲ受クルコトヲ要ス
- 第十一條 旅行中豫定ノ日時ニ歸部スルコト能ハザル場合ハ豫メ主事ノ承認ヲ受クベシ
- 第十二條 旅行ノ用務ヲ終ヘ歸部シタルトキハ直ニ復命書ヲ差出スベシ但シ輕易ナル事項ハ口頭ヲ以テスルモ妨ゲナシ
- 第十三條 事務員病氣其ノ他ノ事故ニ由リ缺勤セントスルトキハ當日午前中ニ其ノ旨ヲ主事ニ届出ヅベシ。遅刻又ハ早引ノ場合モ亦前項ニ準ズベシ
- 第十四條 主事不在ノトキハ上席事務員其ノ職務ヲ代理スベシ

第四章 事務所變遷

明治三十四年支部創設當初は、事務所を縣廳内に置き知事官房並兵事係員本務の傍、其の事務を執りつゝありしが、會員の増加に伴ひ事務多端となりたるのみならず、事業擴張の爲獨立の必要を認め、同四十年四月、主事並事務員を専務となし、時の知事官房首席屬門川正之氏退官専ら會務を掌ることとなり、縣廳内にあること十一年にして、明治四十五年七月日本赤十字社廣島支部が、市内千田町に事務所を新築せしを以て其の一室を借受け、此處に移りたり、昭和十一年七月、日赤支部は同所に病院新築を企て、事務所を猿樂町河岸なる元廣島商業會議所を購入移轉せしを以て、共に之れに移りしが、逐年事業の擴張に伴ひ事務員も倍數に増加し、事業繁多にして一層の狹隘を告ぐるに至りしを以て、獨立の會館建築の必要に迫まれ、早川支部長の英斷により、昭和十一年八月、市内國泰寺町縣教育會所有の土地（元私立教員養成所跡）三百坪を買収して工を起し、茲に初めて會館新築の盛舉を見、多年懸案の希望を達するを得ることとなり、翌十二年五月十日竣工、六月四日日赤支部の一隅より、新館に移轉執務することとなり。是より先、會館落成するや、諸般の調度を整理し、内外清掃の上、五月廿二日、本會總裁 東伏見宮妃殿下を迎へ奉りて、第三回支部總會有功章御親授式を本館に於て行はせらるゝことを得たるは本會館無上の光榮であつた。

第五章 會 員

第一節 創立當時新入會員申込狀況

- 一、明治三十四年六月十五日附、本部事務員より江木中子幹事長宛の書面中に、「會員十二名申込の分記帳尙佐藤様御託送の七十六名も記帳済に候」云々とあり
- 一、同年七月三日、新入會三十三名、内特別會員五名、通常會員二十八名との記事あり
- 一、同年七月八日、左記の通り本部へ申込の控あり
 趣意書と申込書貳百枚、特別徽章五十個
- 一、同年七月二十日、左記の通り本部へ報告せり
 特別八名、通常十五名新入會申込
- 一、明治三十五年七月、軍人夫人の入會申込あり即ち歩兵第十一聯隊より左記申込の通知に接す
 中佐夫人一名、少佐夫人一名、大尉夫人五名、三等軍醫夫人一名
- 一、明治三十五年十二月支部幹事長江木中子及支部幹事溫田冬子の兩氏は、本會事業に盡力の功勞に依り、有功章を贈與せらるゝ、蓋し當支部内有功章拜受者の嬌矢とす

(附) 郡市別會員數

市郡名	三十五年三月二十日現在				三十六年一月二十六日現在			
	特別	通常	贊助	計	特別	通常	贊助	計
廣島	七五	一一六		一九一	一五六	三七八	五	五三九
尾道		一一		一一	六	三〇		三六
安藝	一四	三		一七	三八	二七		二七
佐伯		一		一	二	七		三
安佐					一	二		三
山縣					一	二		三
高田					一	二		三
賀茂					一	二		三
豐田					一	二		三
御調					一	二		三
世羅					一	二		三
沼隈					一	二		三
深安					一	二		三
蘆品					一	二		三
神石					一	二		三
甲奴					一	二		三
雙三					一	二		三
比婆					一	二		三
計	一四四	二五五	一八	四一七	二六二	七九一	二〇	一、〇七三

第二節 會員増募に就いて岩倉會長の通牒

(明治三十九年六月岩倉本會長ヨリ支部長宛通牒ノ概要)

日露戦役ニ當リ六萬餘ノ戦死者三萬餘ノ病歿アリ、且調査未了ノ廢兵ト日清及西南役ノ者トヲ算スル時ハ實ニ十數萬ノ多キニ上ルベシ就中境遇非ニシテ救護ヲ要スルモノ其ノ三分ノ一或ハ四分ノ一トスルモ四萬乃至五萬ノ近キ被救護者ノ實數ヲ生スベキヲ豫定セザルヲ得ズ

今ヤ本會々員五十萬ニ達セリト雖モ猶後者ノ數ヲ以テ前者ノ數ヲ救護セザルヲ得ザルモノトセバ今更其ノ責任ノ重且大ナルヲ覺悟セザルベカラズ實ニ寒心ノ至リナラズヤ

本會ハ今年二月二十一日畏クモ 皇后陛下ヨリ本會ノ盡瘁セル救護事業ヲ御嘉賞アラセラレタル旨ヲ辱フシ又五月新宿御苑ニ於ケル總會ノ節 陛下ノ行啓ヲ辱フシ本會事業ノ益々盛大ニ赴カンコトヲ望マセ給フノ旨ヲ拜受スルノ光榮ヲ得タリ。之レニ對シ 總裁殿下ハ戰況ノ大局ニ當リテ我が救護ノ實ヲ舉ゲ以テ、大御心ヲ安ンジ奉ルベキノ意ヲ奉答アラセラレタリ。本會々員タルモノ彼ヲ憶ヒ是ヲ思ヒ一層奮勵努力以テ大ニ本會主旨ノ貫徹ヲ勉メザルベカラズ。

今ヤ會員ヲ百萬人以上ニ増加シ以テ此事ニ當ルトセバ庶幾ハ我が救護事業ノ實ヲ舉クルコトヲ得ンカ、然レドモ此ノ百萬以上ノ會員數ヲ得ルニハ各支部ニ於ケル會員數ヲ女子千人ニ對スル四十ノ比例以上ニ進メザルベカラズ、是レ一日モ忽ニスベカラザルモノトス

此ノ大募集タルヤ至難ノコトタリト雖モ不肖久子等支部長ト共ニ益々忠愛ノ精神ヲ奮起シ鞠躬盡瘁此ノ擴張事業ヲ成功シ以テ我が至仁至慈ナル 國母陛下ノ懿旨ニ副ヒ奉ランコトヲ深ク切望シテ止マザル處ナリ、其擴張方法ノ如キハ顧問殿ト御協定機宜ノ處置アランコトヲ願フ此段 總裁殿下ノ御意圖ヲ奉シ得貴意度候

右ハ昨年六月十一日ノ通牒ナルガ當時支部長ハ顧問ト協議ノ上同年七月知事召集ノ各郡長會同ヲ機トシ會員増募ノ配當高ヲ定メテ同年十二月迄ニ配當數ニ達セラレル様依頼セラレタリ。然ルニ現況ハ、廣島市現在會員千九百八十人ニシテ配當ニ達セザルコト二千七百六十人ヨリ本年十一月下旬第一回總會迄ニハ是非相當ノ成績ヲ擧ゲ 殿下ニ對シ報告申上度云々

一、廣島市ヲ六區ニ分チ其ノ區毎ニ評議員並幹事若干名ヅツノ受持ヲ定メ各戸ニツキ入會ノ事ヲ勸誘スルコト

一、日露戰役中送迎其ノ他會務ニ盡力セシ方々ニ對シ金銀銅牌及木杯ヲ賜ハリタルニ依リ該賞牌ヲ受領セルモノ廣島市内五百六人アリ、此等方々ニ對シ會員募集方依頼スルコト

第三節 明治四十年頃會員募集の苦心 (當時の記録抜記)

第一回支部總會開催のこと決定するや先以て會員の増募を爲すべく計畫を立て、支部及各部市幹事部各其狀況を異にするも、要するに各戸を訪問會の趣旨を説示せざれば賛成を求むることを得難きに付、支部に於ては職員集合協議の上第一着手として、廣島市内を六區に分ち、一區毎に職員に分擔を定め、七月以來炎暑の候を厭はず、各家事を抛ち寢食を忘れ晝夜の別なく誠意を以て各戸に就き或は學校に或は寺院に數十回最寄の婦女子の集合を煩はし、職員自ら趣旨目的を懇談し、又は僧侶に依頼して談話を試み、其他種々の方法を考へ連日連夜東奔西走する等職員の盡力勞苦は察するに餘あるものありき。其他の郡市に於ては幹事部長(郡市長夫人)各町村を巡回して自ら趣旨を説き、又顧問(郡長)は各町村長及有志者に向て其の援助を爲さしめ、又幹事、委員、事務員等は各地に講話會を催ふし、或は本會に適切なる映畫を撰びて幻燈會を催ふし、或は各戸に就きて勸誘し、又支部より遊説員の派遣を爲して之を援助する等、其の方便は各郡市大同小異なるべしと雖も、今次の大募集に於ける職員の盡瘁は實に非常の事にして、其の結果本年一月一日現在壹萬千五百

三十三名なりし會員が十二月末日には參萬參千貳百貳拾人となり、一ヶ年間に貳萬壹千六百八拾七名の増加を見るに至れり。

第四節 會員増加の大勢

- 一、創立當年末會員數 四百三十一名
- 一、明治三十七八年日露戰役當時 一萬六百五十一名
- 一、明治四十年第一回支部總會當時 三萬七十七名
- 一、大正三年第二回支部總會當時 三萬八千六百名
- 一、昭和六―九年滿洲事變及上海事變當時 五萬三千五百廿九名
- 一、昭和十二年第三回支部總會當時 拾二萬二千九百名
- 一、昭和十七年支部解散當時 拾八萬參千四百四十名

(附) 郡市別會員數一覽 (昭和十二年五月第三回總會當時)

種別	市郡名		計	女子人口 百中歩合	順位	備考 女子人口
	市	郡				
總會前	11,717	2,777	14,494	33	8	100,111
總會ノ際 新入會員	11,717	2,777	14,494	33	8	100,111

尾道	三原	安藝	佐伯	安佐	山縣	高山	賀茂	豐後	御調	世羅	沼隈	深津	蘆品	神石	甲斐	雙三	比婆	計
二	〇	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	七四
一	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一〇
一	九	五	〇	四	〇	〇	五	〇	一	〇	〇	二	七	一	二	二	六	三
二	二	三	四	三	二	一	二	二	七	一	二	九	〇	二	二	五	八	一
三	五	九	六	九	〇	〇	七	二	五	四	四	九	一	二	九	五	七	三
八	〇	九	八	七	五	二	四	三	六	七	五	五	二	四	六	一	二	一
三	八	三	三	一	一	九	八	五	四	〇	五	二	六	九	六	二	七	四
五	九	七	七	二	一	一	〇	八	七	八	〇	三	五	四	一	一	六	〇
四	八	一	一	〇	〇	〇	一	一	〇	一	一	二	〇	〇	一	五	一	〇

吳	廣	市郡名	種別
三〇	三六		有特功章別
三五	五六		附一等有功章有一功章等
六五	七七		附二等有功章有二功章等
六四	七五		附三等有功章有三功章等
九五	八一		計
一五六	一九五		備考
六六三	六一五		住所不明者
一〇八	一三五		

第七節 郡市別佩有功章者各等級別人員表 (昭和十七年解散當時)

世羅	沿安	深津	蘆品	神石	甲斐	雙三	比婆	計
一〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一〇
三九	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三九
一七	一	一	一	一	一	一	一	一七
九九	二	二	二	二	二	二	二	九九
三〇	三	三	三	三	三	三	三	三〇
〇六	四	四	四	四	四	四	四	〇六
〇九	五	五	五	五	五	五	五	〇九
二四	六	六	六	六	六	六	六	二四
〇一	七	七	七	七	七	七	七	〇一
四八	八	八	八	八	八	八	八	四八
八五	九	九	九	九	九	九	九	八五
四九	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	四九
三三	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	三三
八八	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	八八
三三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	三三
八八	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	八八
三三	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	三三
八八	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	八八
三三	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	三三
八八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	八八
三三	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	三三
八八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	八八
三三	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	三三
八八	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	八八
三三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	三三
八八	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	八八
三三	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	三三
八八	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	八八
三三	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	三三
八八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	八八
三三	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	三三
八八	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	八八
三三	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三三
八八	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	八八
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
八八	三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四	八八
三三	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三三
八八	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	八八
三三	三七	三七	三七	三七	三七	三七	三七	三三
八八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八	八八
三三	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三三
八八	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	八八
三三	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	三三
八八	四二	四二	四二	四二	四二	四二	四二	八八
三三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	三三
八八	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	八八
三三	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	三三
八八	四六	四六	四六	四六	四六	四六	四六	八八
三三	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	三三
八八	四八	四八	四八	四八	四八	四八	四八	八八
三三	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	三三
八八	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	八八

第六章 縣支部役職員

第一節 幹事長、支部長及顧問

囑託年月	解囑年月	幹事長	支部長	顧問
明治三十四年六月	明治三十六年七月	江木 中子	江木 千之	
同 三十六年七月	同 三十七年二月	徳久 張子	徳久 恒範	
同 三十七年二月	同 四十年八月	山田 竹子	山田 春三	
同 四十年八月	同 四十二年十月亡	宗像 直子	宗像 政	
同 四十四年三月	同 四十五年四月	宗像 ツタ	宗像 政	
同 四十五年四月	大正二年三月	中村 千代子	中村 鈍九郎	
大正二年三月	同 五年四月	寺田 春子	寺田 祐之	
同 五年四月	同 七年五月	馬淵 上し子	馬淵 鋭太郎	
同 七年五月	同 八年四月	安河内 一三子	安河内 麻吉	
同 八年四月	同 十年七月	若林 恒子	若林 資藏	
同 十年七月	同 十一年十月	依田 順	依田 銈次郎	
同 十一年十月	同 十二年十月	阿部 操	阿部 亀彦	

備考
創設當時ハ支部長ヲ幹事長ト
稱シ知事夫人ニ囑託セシガ明
治三十七年幹事長ヲ支部長ニ
改メ縣知事ヲ顧問ニ囑託スル
コト、ナレリ

同 十二年十月	同 十四年九月	山縣 三洲子	山縣 治郎
同 十四年九月	同 十五年九月	濱田 久	濱田 恒之助
同 十五年九月	昭和二年十月	末松 千代	末松 借一郎
昭和二年十一月	昭和三年五月	横山 才ま子	横山 助成
同 三年五月	同 四年七月	岸本 鐵子	岸本 正雄
同 四年七月	同 六年五月	川淵 歌子	川淵 洽馬
同 六年五月	同 六年十二月	白根 末資枝子	白根 竹介
同 六年十二月	同 七年六月	千葉 敏子	千葉 了
同 七年六月	同 十年一月	湯澤 アヤ子	湯澤 三千男
同 十年一月	同 十一年四月	鈴木 照子	鈴木 敬一
同 十年三月	同 十二年一月	早川 敏子	早川 三郎
同 十一年四月	同 十二年三月	富田 花子	林 喜美子
同 十一年六月	同 十三年十一月	富田 花子	富田 愛次郎
同 十二年一月	同 十三年六月	飯沼 穆子	飯沼 喜美子
同 十二年五月	同 十四年九月	飯沼 穆子	飯沼 一省
同 十三年十一月	同 十六年三月	相川 靜	相川 勝六
同 十四年九月	同 十七年二月	支部長代理石井萬亀子	吉永 時次

師團長夫人
師團長夫人
師團長夫人

昭和十七年 二月 昭和十七年 六月 清算委員長石井萬龜子

第二節 支部副長

囑託年月	解囑年月	氏名	備考
明治三十七年一月	大正二年四月	上田種子	男爵夫人
同三十九年十月	明治四十一年三月	摺澤タケ子	少將夫人
大正二十一年十月	大正十三年十月	川谷真規	少將夫人
同三十三年十月	同十四年九月	宮脇須磨	内務部長夫人
同十四年十月	同十五年九月	井野千代	警察部長夫人
同十五年九月	昭和二十一年五月	木下節	同 上
同十五年十月	同二年五月	後藤桃	内務部長夫人
同十五年十月	同四年五月	澄川道野	縣病院長夫人
昭和二年六月	同三年七月	久米靜子	内務部長夫人
同三年七月	同四年八月	阪間操子	内務部長夫人
同四年八月	同六年五月	吉田一子	同 上
同六年五月	同六年十一月	村松元子	同 上
同四年七月	同七年七月	温田冬子	元支部幹事同評議員(七年九月以降參事)

同六年十一月	同八年七月	兒玉梅子	内務部長夫人
同八年七月	同十年二月	本間道子	同
同十年二月	同十二年七月	安岡れい	總務部長夫人
同十二年七月	同十三年六月	淵上道子	同
同十三年六月	同十五年四月	久慈正子	同
同十五年四月	同十五年七月	後藤雪江	同
同十五年七月	同十七年二月本會解消迄	石井萬龜子	同

第三節 參與

囑託年月	解囑年月	氏名	備考
大正十一年六月	大正十三年七月	池田秀雄	内務部長
同十三年七月	同十四年九月	宮脇梅吉	同
同十四年十月	同十五年十月	新庄祐次郎	同
同十五年十月	昭和二年五月	後藤多喜藏	同
昭和二年六月	同三年七月	久米成夫	同
同三年十月	同四年七月	中村恒三郎	同
同三年七月	同四年八月	阪間棟次	同

昭和三年十月	昭和五年一月	御野池辰雄	學務部長
同四年八月	同六年五月	吉田康太郎	內務部長
同四年八月	同六年八月	橫井直與	警察部長
同五年一月	同五年九月	藤田慎次郎	學務部長
同五年九月	同六年五月	藤岡長敏	警察部長
同六年五月	同六年十一月	村松武美	同
同六年十一月	同八年七月	兒玉政介	內務部長
同八年七月	同十年二月	本間精	同
同九年三月	本會解散迄	柏四郎九	元愛婦主事
同十年二月	同十二年七月	安岡正光	總務部長
同十年二月	同十一年四月	歌田千勝	警察部長
昭和十年二月	昭和十二年七月	光田信	學務部長
同十一年四月	同十二年七月	小菅芳次	警察部長
同十一年八月	同十二年十二月	長谷川勝伍	土木部長
同十一年九月	同十一年九月	櫻井安右衛門	經濟部長
同十一年九月	同十四年四月	鈴木脩藏	同
同十二年七月	同十三年六月	淵上房太郎	總務部長
同十二年七月	同十四年一月	小泉柵郎	警察部長

第四節 評議員

同十二年七月	同十四年四月	中村元治	學務部長
同十三年五月	同十五年四月	宮崎正夫	土木部長
同十三年六月	同十五年四月	久慈學	總務部長
同十四年四月	同十五年十二月	福光正義	學務部長
同十四年四月	同十六年一月	井田完二	警察部長
同十四年四月	同十五年十二月	橋本正實	經濟部長
同十五年四月	同十五年七月	後藤耕藏	總務部長
同十五年七月	同十七年二月	石井錦樹	總務部長
同十五年七月	同十六年四月	川上和吉	經濟部長
同十六年一月	同十七年二月	塩谷勇	學務部長
同十六年一月	同	官脇彦三	警察部長
同十六年一月	同	大島六七男	土木部長
同十六年五月	同	佐藤一郎	經濟部長

囑託年月

解囑年月

氏名

備

考

明治三十五年四月

明治三十六年八月

山口キク子

第五師團長男爵夫人

昭和二年十月	同	昭和四年二月	南谷まさへ	検事長夫人
同	同	同三年三月	園田ともゑ	
同二年十一月	同	同五年八月	木原豊子	運輸部長夫人
同三年三月	同	同四年六月	今村きく	
同二年三月	同	同三年七月	早川敏子	警察部長夫人
同年二月	同	同四年七月	古森家子	検事長夫人
同年三月	同	同四年六月	浅野雪子	逓信局長夫人
同年七月	同	同四年七月	中村ミツ	内務部長夫人
同年八月	同	同四年八月	阪間操子	同
昭和三年十一月	同	同五年二月	御野池せん	學務部長夫人
同	本會解散迄	同五年八月	鴨谷八重	實業家夫人
同	同	昭和五年八月	原口ハマ	師團長夫人
同四年八月	同	同六年六月	横井清子	警察部長夫人
同四年七月	本會解散迄	同六年九月	谷野茂登	縣病院長夫人
同五年一月	同	同五年十一月	藤田天以子	學務部長夫人
同六年五月	同	同六年六月	村松元子	警察部長夫人
同六年八月	同	同七年一月	伊藤春子	
同	同	同七年六月	田中カツコ	

昭和七年三月	同	昭和七年六月	三宅誠子	運輸部長夫人
同七年二月	同	同	猪野都彌子	部附少將夫人
同七年三月	同	同七年八月	松田哲子	運輸部長夫人
同	同	同八年一月	山本光子	衛戍病院長夫人
同	同	同八年三月	二宮貞女	師團長夫人
同	同	同八年七月	藤田ヤス	運輸部長夫人
同	同	同八年九月	鈴木ひろ子	學務部長夫人
同	同	同八年十月	田中たか	警察部長夫人
同	同	同八年十一月	薄田よしゑ	同
同	同	同九年一月	歌田英子	同
同	同	同十年三月	光田富子	學務部長夫人
同	同	同十年八月	櫻井静枝	經濟部長夫人
同	同	同十一年九月	山口梅子	土木部長夫人
同	同	同	横山トヨ	廣島市長夫人
同	本會解散迄	同	福田キヨミ	廣島市第一助役夫人
同	同	昭和十二年十二月	岡太雪枝	廣島市第二助役夫人
同	同	同	山本弘子	中國新聞社長夫人
同	同	同	倉田綾子	實業家夫人

昭和十三年八月	本會解散迄	大洲文子	吳市 寺院夫人
同	同	高橋治	尾道市 醫師夫人
同十四年二月	昭和十五年十二月	福光命子	學務部長夫人
同	同	横山小枝子	部附少將夫人
同十四年三月	本會解散迄	中邑ハルヨ	市助役夫人
同十四年四月	昭和十六年一月	井田璋子	警察部長夫人
同	同	橋本惠美	經濟部長夫人
同十五年一月	本會解散迄	藤田コト	廣島市長夫人
同十五年四月	同	鈴木君子	廣電社長夫人
同	同	山口秀代	廣島瓦電社長夫人
同十五年七月	昭和十六年四月	川上みね子	經濟部長夫人
同十六年一月	本會解散迄	塩谷鈴江	學務部長夫人
同	同	宮脇美代子	警察部長夫人
同	同	大島靜子	土木部長夫人
同十六年二月	同	荒谷イロ	實業家未亡人
同	同	宮下文子	海運業者未亡人
同	同	長沼シゲ	將校未亡人
同	同	北山春子	實業家未亡人

昭和十六年二月	本會解散迄	横山アキ	實業家未亡人
同上	同	猪野カメ	軍人未亡人
同上	同	今野イソ	賣藥業者夫人
同上	同	竹内春	日赤病院長夫人
同上	同	藤野千代	實業家未亡人
同上	同	石田ニシエ	醫師夫人
同十六年三月	同	森川ミエ	實業家夫人
同上	同	鈴川千代世	實業家夫人
同上	同	西川ラクヨ	實業家夫人
同上	同	坂本チナヨ	實業家夫人
同上	同	水野ヒサオ	吳市長夫人
同十六年五月	同	佐藤年子	經濟部長夫人

第五節 會計監督

囑託年月

大正七年四月
同十三年十一月

解囑年月

大正十三年十月
同十五年七月

氏名

高田眞太郎
小玉道雄

備考

同 縣會計課長

大正十五年七月	昭和七年一月	昭和七年一月	藤井 覺	縣會計課長
昭和七年一月	同 七年六月	同 七年六月	沖森源一	同
同 七年六月	同 十年二月	同 十年二月	元山修二	同
同 十年二月	同 十一年八月	同 十一年八月	和田理一郎	同
同 十一年八月	同 十二年九月	同 十二年九月	西尾武夫	同
同 十二年九月	同 十三年三月	同 十三年三月	伊藤秀譽	同
同 十三年五月	同 十四年二月	同 十四年二月	寺田熊太郎	同
同 十四年三月	同 十五年四月	同 十五年四月	光川逸平	同
同 十四年五月	同 十五年四月	同 十五年四月	清水幹造	同
同 十五年五月	本會解散迄	本會解散迄		

第六節 主 事

囑託年月	解囑年月	氏名	備考
明治三十六年十二月	大正十二年七月	門川正之	縣屬
大正十一年九月	同 十四年六月	天野雨石	元郡長
同 十四年六月	同 十五年七月	北川嘉七	元郡長(他縣)
同 十五年七月	昭和四年一月	早水仁三郎	元郡長
昭和四年一月	同 九年二月	柏 四郎九	元郡長縣事務官

昭和九年二月	昭和九年三月	玉川貫吾	元警察署長
同 九年三月	同 十七年六月 清算終了迄	土居肩吉	元高等女學校長

第七節 事務囑託及參事 (昭和十二年十月改稱)

囑託年月	解囑年月	氏名	備考
大正八年四月	大正十二年二月	森川奎二	兵事課屬
同 十二年三月	同 年三月	佐藤彦一	同
同 十二年三月	同 十四年三月	藤井 覺	同
同 十二年十一月	昭和七年六月	山崎幹二	同
同 十四年二月	大正十四年六月	岩本俊郷	學務課長
同 年六月	昭和二年一月	中村良三	地方課長
同 年十月	同 十五年八月	土屋耕造	同
同 年十一月	本會解散迄	河野正一郎	兵事課屬
同 十五年十一月	大正十五年十二月	吉田和一	兵事課屬
同 同	同	桑原佐吉	同
同 同	昭和三年七月	井上文介	地方課長
同 同	同 六年六月	中丸平次郎	社寺兵事課長

昭和十四年八月	本會解散迄
同十五年十月	同
同十六年二月	同
同十六年八月	昭和十六年九月
同十六年九月	同 年八月
同十六年九月	本會解散迄

浪岡眞一	學務課長
勝亦太平	社會教育課長
永岡退藏	人事課長
會我匠	社會課長
小田島助吉	官房主事
住谷一登	拓務課長
三好善一	社會課長

第八節 事務員

囑託年月	解囑年月
明治三十四年一月	明治三十六年十二月
同	同 年十月
同 三十五年六月	同
同 三十五年七月	昭和九年二月
同 三十六年十月	明治三十八年
同 四十年六月	同 四十二年三月

氏名	備考
門川正之	兼務事務員
高田眞太郎	同
石津圭介	同
新林健造	事務員、書記
登原猪之助	兼務事務員
荒木新造	同
堀尾仲之助	事務員

明治四十年七月	大正九年二月
同四十二年八月	本會解散迄
同四十四年三月	大正十四年十一月
大正十五年六月	昭和八年一月
同 年八月	本會解散迄
同 年十月	昭和二年十月
昭和八年一月	本會解散迄
同 年三月	昭和十一年十月
同 年六月	本會解散迄
同 年七月	昭和十六年八月
同 年八月	同 十二年六月七
同 年十月	本會解散迄
同 年十二月	同
同 十二年一月	同
同 年三月	昭和十四年六月
同 年七月	同 年十月
同 年十月	本會解散迄

佐々木忠夫	雇、書記
菅重次郎	雇、事務員、書記
湯川成己	書記
柳川俊一	同(病退)
廣井以忠	書記、主事補、囑託
越智旗三郎	書記
吉田徳一	雇、書記
入江董	書記
片岡ミ子	指導婦
松本道樹	指導員
齋藤專作	書記
小川士郎	主事補
柳川俊一	雇、書記
有藤マスノ	囑託
塩谷秀謙	指導員
梨木ハツエ	給仕
本田一郎	書記
沖本富太郎	書記

昭和十二年十月	昭和十三年一月	昭和十四年一月	同 年 四月	同 年 四月	同 年 四月	同 年 六月	同 年 八月	同 年 十二月	同 十五年 一月	同 十五年 十月	同 十六年 一月	同 年 二月	同 年 四月	同 年 九月		
(應召)	昭和十六年八月	本會解散迄	昭和十五年十二月	本會解散迄	昭和十四年十二月	同 十五年 四月	本會解散迄	同	同	同	同 十六年 九月	同 年 四月	本會解散迄	昭和十六年十一月		
栗栖武人	平野サダ	下原浅平	水野澄子	栗栖艶子	前野善市	酒井武夫	立座田鶴子	梅澤兵二	播磨吾市	福島志藝能	福原初子	澤 ちょこ	備野和人	坪本策一	北中芳一	福永一枝
雇、書記	嘱託	嘱託	生業指導講師	給仕、嘱託	嘱託	雇	タイピスト	映畫技師	指導員	生業指導講師	保母	生業指導講師	雇	書記	雇	生業指導講師

第七章 郡市役職員

文部創立當初は地方擔任の支部幹事以外に各郡市長夫人を幹事と稱し、外に地方有志に對し特に幹事を囑託して、専ら會員募集斡旋方依頼せしが、明治三十七年十一月郡市の區域を幹事部と稱し郡市長夫人を幹事部長と改稱し、同時に各郡市に事務員を設け、尙町村を委員區と稱して町村長夫人若くは地方有志夫人に對し委員區長を依頼せしが、昭和八年に至り本會機構の改正に依り、市町村なる行政區域を分會(大なる市は之を數分會に分ち更に之が統制を爲すため聯合分會を設く)と稱し、分會長及び分會副長を囑託するに至れり、今各郡市初代幹事氏名及囑託依頼狀を掲ぐれば次の如し。

第一節 初代(明治三十四年)各郡市幹事(後ノ幹事部長)

廣島市長	伴 資健夫人	伴 キク子
尾道市長	杉山新十郎夫人	杉山 米子
安藝郡長	栗原 幹夫人	栗原 靜子
佐伯郡長	尾野 漸夫人	尾野 萩乃
安佐郡長	加藤 恂一夫人	加藤 栗子
山縣郡長	平岡 拙藏夫人	平岡 カネ子
高田郡長	田中 光磨夫人	田中 ヒデ子

(二) 吳市幹事部

明治三十六年十一月	幹事囑託	澤原 コト	明治三十六年十一月	幹事囑託	阪本 コト
同	同	長谷川 芳子	同	同	佐々木 リエ
同	同	岩崎 ナカ	同	同	熊谷 ヨシノ
同	同	天野 コズエ	同	同	大江 順子
同	同	澤原 清子	同	同	岡村 タマ
同	同	栗屋 トキ	同	同	桐山 サダ
同	同	山中 ヒデ	同	同	山本 スミ

(三) 尾道市幹事部

明治三十八年十二月	幹事囑託	西村 チネ	明治三十九年二月	顧問囑託	西村 益三
-----------	------	-------	----------	------	-------

(四) 福山市幹事部

明治四十年十二月	幹事囑託	樋谷 サメ	明治四十年十二月	幹事囑託	鼓 千代
同	同	清水坊 ミチ			

第四節 解散當時五市聯合分會首腦者

(一) 廣島市各分會長氏名

聯合分會長	石井 萬壽子	尾長分會長	藤野 千代	荒神分會長	小田 タマヨ	牛田分會長	中石 クマ
矢賀分會長	樋口 ナツノ	比治山分會長	向井 マサ	仁保分會長	志賀 キミエ	青崎分會長	澤本 ムツ
段原分會長	井口 靜子	大河分會長	内藤 かねよ	皆實分會長	熊平 ウラ	宇品分會長	宮下 文子
楠那分會長	貞野 冬子	鞆町分會長	山根 秀子	竹屋分會長	横山 アキ	袋町分會長	米田 ミツ
白島分會長	吉田 ゆう	千田分會長	早水 マス	中島分會長	猪野 カメ	廣瀬分會長	山崎 元子
大手町分會長	堀田 雪子	神崎分會長	長沼 シゲ	舟入分會長	小林 チカノ	江波分會長	長門 皆代
本川分會長	高田 ミツ	觀音分會長	北山 春子	福島分會長	水間 イチエ	大芝分會長	吉田 マサ
天滿分會長	木坂 ヨシ	己斐分會長	中田 トミ	古田分會長	後藤 喜美子	草津分會長	荒谷 イロ
三篠分會長	小谷 巴						

(二) 吳市各分會長氏名

聯合分會長	鈴木 サダ	第一分會長	大江 ヒタ	第二分會長	大洲 文子	第三分會長	竹内 ジョウ	第四分會長	三宅 カツ
同	副長 兒玉 春代	第五分會長	勝田 高子	第六分會長	山本 貞子	第七分會長	宮田 久代	第八分會長	新原 幸子
同	副長 辻村 タカ	第九分會長	細馬 道子	第十分會長	鴨尾 規奈	第十一分會長	多川 政	第十二分會長	名草 道代
廣	分會長 山中千代子	仁方分會長	相原 富子						

(三) 尾道市各分會長氏名

聯合分會長 土屋 ヒロ
 同 副長 土井 ユタヨ
 同 副長 増原 暉子
 筒湯分會長 高橋 治
 栗原分會長 辨野 タカヨ
 久保分會長 永井 房代
 吉和分會長 天野 トシ

長江分會長 山本 タミヨ
 山波分會長 有木 フジ

土堂分會長 高橋 チヨ

(四) 福山市各分會長氏名

聯合分會長 増川 ヒサ
 同 副長 門田 フキ
 同 副長 鼓 千代
 同 副長 藤井 俊榮
 東分會長 藤井 シナ
 霞分會長 水野 秀子
 西分會長 今福 イク
 深津分會長 土井 シナ

南分會長 橋高 かや
 川口分會長 光成 ナカ

北分會長 中島 利登
 手城分會長 土屋 松枝

(五) 三原市各分會長氏名

聯合分會長 波邊 キミ
 同 副長 難波 すすむ
 同 副長 山根 クニ
 同 副長 光岡 タネ
 東部分會長 土肥 壽代
 西部分會長 黃田 ハル
 中之町分會長 平井 文子

西部分會長 田坂 貞代
 田野浦分會長 藤田 スガ

糸崎分會長 光岡 タネ
 須波分會長 藤井 梅香

中編 年誌

第一章 明治時代

第一節 明治三十四年（支部創設）

幹事長 江木中子（知事夫人）
事務主任 門川正之（縣屬）

支部創設 一世の女傑、佐賀縣唐津高德寺に呱呱の聲を擧げた奥村了寛の女五百子女史が、明治三十三年北清事變の際親しく彼地に皇軍を慰問し、具さに其の實情を視察し、歸來婦人報國の熱意に燃え、戦病死軍人の遺族並に傷兵援助の目的を以て、全國の女性に呼びかけ、婦人團體の結成を提唱して、貴顯並朝野有志の賛同を得、特に皇室より有難き御獎勵の御言葉を賜はり、明治三十四年三月二日東京に於て發會式を擧げ、次いで各府縣に支部の結成を見ることとなりしが、本縣は逸早く之が創設に着手し、同年六月一日結成して發會式を擧げたのである。當時會員僅かに八十九名。幹事長は時の知事江木千之閣下夫人江木中子氏で、同年五月全國筆頭に囑託せられしが、實務は縣官門川正之、高田眞太郎、新林健造等本務の傍之を見たのである。而して偶々本部に於ける創業者事務主任が、本縣出身の陸軍少將佐藤正閣下たりし關係上、會旨宣傳、會員募集に付ても全國に魁せる状況にて、會祖奥村五百子女史の遊説も三十四年五月で本縣は殆最初であつたのである。即ち同年六月五日附で別記の通り本部事務員原胤昭氏より江木夫人宛の書面並之れに對する回答書又其後九月二十日附を以て岩倉會長及理事連名にて江木知事宛の謝狀に依り當時の様子を窺ふことが出来る。

尙其の頃江木幹事長の下に世話係として、會務に盡力せし婦人の方には廣島市内で三浦梅子、賀屋鎌子、溫田冬子、渡邊田鶴子、山口師團長夫人等の方々があつた。

謹啓過日來當會趣旨擴張の爲奥村五百子參廣に際し佐藤少將殿の御紹介により尊台様には特に御同情被下非常の御熱誠を以て御賛助被下候儀誠に難有次第に奉存茲に謹んで私共の謝意を奉表候、陳者佐藤少將殿の御垂示により過日貴地職員囑託狀三十枚差出し申候間可然御取扱奉希候尙會員徽章は特別五十個通常三百個小包郵便にて發送仕候實は佐藤少將殿御滞廣中に到達致す様仰越されし次第も有之取急ぎ製作致させ候

三十四年六月五日

愛國婦人會 原 胤 昭拜

江木中子殿 尊下

右回 答文

拜復愛國婦人會擴張の爲め奥村五百子殿御來廣に際し佐藤少將殿御紹介の次第も有之本會の御趣旨大に賛同致候間不及乍ら盡力致すべき心得に御座候間宜敷御心添被下度候

扱此度職員囑託狀三十枚並特別會員章五十個通常會員章三百個御送附相成正に落手致し候此段御答迄 匆々

六月十日

江木中子

入會申込 本會旨に賛意を表し入會を申込みもの次第に増加し左の狀況であつた。

一、六月中 百十九名

一、七月中 五十六名 内特別會員 十三名

一、九月中 三十名 内特別會員 十九名

一、十一月中 十八名 内特別會員 八名

會則草案修正意見 本會則編制につき草案回附意見を徴せられしにつき支部の意見を定め六月廿三日知事上京の際依託提出した。因に本案に對しては江木知事自ら執筆修正せられたのであつた。

奥村五百子氏より禮狀 曩に本會の主旨並支部設置に關し奥村氏來廣の際特に盡力せし左記三氏に對し禮狀到來せり。

廣島市長伴資健、賀屋鎌子、三浦梅子

謝 狀

本會擴張の爲奥村五百子貴縣下遊説の砌特に御盡力相成候段感謝に不堪候尙將來本會の爲御盡瘁を希望候也

明治三十四年九月二十日

愛國婦人會長 岩 倉 久子

同 理事 一 條 悦子

近 衛 貞子

島津田鶴子

大山捨松子

谷 玖滿子

廣島縣知事 江木千之殿

第二節 明治三十五年

幹事長 江木中子
事務主任 門之正之

第一回本部大會 三月三十日東京九段坂上東京偕行社に於て本會第一回大會（總會）開催に付、評議員各幹事及特別功勞者新妻ミヨ子（警察部長夫人）三浦梅子、賀屋鎌子の三氏へ本會長の案内狀到來せしに付それ／＼傳達した。

評議員囑託の嚆矢 本縣にては四月十日附山口師團長夫人、伊知地旅團長夫人に評議員を囑託した。之が支部評議員囑託の嚆矢である。

機關新聞發行通知 本會機關新聞「愛國婦人」第一號三月二十日發行に付、形式内容並原稿投稿等に關し通達ありたり。

會員數報告 七月末現在、支部會員數左記之通報告す。蓋幹部の熱心なる幹旋と漸次趣旨の理解せらるゝ爲である。

特別會員二百三十名。通常會員六百三名。贊助員十七名。計八百五十名

寄附者に有功章 本年十月より金五拾圓以上寄附せし者に對しては、有功章贈與すべく本部評議員會に於て決定せし旨通知ありたり。即ち有功章の等級左の如し。

壹等有功章（七寶製） 總裁、名譽會員、金參百圓以上寄附者
五百名以上入會者紹介並之れに準ずる功勞者

貳等有功章（七寶製） 金百五拾圓以上寄附者
三百名以上入會者紹介並之れに準ずる功勞者

參等有功章（七寶製） 金五拾圓以上寄附者
百五十名以上入會者紹介並之れに準ずる功勞者

江木知事の熱心 支部創設に際し時の知事夫人江木中子氏が幹事長として活躍せられし反面に知事閣下が後見役として熱心指導援助に當られしことは當時の（三十五年五月廿七日）新聞記事によるも之を窺ふことが出来る。即ち左の如し。

江木知事の援助（明治三十五年五月廿七日新聞紙所載）

愛國婦人會廣島支部ニ在テハ去ル二十五日午後第二時ヨリ評議員山口男爵夫人、同一ノ瀬夫人及副幹事長上田男爵夫人其他役員ノ方々ハ幹事長江木夫人邸ニ會シ目下出廣中ノ各郡市長ヲ招待シ愛國婦人會擴張ノ件ニ付協議セリ今其ノ概況ヲ掲グレバ先ヅ夫人方一同ノ挨拶アリ夫レヨリ江木知事ハ右夫人方ニ代ハリ本會々員ノ日々増加シ漸次盛大ニ赴クハ幹事以下會員ノ熱心ノ致ス所ナルモ畢竟郡市長諸氏幫助ノ然ラシムル所ニシテ感謝ニ堪ヘズ乍併本縣ハ他府縣ト異ナリ明治廿七八年ノ戰役ト云ヒ又明治三十三年北清事變ト云ヒ共ニ他府縣ニ比類ナキ多數ノ戰病死者ヲ出シ從ツテ本會ニ於テ救護スベキ者モ亦最モ多數ナルガ故ニ本縣ハ他府縣ニ卒先シテ本會ノ隆盛ヲ期セザル可カラズ將來一層幹事ヲ助ケ本會ノ爲メ盡力アリタキ點ヲ述ヘラレ終ツテ茶菓ノ饗應アリタリ。

第三節 明治三十六年

幹事長 江木中子
事務主任 門川正之

會員大增 江木幹事長は一月廿九日附を以て各郡市長夫人（郡市長夫人）に對し左記依頼狀を發し尙同月三十一日の郡市

長會席上に於て郡市顧問たる郡市長に對し同一要項を懇談盡力方依頼せり

(依頼狀) 拜啓然ば本會々員募集に就ては種々御配慮を蒙り候處今や別表の如き成績にて漸次好果を收め候是畢竟貴下御盡力の結果と本會の爲め不堪萬謝候然し之を縣下七十三萬五千餘の婦女子に比較すれば尙千人に對し、僅かに一人四分五厘の割合に當り實に九牛の一毛にも當ならざる程の少數に有之今後勸誘の如何に依りては今日に幾倍する會員を募集し得る事も可不難乎と被存候他府縣に於ては郡市幹事の有功章を受くる者多々有之趣に相聞へ候に獨本縣のみ此等受章者僅かに一人の外無之との事に至りては自然他支部との權衡を失ふ嫌も有之且面目に關し候様にも被思甚だ遺憾の事に存候間何卒會員募集の儀今後とも一層の御奮闘を以て御盡力相煩し候様致度御依頼申上候 敬具
明治三十六年一月廿九日

幹事長

會員數調査表(明治三十六年一月廿六日現在)

郡市	特別會員	通常會員	贊助會員	計	郡市	特別會員	通常會員	贊助會員	合計
廣島	一五六	三七八	五	五三九	賀茂	〇	二二		二二
尾道	〇	三〇		三六	田原	三	一三		一六
安藝	〇	二七		二七	調子	四	二一		二五
佐伯	八	一七		二五	世羅	一	四		五
安佐	三	二六		二九	隈部	六	一八		二四
山縣	〇	一三	五	一八	深安	八	二二	五	三五
高田	〇	五〇		五〇	品川	三	一一		一四
甲奴	一三	四〇		五八	神石	三	一七		二〇
比婆	二六	六五		九一	双石	二	八三		八五
合計				五三九	合計	二六二	七九一	二〇	一、〇三七

總裁推薦 本會總裁として 閑院宮妃殿下推薦方請願中なりしが、三月二十一日附を以て、本會總裁に御上任の御聽許相成りし旨本會より通達ありたり。

第二回大會 本會第二回大會三月二十二日東京九段偕行社に於て開催に付、江木幹事長其他役職員數名出席せり。

佐藤本部囑託來廣 本部事務囑託佐藤陸軍少將來廣に付七月九日支部役員會開催、評議員及幹事出席支部の連絡會務擴張等に關し協議する所ありたり。

招魂祭費寄附 恒例として毎年行はる、招魂祭に要する費用は主として地方の團體や個人の淨財寄附に仰ぐので、當支部に於てもこれに賛同、本年僅少の寄附を爲せし所該委員長より左記の謝狀を頂き恐縮したのであつた。

謝狀

一金參 四也

右廣島招魂祭之舉ヲ贊助セラレ御寄附相成御厚志之段感謝之至リニ候也

明治三十六年九月三十日

廣島招魂祭委員長 正四位勳三等 徳久 恒範

愛國婦人會廣島支部 御中

支部長更迭 支部創設に關し、且其後引續き會旨宣傳、會員募集等に關し、多大の盡力を爲し、本縣支部の基礎を築かれし江木支部長には、同様創設の功勞大なりし知事閣下熊本縣へ御榮轉に伴ひ共に同縣支部に御轉任に付ては關係役職員は申すに及ばず、一般會員非常に別れを惜しみが、官命如何ともする能はず、只感謝の誠心を捧げ、御健康をお祈りして御見送りしたのである。而して後任は新任徳久知事閣下夫人徳久張子殿を御迎へしたのであつた。

會員名簿調整 閑院宮妃殿下本會總裁に御上任遊ばされしに付ては、現會員は勿論、爾後入會者ある毎に、總裁の御名を記入せる協約狀交付せらるゝ趣に付、會員名簿備付の要ありとて様式を示し、之が調製方示達ありたり。

東伏見宮殿下御來廣 殿下には十二月十二日舉行の江田島兵學校卒業式へ御成の御由にて、市内長沼旅館一泊あらせらるゝに付支部長以下評議員幹事御出迎申上げた。尙御旅館に於て幹事以上に拜謁を賜はり、奥村女史と愛婦に關する御話を賜はり一同恐懼して退下せり。

奥村女史病氣賀屋女史代理す 第二回本縣遊說中の奥村五百子女史は、十二月一日安佐郡可部町に出講豫定の處、病氣に付、左記電報を發した。

「奥村五百子病氣ニテ本日ユカレヌ代理トシテ賀屋鎌子行ク一行六名」

安佐郡幹事宛

幹事長

因に一行の氏名左の如し

賀屋鎌子、三橋教子、温田多子、高野米子

尙同町では郡長夫人加藤幹事の外松浦リウ其他多數迎送せられた。

奥村女子の責任感と隱憂 前記可部町代理出張の賀屋氏の講演は、非常の盛會であり、有効であつたが、歸途祇園神社の社掌に面會婦人會の事を依頼せんとて人力車を停め立寄られし所、丁度當日同社の例祭で、無理に引止められ歸廣を遅れて奥村女史の旅館を伺はれし所、女史は大變に不機嫌であつた。それは當日女史は一刻も早く可部の狀況が聞きたかつたので一行の歸廣を待詫びて居られたのである。然るに一行は九時に歸廣されたのである。それは止むを得ざりし事

情とするも、女史の熱心と責任感の強きとには賀屋氏初め皆々敬服恐縮されたのである。次に廣島に於ける講演の最終日即ち翌日は吳市に向はれる前夜、大手町八丁目の竹茂と云ふ料亭で御慰勞の晩餐會を催ふせしが、當夜女史は非常の上機嫌で「今回の遊説は各地共盛會であり即時入會の申込も相當多數であつたのは満足である、嬉しくてたまらない。それで何か隱憂でも御覽に入れて、満足の氣持を表はしたいとて、先づ最初、小話、次に朝顔日記のさわり、次には三味線をお持ちになつて御所車をお弾きになつたが、何んでも御上手で居並ぶ一同は大いに感嘆したのであつた。

「奥村五百子氏來縣會旨遊説に關し徳久顧問（縣知事）より本部佐藤少將宛狀況報告の書簡は左の通り」

拜啓年内無餘日御繁忙拜想致候、扱先般奥村女史來縣中ハ日々諸方演説其ノ精神氣力勉強ハ男子モ赧然仕候程ニテ縣下到ル處被爲歡迎其中病氣モ有之忍テ奔走中一日西條ヨリ歸ヘリ來リ大ニ相苦ミ皆々甚心配致一日療養幸ニ輕快ニ赴キ翌日ハ醫師ノ注意モ不顧約束アリトテ忍ンテ出懸ケ人皆如何ト存居候處其儘押通サレシガ差シタル事ニ不相成全快致候儀ハ一同ノ仕合ニ有之候本縣巡回モ段々長ク相成其内 東伏見宮様御來廣ノ事相分リ同女史モ其ノ爲メ滞在シ役員拜謁ノ事等幹旋相成 殿下ノ御着廣ハ深夜ニテ御疲勞中ニモ不拘一同ニ拜謁ヲ賜ハリ厚キ御言葉ヲモ被下一層感激致シ候女史ハ翌日愛媛縣へ出立相成申候女史以前熊本ニ參ラレ候節大體ノ會旨ハ私宅ニテ承ハリ其儘上京セシタメ公開デノ御演説ハ不承今度師範學校女生徒並高等女學校生徒ニ一場ノ談話ヲ頼ミ傍聽仕候處北清事變中戰敗國男女ノ目モ當テラレザル慘狀、日本軍隊ノ困苦傷病兵ノ悲慘ノ模様等事細々實際ノ狀況ヲ語リ「是ヲ不知内地ノ婦女子ハ愛國ノ爲メ何モ知ラズ徒ニ衣服髮飾指輪履物ノ末ニ心ヲ奪ハレ勤儉貞淑ノ女徳ト一家整理ノ天職トヲ忘レ曳イテ良人ノ操行心術ヲモ腐敗セシメ甚敷ハ不義不正ノ罪ヲ得テ固圍ニ呻吟致候者年一年ニ多ク時ニ朝夕新聞ヲ見ルニ戀愛小説ト猥褻記事ニ眼ヲ注ギ現時ノ日露關係ノ如キハ我國ノ興亡問題タル事ヲ不知如キ觀アルハ何タル現狀カ古ヨリ賢人君子英雄豪傑ハ賢母良妻ノ薰陶内助ニ依ルモノ多ク又柔能ク剛ヲ制スル格言アリ今日ノ女子眼ヲ覺サバ良人子女ノ心術操行ヲ矯正シ一家ノ整理ハ勿論

畏レ多クモ上不世出ノ 天皇后兩陛下ヲ戴キ下ニ忠勇無双ノ海陸軍隊アリ何ヲ爲サントシテ成ラザル事ナキ千載一遇
 女子ノ眼ヲ可覺時ハ實ニ今日ナリト現ニ己レヲ忘レ熱涙ヲ注ギテノ演說ニハ泣カザルモノ無之現下ノ國情上有益必要
 ノ大演說ニ有之實ニ感服致候此ノ演說ノ大體ヨリ猶各女學校等ニ廣ク聞カセ候事女子ノ精神教育ニ必要ノ事 殿下ニ申
 上候處岩倉ニ傳ヘ文部大臣ヘモ相談致サルベク尙小子ヨリモ其ノ事申立候様御沙汰相成候條來春三月女史上京ノ節ハ貴
 下ヨリ其ノ向ヘ可然御盡力可被下又本年役員中ニモ稅所少將三橋書記官上田男爵夫人賀屋三浦溫田ヲ初メ其他熱心ニ盡
 力相成漸次盛況ニ相赴キ候様御安心可被下又中村モ年若ニ似ハズ能ク勉強相成感心仕候先ハ概況御報旁如此ニ御座候
 十二月廿二日
 草々頓首

佐藤 少將 殿

德久 恒 範

追テ來年三月女史上京途中當地ニ一兩日立寄相成候様致度是亦御含置可被下候

支部顧問と支部長 十二月十九日附を以て地方長官に支部顧問を囑託し同時に支部幹事長を支部長副幹事長を副支部長と
 改稱することゝなれり。

縣支部主事 縣支部に主事を置くことゝなり十二月二十六日事務主任門川正之主事兼務を命ぜられた。

第四節 明治三十七年

支部長 山田 竹子
 主事 門川 正 之

會員増募と支部長 一月十九日付徳久支部長は左記標準を示し、本年二月末迄に増募方各幹事宛依頼狀を發した。

吳市及尾道市 各五百人以上 各郡幹事部 各三百人以上

新年協議會 一月廿四日支部長以下市内役職員は、新年初協議會に併せて偕行社に於て懇談會を催ふした(市外幹事へも
 通知す)

(準備) 會費參拾錢持參、折詰(むすび)、餘興(福引、軍談、手品等)、衣服(隨意)、家族同伴會費を要す

右出席總員は三百四十貳名であつた。

日露風雲急 日露の風雲急を告ぐるや、本部役員岩倉公爵夫人以下、徳川、島津、毛利、大山、鍋島、谷、伊藤、清浦、
 千家各公侯子男爵夫人外有志夫人本會々員の肩書を以て左記注意書を發表した

「刻下時局に鑑み緊急に我國二千五百萬の姉妹方に申す我等大和民族は何ぞ其れ多幸なる稷威天日と俱に輝ける
 天皇の御國に生れ國光宇内に宣揚せる明治の聖代に遇ふ此の多幸なる國民にして、一旦緩急ある時に當り争でか祖先
 の遺風を顯彰して忠愛義勇の丹心を發揮し優渥なる聖恩に報ひ奉らでやあるべき(中略)今や將に開闢以來未曾有の事
 あらんとす須らく舉國一致の力を以て皇運を扶翼すべきを要す即ち男子たると女子たるとを問はず各其本分に任して半
 乎たる覺悟を定め男子は背血を濺きて其の衝に當るべく女子は後顧の憂を慰めて士氣の振興に力むべきの秋なり我が愛
 國婦人會は軍人の遺族と廢兵とを救護する旨趣にして女子が直接邦家に對する奉公の本分を全うせんために組織せるも
 のなれば刻下の形勢に當つて大に活動すべきである」云々

連 名

明治三十七年一月二十三日

救護資金御下賜 畏くも 天皇后兩陛下に於かせられては本會實施の戦死者遺族及廢兵救護の趣被聞食、二月廿九日左記の通り御下賜の恩命ありし旨本會より通達あり一同恐懼したのである

其會設立戦死者遺族及廢兵救護ノ趣被聞食 思召ヲ以テ金七千圓下賜候事

明治三十七年二月廿九日

宮内省

愛國婦人會

其會設立戦死者遺族及廢兵救護之趣被聞食

皇后陛下思召ヲ以テ金五千圓下賜候事

明治三十七年二月廿九日

宮内省

愛國婦人會

本會第五回大會 三月廿七日 總裁閑院宮御邸に於て、本會第三回大會舉行に付ては、一般會員に通知し當日支部よりは

支部長外十餘名參列した。

皇太子同妃兩殿下より御下賜金 曩には天皇后兩陛下より御下賜の御沙汰ありしか、今回亦 皇太子同妃兩殿下より

金貳千五百圓御下賜の御沙汰ありたる旨本會より通達ありたり。

總裁官殿下御寫眞下賜 四月二日附本會長より左記の通示達あり、恐懼拜承す。

今般 總裁官殿下ヨリ御寫眞下賜相成候ニ付復寫ノ上貴支部へ御送附致候條會員總會等ノ節ハ一同拜禮可被致尙平素大切ニ御守護有之度此段申述候也

愛國婦人會長 公爵夫人 岩倉久子

吳海軍病院慰問 吳市幹事部では幹事澤原コト子女史本會を代表して左記の通、二回に涉り病院を慰問した。

三月廿六日巻煙草八拾個持參、五月廿九日金五圓持參

海軍家族共勵會へ寄附 吳海軍鎮守府に於て下士卒家族共勵會設立に付、協賛の意を表せし所、左の謝狀を送られたり。

一金拾圓也

右ハ本會ノ主旨ヲ賛シ御寄贈相成御厚志ノ段感謝ニ堪ヘズ依テ茲ニ謝意ヲ表シ候 敬具

明治三十七年十二月十八日

吳海軍下士卒家族共勵會長 柴山琴子

愛國婦人會廣島支部 御中

廣島陸軍病院へ盆裁寄贈 廣島陸軍病院にて加療中の白衣勇士に對し、支部より慰問として、盆裁百鉢を寄贈した。

北島權掌待出迎 今回傷病兵士慰問の爲め 皇后陛下御代理として御來廣に付副支部長及幹事は廣島驛に御出迎へした。

會員の増加 徳久顧問の激勵により會員頗る増加し其九月末現在調は、次の通で女子人口千人に對し八人八分に達す

特別會員八七二名 通常會員五、二二二名 計六、〇九四名

第五節 明治三十八年

支部長 山田竹子

主 事 門川正之

北白川宮殿下御凱旋 一月廿一日午後、廣島驛御着御凱旋御下車あらせられ、同廿四日午前御發歸京あらせらる。支部長以下各役員は廣島驛に御迎送申上げた。

本會第四回總會 四月二日東京九段偕行社に於て開催せられ、各府縣支部長は會場に於て、特に皇后陛下の拜謁を賜はる、而して今回の出席者は山田支部長外十二名であつたが本年よりは 總裁邸拜觀を差許され

た。

出征軍人慰問繪葉書 今般本會の計畫に依る陸海軍出征軍人慰問用繪葉書左記の通り申込んだ。

第一回申込 六千六百枚 此代金金貳拾九圓七拾錢

第二回申込 壹萬貳千三百八拾枚 此代金五拾五圓七拾壹錢

第三回申込 壹萬五千八百六拾枚 此代金七拾壹圓參拾錢

第四回申込 五千三百枚 此代金貳拾參圓八拾五錢

合 計 四萬百四拾枚 代金百八拾圓五拾六錢

釀金免除と佩有功章者 明治三十八年二月より佩有功章者は年釀金免除の特典を與ふることとなる。

傷病兵士慰問と扇子 今回廣島縣下陸海軍傷病兵士に對し、本會より慰問の爲め、扇子一本づゝ配贈方申來れり。在院患者數は、陸軍四千貳百八拾八名、海軍貳百六拾壹名である。

寄附者と基本金積立 自今寄附金の十分の三を支部基本金として積置く事となれり。

靖國神社臨時招魂祭 本年五月三、四、五の三日間執行せられる招魂祭に招待を受けて上京したる軍人遺族には、本會邸

園内に休憩所を設け、東京市内役職員は茶菓を供して接待せり。

戰地慰問狀況報告 豫て出征軍人慰問並戰地視察の爲め、奥村刀自に従ひ渡清中なりし、本會遊説員野中彌知子女史一行歸京の途次當地にて實地視察狀況報告講演會を開催し、支部長以下役員會員多數聽講感激に滿ちた。

皇軍捕虜軍人慰籍 縣下世羅郡各町村に於ては、幹事部長以下各町村幹事協同、一般同志の婦女子より義金募集左記の通り傳情報局宛寄贈せり。

一、金貳百貳拾七圓參拾壹錢 釀金人員三千三百三十九人

軍人援護 當支部内軍人戰歿者及准戰死者遺族に對し、本會より贈呈の救護金左の如し。

金三百四拾七圓五拾錢 三十六年分

金六百七拾二圓 三十七年分

金七百二拾九圓 三十八年分

金三百七拾二圓 三十七八年(臨時ノ分)

計 金 二千百二拾圓五拾錢

軍隊送迎慰勞會 時局中廣島驛並宇品港に於て輸送軍隊を歡送迎し、就中、昨三十八年十月末より開始せられたる、凱旋軍隊輸送に際し、廣島軍用停車場に於て、湯茶の接待を兼ね、歡送迎に従事したる當支部役員並廣島市幹事部會員に對し、今般輸送終了を機とし、支部及市幹事部並廣島軍人待遇會合同し、四月廿八日東練兵場内軍用停車場に於て、慰勞會を開催せり。當日の狀況は記念撮影をなし、機關誌「愛國婦人」に掲載せり。

一、當日の參會者 廣島停車場司令官成川少佐以下十三名

- 一、線區司令部出張所長 大尉以下四名
- 一、廣島運輸事務所長 渡邊金吾以下數十名
- 一、新聞記者 四名
- 一、歡送に従事せし會員 四百餘名

遺族優待 靖國神社大祭參拜の遺族は本會より之を優遇することとなり居るを以て優待員章を贈呈したり。
御諭旨を給ふ 日露戰爭終局を告げ、總裁殿下より有り難き御諭旨を賜はる。(前掲)

第六節 明治三十九年

支部長 山田竹子
主 事 門川正之

英國皇族歡迎送 三月七日、英國コンノート殿下、宇品御上陸御來廣につき、役員會員多數歡迎送申上げた。
皇后陛下令旨御下賜 明治三十七八年戰役中本會の功勞を表せられ令旨を賜ふ。(前謹掲)
臨時招魂祭參拜 明治三十七八年戰役中、廣島、尾道、兩聯隊區管内、陸軍々人軍屬戰歿死者の爲め、廣島市に於て臨時招魂祭執行、隨意參拜方一般會員に通達し、市内は勿論市外近郡よりも多數會員の參拜を見たのであつた。
總裁宮殿下御染筆複寫配贈 閑院總裁宮妃殿下御染筆を複寫し實費分與方本會より通知ありしに付き、管内各委員區へ其の旨傳達、希望數取纏め配贈方取計らひたり。

御歌
いまはとて散るを惜しまぬものよの
心に似たる山櫻かな

靖國神社臨時大祭と遺族接待 五月一日より執行の大祭參拜の遺族に對しては、東京本會構内に休憩所を設け、茶菓の接待及び記念品を贈呈せり。

第五回總會參列 五月二十日東京新宿御苑にて開催せられ、支部長外二十二名參列せり。

各都市顧問に懇請 七月廿一日郡市長會議に出席の幹事部顧問一同を大和樓に招待し、日露戰役救護資金増額上會員募集方依頼す、其の際主事口演要旨次の如し。

「戰時中當支部内ノ臨時救護ハ總額千五拾參圓ニシテ其ノ人員三百七十三人一人平均三四但シ病死者へハ貳圓デアツタサテ今回會員増募ノ必要ヲ生ゼシハ主トシテ日露戰爭ノ結果ニ外ナラズ、本部ノ調査ニ依レバ今回ノ戰病死者及廢兵ハ約十萬ニシテ之レニ日清、北清、西南戰役ヲモ加フレバ實ニ十數萬ノ多キニ上リ、就中救護ヲ要スベキモノ其ノ四分ノ一乃至五分ノ一トスルモ二萬以上四萬ニ近キ數ヲ覺悟セザルベカラズ。然ルニ此救護資ノ造成功ヲ考フレバ五十萬人ニ近キ會費騰出者アルモ、本部ニ於テハ廿五萬人ノ十分ノ七ヲ實收スルノミデアアルカラ之レヲ以テ諸般ノ費用ヲ支辨スルヨトハ困難デアアル。仍テ此際現在今次ノ五十萬人ヲ百萬人ニ増加シ全國ヲ通ジ女子千人ニ付キ四十人以上ノ會員ヲ得タシトノコトデアアル。就テハ募集費トシテハ會員一名ニ付キ拾五錢交付スベキヲ以テ幹事部長ヲ督勵シ好結果ヲ收ムルコトヲ得ベキ様御高配ヲ切望ス」

第七節 明治四十年

支部長	山田直竹子
主事	門川正之

主事専務 多年兼務主事たりし門川正之氏退官本年四月一日附を以て専務となる。

陸軍記念日役職員招待 三月十日は日露戦役陸軍記念日に付き、木越第五師團長より宗像支部長以下下記の通り招待せられ舊大本營構内に於ける祝宴會に列席せり。

上田副支部長、一ノ瀬評議員、三浦、賀屋、渡邊、早速、温田、有末、萬代、井上、高野、三坂、倉田、白坂、山本、林、小野木の各幹事及び高東廣島市幹事部長。

伯爵夫人と深安郡の入會 本部評議員伯爵夫人阿部篤子氏は舊領地の縁故もあり、四月十七日深安郡福山に來福、深安郡幹事部長外有志婦人を旅館に參集を求め、會員募集に關し懇談せられし處、忽ち九十一名の入會ありたり。

高田郡幹事部活動 高田郡幹事部は、四月十七日より五月一日迄の日程により、會旨宣傳會員増募の計畫を以て遊説員の派遣を申請し來り、支部は賀屋鎌子女史を派遣す。即ち郡内二十ヶ所にて二十二回の講演(場所によりては幻燈會をも)を爲したるが、聴講者總計九千七十名、同郡幹事部長天野久子氏は、始終隨行せられ其他豊島末子、小野喜久代、横田カヨ、三宅見子、兒玉セツ子、世良花子、望月シゲノ、向井いせ等の諸氏は便宜の會場にて幹旋盡力し、爲に即時入會申込者五十名に達せり。

吳市幹事部第一回總會 四月二十八日吳市第八尋常小學校に於て吳市第一回總會を開催記念として、總裁官殿下御染筆復寫千二百枚を參列會員に贈與した。當時吳市會員千六百女子人口百人に對し約四名であつた。

安佐郡下講演會 會旨宣傳の爲め賀屋鎌子女史の派遣を申請、五月廿五日より六月四日迄、十一日間郡内最寄三四ヶ町村づゝ聯合集合を求め講演會を開催した。

總裁官殿下迎送 山口縣支部總會へ御台臨の 總裁官殿下六月三日當市長沼旅館御一泊に付き支部長以下役職員廣島驛に迎送申上げ、宗像支部長は旅館奉伺ネーブル柑二籠を献上せり。

雙三郡幹事部義捐金 七月十五日の豪雨に慘害を蒙りたる安藝郡坂村矢野村奥海田村に對し見舞金五圓贈呈せられたり。三團體より義捐金 過ぐる七月十五日豪雨の爲め甚大の被害ありし、安藝郡奥海田村外二ヶ村に對し、愛婦支部は將校婦人會及日赤篤志看護婦人會と共に金參拾圓を見舞として寄贈せり。

日露戦役中功勞賞牌傳達 過ぐる明治三十七八年日露戦役中、軍隊の歡送迎等に關し盡力せし廉を以て、其の功勞の程度に應じ、本會 總裁官殿下より、金銀銅三種の賞牌を授與せられしを以て、七月廿六日廣島偕行社に於て之が傳達式を行ひたり、即ち左の如し。

- 金牌受賞者 十五名(上田種子、賀屋鎌子、渡邊田鶴子、温田冬子、井上、高野ヨネ、三坂、正田、萬代、倉田ヒサ、伴喜代、右谷ヤス、松本、伊原、竹内)
- 銀牌受賞者 三十四名
- 銅牌受賞者 四百三十六名
- 木杯受賞者 九名

廣島市内募集講演會 廣島市では、八月九日臺屋町專行寺を振出に、會員募集講演會を開催せしが、何れも相當の聴講者ありたり。因に當時の案内書及會場は次の通りであつた。

八月九日	臺屋町	專行寺
八月十日	段原村字比治山	説教所
八月十一日	宇品町	小學校
八月十五日	大須賀町	満景寺
八月十六日	鹽屋町	專勝寺
八月十七日	堀川町	永照寺
八月卅一日	河原町	説教所
九月一日	猫屋町	明教寺
九月三日	寺町	光圓寺
九月四日	中島新町	善福寺
九月五日	材木町	淨寶寺

案内狀「御婦人の方へ御知らせ」

来る〇日〇時より〇〇に於て愛國婦人會擴張に關する講演會を開き併せて筑前琵琶を聞かせ申度につき御婦人の方々御誘ひ合せ御來臨下さい、筑前琵琶は最も靜かに御聞き願度に付御子供方御誘合は御斷り致します。

凱旋部隊歡迎 日露戰役中編成せられたる、第十四師團は、平和克復後暫らく滿洲に残留中の處、左記日並の通り凱旋せられ、支部役職員並に市内會員多數は、宇品灣頭に歡迎した。

宇品上陸月日	凱旋部隊名
十月二十三日	歩兵第廿八旅團司令部、同第五十六聯隊
十月二十六日	騎兵第十八聯隊
十一月三日	第十四師團司令部、歩兵第五十三聯隊
十一月六日	歩兵第二十七旅團司令部、同第五十四聯隊
十一月十日	野戰砲兵第二十聯隊

第一回支部總會 支部創設以來茲に八年會勢年と共に進展し會員數相當増加せしを以て、支部總會開催の議申請せし所、總裁官殿下台臨の光榮に浴することの御允許を得たるを以て、愈十一月二十四日第一回總會を西練兵場に於て開催したるが、當日は岩倉會長評議員阿部伯爵夫人同片岡男爵夫人隨從せられ、支部側としては、支部顧問宗像知事、支部長代理上田副支部長其他役職員參列、來賓には木越師團長を初め多數貴賓の臨場を得近來稀に見る盛事にて嚴肅裡に終了した。(詳細は下編主要誌)

皇太子殿下奉迎送 十月十二日、軍艦香取に召されて宇品沖に御仮泊、翌十三日御發艦に付、支部長以下役職員御迎送申上げた。

宮殿下御機嫌奉伺 江田島海軍兵學校御在學中の有栖川宮殿下御不例に渡らせられ、宗像支部長は御機嫌奉伺の上御見舞として名産ネーブル柑二籠を献上された。

歸還部隊歡迎會 韓國駐屯中なりし、第十三師團各部隊は左記の通り歸還に付、宇品及廣島驛に於て歡迎送す。

一、十月廿七日 歩兵第五十二聯隊本部